

黒歌が可愛くてつい始めた話。

楯樗

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

何の因果かハイスクールD×Dの世界に転生(?)してしまった男子の話。

某黒猫がヒロインで、きつと純愛(↑ココ重要)モノになる予定。

※8/25 四巻部分の章題変更

# 目次

玄関前のプロローグ

夢が現実になる日 | 1

初めてお泊りさせた日 | 3

人生の転機の日 | 7

三年経った四月のある日 | 11

旧校舎のディアボロス

変動した日 | 15

変動、その次の日 | 20

始まった日 | 25

龍を知らせる日 | 30

悪魔になった日 | 34

討伐の日 | 40

出会う日 | 45

自覚させる日 | 49

禁手する日 | 54

ヨミガエル日 | 59

転生する日 | 64

戦闘校舎のフェネクス

修行に行く日 | 71

修行を始める日 | 76

説得する日 | 82

鍛え始める日 | 87

走らせる日 | 94

出会う、その日 | 99

聞かない日	105
憂いを解く日	110
仙術を教える日	117
試合を始めた日	123
追い詰める日	130
試合が終わる日	137
デートする日	142
木葉舞のダイグレッション	
実家に連れて行かれた日	149
宴をする日	156
揺らぐ日	164
はつきりする日	171
デートが終わった日	181
月光校庭のExtraCaliburne	
やっちゃった日	187
怒られる日	194
手合せする日	202
チャックボーンした日	210
思い出した日	217
突入する日	226
至る日	233
対峙する日	239
停止教室のバリエーションロード	
プールに入る日	247

## 玄関前のプロローグ 夢が現実になる日

唐突だが俺は転生者、というやつらしい。

俺みたいな、前世(?)の記憶がある奴の事をさすのだそうだ。

Goog先生が言ってた。

そして今居るこの世界はハイスクールD×Dの世界である事がわかって居る。

……いや俺、痛い子じゃないし。

厨二病は終わったし……ないよね。

寧ろ俺がツツコミを入れたい位だつてのに。

それなんて二次小説? ……とまあそんな具合に。

なんでこの世界の事が分かったかと言えば……ま、色々で追々だ。ちよつとしたチート能力だということぐらいだ。

……まあ、そんな俺のチート能力はともかく。

15、6年に渡つて『前世の記憶がある』という秘密を俺は誰にも話さずにいる。

今も尚誰にも話していない。

新しい父にも母にも。

……いや、人は変わった気がしないんだけど。

前世と同姓同名に加えて同じ顔。

まあ自分の、何かに秀でたようでない顔も変わって居なかつたら、おそらく遺伝子的にもなにも変わっていない気がする。

うん。

……話を戻すが彼是をあれこれひた隠しにしてきたわけだ。

一応聞き分けの良い子供を演じてきた訳だ。や、頑張れば役者になれるかもしれない。……そんな事は無いか。

と、まあほとんど同じ人生を幼少の頃から歩んでいるとはいえ、それでも人生のやり直しは発狂モノだ。

だがしかし俺はなんとかやってこれた。

それというのも、この世界がハイスクールD×Dの世界だと知って、夢が出来たからだ。

……その、神様転生でチート能力を貰ったわけでもない俺の発狂抑制の夢もしくは野望。

それはこの世界で起こる『ハイスクールD×D』への原作介入……ではなく。

美女率の多いこの世界でハーレムを持つ……事でもなく。

介入と言えば介入かもしれない。

俺はある登場人物と健全なお付き合いがしたいのだ。

具体的には夫婦の関係くらいになりたい。

そう、この逆る熱情はフォーエバーなのだ。

……自分でも何をいつているのか分からない。

いや、今起こっている現状に俺は浮かれているのだろう。

きつとそうなのだ。そうだと言ってくれよバーニイ。

……そんな浮かれている、これから起こりうるであろう物語の主人公が聞けば「小さい夢だな」と言われそうな野望を持つ俺。

だがしかし、かつての前世では大きく愚かな夢。

自分が積年望み求めるその登場人物。

猫？、という仙術に長けている猫又の妖怪――。

――猫？の「黒歌」。

起こりうる『物語』でSS級の犯罪者、『禍の団』のテロリストの一人になっていた心優しい白猫の姉が、自分の家の前に傷つき倒れていた。

……思わず信仰してもない神様仏様に手を合わせたのはご愛嬌ということ。

## 初めてお泊りさせた日

諸君、私は黒歌が好きだ。

諸君、私は黒歌が……（ry）。

……詰まるところあの猫？、黒歌が好きだ。

白い肌に映える黒い髪。

妹を思い、自ら追われる事をよしとする愛情。

容姿も性格も完璧。

俺的御嫁にしたいランキング一位。

そうこの世界の事に気づいてから15年と少しの間、常々思っていた。

……しかしそれは先ほどまでの事。

「気がついたら悪魔の翼が生えた中学生くらいの黒歌が傷ついた様子で俺の家の前に居た”

何を言っているのかわからないと思うが俺も何を言っているのか分からない」

つい俺がポル略をするのも無理はない。

だが、言える。

俺は自重を辞めるぞー！ ジョジョオオオツ！

『黒歌を嫁にするために　　怪我をしている所を発見した場合』

——怪我をしているのなら、まず何処か人目の着かない所に移動しましょう。

貴方がもし神器を持って居るなら別ですが、きっと追手もしくは敵が近くに居る可能性が高いです』

残念ながら神器は持って居ないがそれに準じる程の能力はある。なので家の中から救急箱を持ってきて、この場で手当てを開始。

「餅肌だ。ぶにぶにしてる——はっ……イカンイカン」

煩惱退散煩惱退散。

『黒歌を嫁にするために　　目が覚めて自己紹介』

手当てが終われば彼女が起きるのを待ちましょう。では起きてか

からです。自己紹介をしましょう。挨拶は人の基本です。原作時期にもありますが、禍の団に既に入っていない状態ならばきつと警戒心が強いです。なので注意が必要。……とは言え既にテロリストであつても彼女も一個人。見知らぬ男性相手ならば警戒もします』  
よし、家に上げて起きるのを待とうか。

『あ、一つ。人型の場合、家に連れ込んだりするのはお勧め出来ません。出来れば家の出口に近い庭や軒先に寝かし、寒く無いよう毛布を掛けて起きるのを待ちましょう。好きなのは分かれますが早急過ぎです』

「あ、危なかった。そう言えばそうだったな……でもどうするか……むむむ」

彼女、黒歌を抱えて唸る。

なら敢えて此処は……

「——連れて入ろう。一応窓際のソファーに寝かせよう」

一軒家。

親の居ない屋根の下一つに俺は黒歌を運び入れた。

長年練りに練ったマニュアルはその時になるとあまり役にたたない事が分かりました、まる

「——……うん？」

目が覚めて、目の前には知らない天井。

否、私にとって天井と言うものが存在する場所で寝たのは忌まわしいあの悪魔の屋敷で過ごした2年間だけだ。

私、黒歌は『猫？』と俗に呼ばれる猫又が転じた仙猫であり、一昨日主を殺して逃げ、人間界の何処素知らぬ場所で行き倒れたのだ。

しかし、私にとって壁紙の張られた天井にはとんと覚えが無い。よつて他人様の家の中で生き倒れるはずはない。

そのため、私を此処まで運んだのはきつと邪な考えがあつてか……  
と思ひ至つて、身体に痛みを覚えた。

「——つううー！」

ああ、たしか痛めつけられた。



傷口は消毒してあり、包帯が巻かれている。助けてくれた誰彼がやってくれたのだろう。

有り難く思うが、その根底に下心があると分かっているとどうにも心から感謝出来ない。

……悪いが此処は早くお暇させて貰おう……。

「そこのお姉さん。折角お粥作ったんだ。食べてつてよ」

「——ッ!?!」

背後。座っているソファーらしき物の後ろから声がして振り返る。

……鍋掴みで小さい土鍋を持ったなんとも言え無い少年が居た。

歳は十五、六だろうか。顔立ちが良いとも言え無いが、悪いとも言えない。……ただ、平凡な容姿でもない。

そこそこ鍛えているのだろう。彼の『氣』の巡りは良かった。

「……ま、色々聞きたいだろうけどさ。……きつとお腹減つてると思うんだけど?」

言われて空腹に気づいた。

どれくらい寝ていたのだろうと思いつながら、改めて体に何かさされて居ないかどうか氣で確かめた。……どうやら何もされていないらしい。

少しだけ彼の事を信用してみよう。

……意識のある女を無理矢理……という趣味がある外道である事も、もしかすればあるかもしれないけど。

「……じゃあ少しだけ頂きますっ」

お礼をしようと頭を下げただけで身体が軋む。

アイツら……やってくれた。

「何があつたのか分からないけど。体中痣だらけで骨も何本か罅いつてみたいだから……食べさせようか?」

「いや、けっこ——ううっ!」

「はははっ、まあまあ遠慮しないで……ほい、あーん」

「いや、自分で食べられますからっ——!?!」

身体が軋み、拒否する間もなく口に運ばれたその粥。

美味しい。多分、玉子粥だろうか。良い具合の塩加減で、しょっぱ

過ぎず。かといつて薄過ぎず。

仄かに香る醤油の香ばしい匂いが少し口の中に残る。

「——にゃあ」

飲みこんだ後、思わず声が漏れる程には。

「にゃ？」

「あ、や、えっと……予想以上に美味しかったので……」

正直な所、人間の姿から猫？に戻りそうになっていた。

不意打ちはいけない。不意打ちは。

「そっか。それは良かった。……はい次、あーん」

彼はそんな私の内心の事など露知らずな様子で、美味しいと言われ  
てにこやかにこちらを見ていた。

「え、——ん」

レンゲに乗せられた玉子粥が口の中に運ばれる。

話を聞かない失礼な人だな、と思いながらも甘んじてその運ばれて  
くる粥を受け入れていた私はきつと弱っていたのだ。

……そう。きつとそうに違いない。

見知らぬ男性への警戒も。白音の事、悪魔の事。

何もかも忘れて何だかんだとお風呂に入れさせられて、彼の家になら  
ぬ日泊まる事にされていた私。

そう、彼が悪い。

美味しいご飯が悪い。

温かいお風呂が悪い。

だから私は……悪くない。

## 人生の転機の日

黒歌と言う名の猫？を拾って、翌朝。

海外出張の多い両親を持つ俺の家に、件の彼女は居た。

というのも、もう既に肩を貸す事は無くなっていたものの、まだ体を動かすのに差し支えがあるようだったからだ。

彼女が言うに逃亡中なのだとか。

犯罪者？ と聞けば、きつとこの家から出て行く事になるだろうか  
ら聞かなかったのだけど、激しく動くかもしれないならちよつと休  
め、的な事を言つて昨日は留めた。

……一生に一度も無いだろう機会を逃すわけには行かないのだ。

「黒歌さん。身体の調子は大丈夫？」

「うーん……まだちよつと本調子じゃ無いかな」

にやはは、と笑う彼女の笑顔が眩しい。

気を抜いたら鼻血が出ちゃうくらいだ。

一日やそこらで治る怪我じゃねーよ、と言いたかったが本当に治つ  
てきているので妖怪と悪魔の再生力は凄いと思う。

「……でも明日にはもう出て行くから。……色々有り難う、奴良さ  
ん」

「いや全然。むしろずっと居てくれても構わないんだよ、こつちとし  
ては」

「……有り難い話だけど迷惑掛かるし。きつと私の追っかけがこの家  
に襲撃してくると思うから」

「……」

むうー……。

このままだと明日には行ってしまう。

……ならもう言つてしまおう。

「黒歌さん。……俺も明日、一緒に行つても良いかな？」

「駄目！ だつて」

「黒歌さん人間じゃないんでしょ？ 馬鹿みたいに回復早いし。それ  
に俺も人間と少し違うし……ほら」

「へ？ ……嘘っ！」

黒歌さんの後ろに移った。

「ね？ まあ、でも身体は普通の人間だから……って、なんでそんな警戒してるの？ 気持ちは分かるけど」

「……私を嵌めたのにかにゃ」

「そんなつもり更々ないんだけど……ま、生まれ持ったの能力スキルなんだ。ちよつと触ってみて」

手を差し出す。

「……………ナニコレ？ 干渉出来ない？」

触れているのに触れて無い。

押しているのに押していない。

あらゆる意味で干渉出来無いのだ。

厳密には違うけど……敢えて厨二っぽく名づけるなら『位相操作』みたいな？

「……………OK？」

「……………でもにゃ。君は分かって無い。きつと君が黙って出て行ったらご両親も心配する」

「そんなことないよ……家にはすぐ帰ってこれるし。……黒歌さんさえよければこの家を隠れ家にしてもらっても問題無いわけで。あ、勿論ココに住んで貰っても構わないから」

「だから！」

「家も細工してんだぜ？ 俺と黒歌さん以外にはさつきみみたいな事になるし、なんかこうオーラの的な物も絶対に感知されない」

「……………」

黙ってしまった黒歌さん。

むー……………行けるか？

「……………どうかな？」

「ちよつと考える時間が欲しい。……明日。明日決めさせてくれる？」

「うん、了解。……で、朝食はどうします？」

「……………空気読めないねって言われるでしょ」

「何ソレ美味しいの？」

はあ、と溜め息吐かないで貰いたいものだ。

困惑。

今の心境はソレに尽きる。

まさかこんな事になるとは思いもよらなかった。

でも運が……私にも向いてきたのかもしれない。

ただ……ごめんなさい白音。

お姉ちゃん、あなたと一緒に連れて行けば良かった。

きつと今頃冥界では、私は主殺しの大罪人として指名手配されていると思う。

……私を拾った彼。

リクト、奴良陸人はよく分からない。

分からないけど、きつと良い人……なのだと思う。

幾らこんな美少女だからって家に入れて、世話をしようだなんて思わないと思う。

何かから逃げてる、って聞いただけでも厄介事の匂いがあるもの。

あと臭いも……身体洗ってなかったから。

それについて聞いてみてみただけ、『私だから』って答えられた。

彼は訳の分からない能力を使う。……分からない。

彼は美味しいご飯を振舞ってくれる。……分からない。

なんで優しくしてくれるのかが分からない。

……厄を運んで来るかも知れないって言うのに。

自惚れかもしれないけど、彼が私に優しくしてくれる理由は……私の事が好きだからだろう。

でも、なんで？

一目惚れって感じじゃ無い。

あれは……前から私の事が好きだった、って感じだった……彼の出す匂いからして。

なんなんだろうか、彼は。

何やらこの世界の裏の事も知ってそうだし……自分の力の事につ

いては詳しく言わないし、私の事についても追及しない。  
もう五日。

結局リクトの家に住まわせて貰うことになったけど……そろそろ  
ちゃんと話さないといけないと思う。

色々。

……というか私が申し訳無い気持ちで押しつぶされそう。

白音。お姉ちゃん、ストレスで胃に穴が空きそうだよ……。

「何してんの？」

「あ、や、なんでもないにやー……」

書いてた日記見られそうになった。

恥ずかしい。

にやー……にやー……。

「コレから買い物行ってくるけど……どうする？」

「うんつと……アイスが欲しいかにやあ……つて」

「了解。……じゃ、行ってきます」

「……気を付けてね」

行ってらっしゃい、は言わない。

ちよつと残念そうだったけど……ケジメは、つけるところはつけと  
かないと。

きつと私が『いってらっしゃい』を言う日は来ない。

## 三年経った四月のある日

駒王町。

春、麗かな日差しの下で桜の木が揺れていた。

そんな何処にでもあるような、名門女学校であった私立駒王学園があるだけの町。

……其処が名門貴族、悪魔グレモリーとシトリーの領地である事を除けば、だけでも。

「それにしてもグレモリーか」

「……」

新年度入学式の翌日。

黒歌が妹の気配がする、というので此処駒王学園へと連れてきたのだけ。

……案の定彼女の妹白音は新一年生として入学していた。

「……でもまあ、鬼畜外道な輩が妹さんを引き取ったりしなかったから良かったんじゃない？」

「……うん」

「話してくる？」

黒猫の姿から人間の姿になって鞆の中から出てきた黒歌は俯き首を横に振る。

やっぱり拒絶されるのが恐いんだろうか。

まあ、新入生の塔城小猫……白音ちゃんから見れば、仙術に溺れて主殺しをした姉、って風に演じてたらしいし。

「……まあ、機会があれば話せるさ。きつと」

「……ごめんじゃあ」

俺の通う駒王学園。その高等部三年。

態々隣町から通う事に決めた現在18歳の俺は、現在淡い二度目の青春時代最後の年を送っていた。

残念ながら原作キャラ……オカルト研究部の面々とは違うクラス。

だから関わりも全然無い。

「帰ろうか、黒歌さん」

「……うん」

人目に気を付けて、俺はお得意の能力で家に帰還した。

「リクト、ご飯何が良いかにゃん？」

「何でも良いけど……生姜焼きかな」

「りよーかいにゃー」

エプロンをつけて張り切る黒歌。

彼女の中で何があったのか知らないが、毎日の食事を作ってくれるようになった。

確かに俺としては有り難い。そして嬉しい。

ただ『迷惑掛けている』と、気負ってやってきているなら申し訳無い気持ちになる。

本当のところはどうなのだろうか。

女として料理の腕が負けた事が苦やしかったのか、はたまた住む場所を提供している事への恩返しなのか。

恩返しなら、リアルで猫の恩返しだなあ、とか阿保なことを考えつつエプロン姿の彼女を脳内に収めていた。

「……ジロジロ見ないで欲しい。気が散るにゃ」

「ごめん。かわいいなあ、って思ってた」

「はいはい。どうもありがとね……お皿出しておいてくれるかにゃ」

「りよーかい」

新婚夫婦みたいだが違うんだ。

カップルでも無いんだ。

……

「……はあ」

「……うにゃ」

溜め息をつく俺、フライパンを握る黒歌は溜め息をついた。  
どうにもこうにも……世の中儘ならない。

「うーん……70点」

「あと30点かにゃあ……」



この家の主、奴良リクトは料理に厳しい。  
何故かは分からないが途轍もなく料理が美味しいのだ。  
なんとというか心に響く料理と言ったら良いかな。  
——とにかく美味しい。

調味料とか普通なはずなのにやあ……。

「まあでも初めの頃よりは成長したんじゃない？」

「うっ……言わないで欲しいにやー……」

恥ずかしながら、リクトに会うまでは料理なんてお粥や簡単に作れる玉子焼きくらいしか作れなかった。

でも、玉子焼きには自信はある。

……褒められたし。

「料理してちよつとは気が晴れた？」

「……まあ、少し。でもやつぱりちよつと」

「そっか。……白音ちゃん。笑顔の似合う女の子、じゃなかったよね……笑うそぶり一つも見せてなかったし……」

私のせいだね。……ごめんね、白音。

「ま、元気そうで良いじゃない。昼食もしっかり食べてたし……ちよつと食べすぎな気はするけど」

「にや、にやははは……はあ。……食べれる時にはしっかり食べときなさい、つて死んだお母さんに言われてるから」

「数の少ない妖怪だもん……命を狙われる事も多いだろうし。……でもアレはちよつと一言言わせて貰いたいくらいの偏食だな」

「やつぱりそう思うにや……」

お姉ちゃんは白音がデブのぽっちゃりにならないか心配です。

まあ、ぽっちゃりな白音も可愛いと思うけど。

「さて。そろそろ俺、あつちの世界に首突っ込もうと思ってます」

「……本当に良いの？」

今まで認識されないようにしてたのに。

「とは言うものの色々やらかしてるから今更なただけど。……まあでも、きつと黒歌の手配書を取り消す功績を作ってみせるからさ」  
「……」

……そろそろリクトにちゃんと答えてあげても良いかなって思う。でも、白音との事。ちゃんと決着をつけてから。……でもまだ決心つかないからもうちよつとだけ。

「……私についてはもうちよつとだけ待ってて欲しいにや」

「うん？ ……まあ、気長に待つよ。……早ければ嬉しいけどさ」

一応、もう気持ちは伝えているのだけど。

別に私は嫌いつて訳じゃない。お付き合いの事、考えてみるって。

私と白音との事が解決するまで私は自分の幸せは望んじや駄目だから。

——春。リクトが高校生最後の学年。

始まった新年度で何が起こるのか……まだ私には想像つかない事だった。

## 旧校舎のディアボロス 変動した日

ハイスクールD×D

今世の大元、世界観が書かれた原典になる話である。

転生者が言う所の『原作』だろう。

……さて、ハイスクールD×Dといえば、兵藤一誠という変態を主人公にして廻る前世における物語だった。

聞いても誰も信じない話だろうが、俺はこの世界に転生(?)した。その神魔妖仏が跋扈する世界に生まれた自分。

輪廻転生。

三次元の世界からの二次元にあった世界に生まれ変わった自分にはある能力があった。

便宜上厨二っぽく『位相操作』としているが、抽象的には『ずらす程度の能力』である。

ずらせる範囲が広いから『程度』だ。

決して某弾幕シューティングから取ったわけでは無い。

……ずらすのは、誰かからの『認識』であったり『位置』だ。

それに『空間』『時間』……そして『世界』。

『ずらす』と思えば何でも『ずらせる』。

……だからこの能力を黒歌に初めて見せた時、黒歌が『接触的干渉』が出来ないように自分の『存在』をずらしたのだ。

なんでこんな能力スキルが使えるのかは分からない。

けどこの能力スキルはなんだか自分の中で「使えて当たり前」の認識なのだ。

Fate風に、もしかしたら『ずらす』のが自分の起源なのかもしれない。

なんだかネーミングセンスねーと思う。

……なんか無かったのだろうか？

いや、過去の自分に言っても仕方ない。

「おい、リクトー！ 食堂行こうぜー！ 今日弁当忘れちつてさ」  
「そっか。なら今日は食堂で食うか」  
「おっしー！」

級友の男友達と駄弁りつつ食堂に向かう。

そんな何時終わるか分からない青春を過ごす駒王学園での生活だった。

ちなみに弁当は黒歌作。

そんな関係で無いにしろ涙がちよちよ切れるくらい嬉しい。

——いただきます。

そんな訳でいつものように猫になった黒歌を鞆の中に隠して駒王の学園行った帰り。

兵藤一誠二年生が死に、悪魔となって学校に来ていた事を確認した俺は夜の公園に来ていた。

「……なんでこの公園に寄ったのにや？」

「なんとなく。だけど此処に居れば土地の管理者に会える気がする」

「……結構リクトの勘は当たるから怖いよ」

「まあね」

当たり前ではある。

だって原作知識だもの。

……まあ、具体的な公園の場所とか良く分かんなかったんだけど。

「——誰か来る」

「ちよつと隠れるか」

ベンチに座って俺達の諸々を『ずらす』——これで気づかれない。

此処にリアス・グレモリーが来るまで隠れておくつもりだ。

「——鬼ごっこはもうお仕舞いかな？」

「くそっ！」

そんな声が公園の中に響いた。

墮天使ドーナシークとエロ魔人こと兵藤一誠だ。

「墮天使は普通だけど……あつちはドラゴン？　でもあの神器は……」

「そう。でも俺のは他所から能力で貰ってきたから厳密には別物ね」

「チートにやあ……ちなみにリクトの能力で神器って引き剥がせるんだよね？　所有者を殺さずに」

「うん。だから裏の連中にバレたら不味い。でも黒歌の無実を証明するためなら……安いよ」

バレたって良い。利用されても良い。

それで駄目なら天使、悪魔、墮天使、全員——てやる。

「嬉しいけど……リクトこわいにや。殺気が出てる」

「あ、ごめん」

鞆の中から顔を出す猫の頭を撫でて謝る。

……なんて事をしてたら槍に腹を刺されていた。

別にイチャイチャして展開見てなかったわけじゃないし——イチャイチャしたいです。

そうこうしていると彼に二投目の槍が投げられる。

助けに入ったほうが良いかな、と思っていると投げられていた槍の側面から赤黒い魔力光が走った。

「——私の下僕に何か用かしら」

真打登場と言った風だ。

紅い髪を揺らしながら学園の二大お姉さま、リアス・グレモリーが姿を現した。

「おやおや、これはこれは——グレモリー。これは済まないな、どうやらちゃんと主が居たようだ……ただ、下僕の管理はちゃんとしておいた方が良くぞ。はぐれと勘違いして私のような者が散歩の途中で狩るかもしれないのでな？」

「ご忠告痛み入るわ……ただもう失せなさい、墮天使。消されたくなければね」

「恐い恐い。我が名はドーナシック、機会があればまた会おうリアス・グレモリー……」

問答してる前に一誠を誰か救ってあげて、と思う。

ただまあ、その前に一つ顔をだそうか。  
ついでに兵藤治してやろう。

印象付けられると思うし。

「さて、この子の治療を「こんばんわ、グレモリーさん」——なっ!?  
貴方何者!」

「まあまあ落ち着いて。高等部三年A組の奴良陸人、同じ学校の者です」

「……何が目的なの?」

「いや、別に。というかそのエロ馬鹿、治しましょうか? つーか治しますよ」

「ちよ、ちよつと!」

数ある回復系神器の一つ、いずれこの町に来るだろうアーシア・アルジエントと同じ『トワイライト・ヒーリング聖母の微笑み』。

その亜種禁手『トワイライトマザー・リパリス聖母の抱擁』で兵藤一誠の傷を治す。

悪魔墮天使種族問わずで傷を治す奇跡が具現化したのは首から下がるクロス。

ロザリオではない。?印の真ん中から鎖が通っている造形だ。

そしてこの亜種禁手が治すのは、精神体力傷欠損……魂の傷。

全てを治すこの禁手は魂さえそこにあれば使った対象を無から生み出せるほど。

……ただし逆の事は出来ない上、自分に使うことは出来ないのだが。

ただ、腹に槍が刺さった程度なら手をかざしただけで瞬時に治せる。

「……神器ね。それも悪魔を回復させれる強力な——つてええっ?!」

「……自分でもそれなりに強力なのはわかってましたが——……転生悪魔が人間に戻るのは予想してなかったです」

「そ、そうなの……」

腹の風穴が消えた一誠の身体の上には8つのポーンの駒らしきものが。

まさか、まさかである。

転生悪魔が人間に戻るとは。

黒歌も鞆の中で吃驚してた。

「……オホン。じゃ、とりあえず人間にはもう遅い時間なので……それではお休みなさい、グレモリーさん。……それとも今まだ何か聞きたい事が？」

「明日、使いを出すわ。その時お話し聞かせて貰えるかしら？」

「いいですよ。じゃ、改めてお休みなさい」

「……ええお休み」

人払いの結界が解かれた公園。

静かな町の中に繰り出し、俺と黒歌は例の如く『ずれて』家に帰った。

## 変動、その次の日

リクトの家に帰ってお風呂に入った後。  
私はさっぱりして扇風機で涼んでいた。

……にしても今日は驚いた。  
まさかあの亜種禁手で転生悪魔が人間に戻るなんて。

アレを使えば私のはぐれ悪魔なんて名称を付けられなかったのに、  
とふと思う。

そんな時だ。

「黒歌さん。『聖母の抱擁』で悪魔から妖怪に戻りたい？」

そんな事をリクトは言ってきた。

恐らくもなにも、……今日やって見せた禁手のことだ。

私は、SS級はぐれ悪魔である、黒歌は妖怪に戻る事を選ぶべきだ  
ろう。

……だけど私は首を横に振って答える。

「いいの？ それで」

「……良いのじゃ」

きつと私があゝの悪魔の所に居たらお願いしてただろう。

でももう今は「くたら」「くれば」の話。

「……だって白音を放っておいて私だけ戻るのは白音に悪いと思うか  
ら」

あの子も私も。

必要に迫られて悪魔になる事を選んだ。

だから私だけ一人妖怪に戻るのは……なんだか悪い気がする。

「そっか………だったら白音ちゃんとのことが解決したら、また聞く事  
にする」

「……うん。ありがとう」

やっぱり優しい。

ちゃんと返事ができないのはやっぱり辛い。

……早く私も解決しないと。

「じゃ、俺は計画通り進めるからさ。……でもそれまでには解決して



欲しいカナーって」

意地悪く笑いながら言う。

なんでそんな酷い事言うのか。さつき決意したばっかりなのに。

宿題をやるうと思つて「やりなさい」って言われた時みたい気分。

私は気分を害した！

まったく……それが出来てたら今日みたいに一緒に学校行かないのに。

今日も白音を遠目から見守る一日だったのにつ！

……でも、進展も無いし……。

「……じゃあ、やっぱり妖怪に戻った方がいいかにやー……？」

「いや。きつと姿が似てるっただけで狙われるだろうから。結局俺が

頑張らないとね」

「そっかー……」

結局私は彼に頼りつきりになってしまふのか。

やっぱりどうにか改善したい。

「じゃあそろそろ俺は寝る。……さて、黒歌も一緒」

「駄目にやー！」

「やっぱりかあ……」

シヨボーン、つて顔文字みたいになつてるけど駄目なものは駄目。

リクトの隙あらばエツチなこと言つてくる所は嫌い。

……無理矢理そんなことしないって分かつてるけど。

付きあつても無いし、そんな事したくない。

——私達は友達以上恋人未満なんだから。

「……分かつてるんだか分かつてないんだか」

ちよつと悲しそうにしながら自室に帰つていく彼の後姿は気持ち小さく見えた。

朝、黒歌がベッドの中に潜りこんできていたなんて美味しいイベントなんて更々無く。

今日も今日とてハイスクールに通つていた。

そしてお昼時。

今日も黒歌さんの手作りお弁当である。

最近料理をしてないので鈍って居ないか心配だ。

……今日は自分が夕食をつくらう。

「おい、あれ。隣の組の朱乃さんじゃん……どうしたんだろ、ウチのクラスに」

「ん？ あー……」

そんな事を飯を食う連れの一人が言った。

彼の視線の先はキョロキョロと辺りを見渡す姫島朱乃。

オカルト研究部副部長その人だった。

こいつあくせえ！ 厄介事の臭いがプンプンするぜえ！

……と、よし。何か起きる前に俺から行動をしようか。

「……わりい、多分あの人俺に用事あるんだと思う」

「なんでっ!?!」

「昨日あの人なんか暴漢に遭いかけててな丁度俺がその現場に出くわして」

「なるほど、その暴漢をギツタンギツタンにして助けたのか……」

「いや、一緒に逃げた」

「だろうと思ったよ。……じゃ、先に食つとくな」

「スマンな」

黒歌印の弁当を持って件の人物に話しかける。

俺が話し掛けない限り見え無いようにしてるし、そのせいでキョロキョロしてたんだらう。

全部俺が悪いな。……バレたら怖い。

「こんちわ、姫島さん。昨日の暴漢ヤバかったですね。あれから大丈夫でした?」

「えっ……!?! え、ええ……?」

目の前に急に現れて吃驚したんだらう。ちよつと返事が遅い。

「なんでこんなつままないクラスに来てるのかは知らないですけど……あ、昨日のお礼なら良いですからね！ そんなたいした事した覚えはないんで！」

ただ、この人は策士だ。

なら策を考えさせる前に流れを作って俺に好都合な噂が流れるようにする。

……何も手をうっておかないと、あっちからの呼び出しで告白されただとか色々要らない煙がたつから。

「……………じゃ、あの時の奴良陸人さんであってますよね？」

「ええ、そうですよ。……あ、昼飯食べました？ 良かったら一緒に……それで昨日のお礼って事にしてくれれば結構ですから」

「……………うふふ。それじゃ、屋上に行きましようか……人の目も少ないですし」

「勘弁して下さいよ。そんな事言われると勘違いしちゃいますよ？」

「あらあら、そうなの……………ちよつぴり残念。……………ちよつと待って下さいますか？ お弁当箱取って参りますので」

「……………了解です」

綺麗なお辞儀をして去って行く。

うーやっぱりあの人苦手だ。

回復も早いし、意図返ししてきた。

黒髪の美人だけどやっぱり黒歌のほうが断然良い。

素直だし可愛いし健気だし可愛いし美人だし。

コソコソと周りが話しているのを流しながら暫く待って。

大変不本意な噂をされつつ、二人並んで屋上に向かった。

「……………つまり貴方は公園で転寝をしていたら死に掛けの兵藤君とリアスに遭遇した、と？」

「そんなところです。まあ、彼が助かって良かったです」

人気の無い屋上の一角。

備え付けられているベンチに腰を掛けて昼食を取りつつ、学園のお姉さま姫島さんに話を聞かれていた。

「悪魔をも治す神セイクリッド・ギア 器の持ち主……………」

「……………そんな大層なものなんですか、これ」

知らないフリ知らないフリ。

知ってたとしても偶々発現したって事にしておこう。

「あらあら、何をとぼけていらっしやるのですか。貴方、裏の事はご存知でしょうか？」

「いや、悪魔だとか堕天使だとかが襲ってきたことがあるから知ってるんですよ？　偶々なんか発動して撃退してきましたけど」

「それはそれは。そうでしたか……御免なさい、辛い事を思い出させてしまったなら謝りますわ」

「いえ、まあ別に厄介だっただけですけども……器物破損とか色々」  
「……そうですか」

設定としては割と与太話程度の迷惑具合である。

……でもそれだけ強力な神器だということは印象付けられたろう。

「益々興味深いですわね。もう少しお話しを聞きたいですけど、もうお昼休みも終わりそうですし……今日の放課後、旧校舎のオカルト研究室に来ていただけますか？」

「……いいですけど。取って食ったりしませんよね？」

「うふふ。しませんわ。……魔王様に誓って」

「神じゃないんですね。流石悪魔。……ま、貴方みたいに話の分かる悪魔も居てちよつと悪魔のこと見直しました」

「ふふ、そうですか……それは有難うございますわ。……それでは、放課後また」

どうにも薄っぺらく見える微笑みを残して、姫島朱乃は屋上から去って行った。

## 始まった日

いつになく憂鬱な昼休憩が終了し、5限6限の授業はダラダラとしながら受けた。

そして放課後。

女子生徒は部活に励み、少ない男子生徒も部活に励む。残りの生徒は家に帰るか、校内に残って勉強する。

そんな生徒の時間。

……元来帰宅部の俺は駒王学園の旧校舎に足を運んでいた。

そして黒歌は鞆の中に戻ってきていない。

何時もなら戻ってくる時間なのでちよつと心配だ。

色々と『ずらしている』から車に撥ねられたり怪我をするようなことは無いと思うけど。

思考を廻らせながらも旧校舎の中、魑魅魍魎の跋扈するオカルト研究部を見つけた。

「失礼します。三年A組の奴良リクトです」

「……………」

中から知った声が。

知り合いが居るということで遠慮せずに扉を開ける。

「や、小猫ちゃん……………」その猫は？」

「……………」

部室内には旧知の仲、塔城小猫一年生が愛しの黒猫こと、黒歌を膝の上に置いて撫でていた。

小猫……………白音ちゃんの前の椅子に腰掛けて膝の上の彼女を眺める。

……………すごい黒歌さん身体が強張ってるんですけど。

お前さん何があつたし……………なんで捕まってるの？

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

一応気づいていないみたいだ。

でも流石妹。

姉の事なら一応察することくらい出来るか。

で、違ったので声のトーンが低い、と。

「ふーむ……そいつ貰って良い？ 多分ウチの猫だ」

「……そうなんですか？」

言ったら黒歌の身体がピクリとした。

べ、別に疚しい事なんて考えて無いかね！

「実はこっさり家から連れてきてて。……だって学校行こうとする  
ついて来ようとするんだもん」

「……本当に？」

ニヤー！ とか否定する声上がる。

同じように小猫一年生は疑うような目つきで見えてきた。

猫？だから猫の考えてることとか分かるんだろうか。

「……ごめん、嘘ついた。俺がそいつと離れたく無いから連れてきて  
るんだわ」

「……そうですか……はい、奴良先輩」

そして渡される黒歌。

よし、もふって……いや、そんな暴れなくてもいいじゃない。

「……先輩元氣出してください。きつと良い事あります」

黒歌は腕の中から逃げ出して、横においたバッグの上に鎮座した。

つーん、とした猫の動きで顔をあわせてくれない。

……帰ったら怒られるな。

「はあ……有り難う小猫ちゃん。……良い子な小猫ちゃんにはお菓子  
を上げよう」

「……今日はクッキーですか。いつも思うんですけど何処から出てく  
るのか分からないです」

「知りたい？」

「……知りたいです」

「四次元ポケット」（だみ声）

「ぶっ！」

知り合ってから二ヶ月くらい。

今後のためにも、知り合いになつておこうと思つて接触を続けてきたのだけど、最近は表情が多少豊かになつたと思う。

……一応、食生活には一言言わせて貰つた。  
あんなに偏つた食事をしてたら太る。

唯でさえ悪魔で猫？だから寿命長いんだし。

いまからあんな状態では4、50年で生活習慣病になる。

……おっと、黒歌がうらやましそうな目でこちらを見ている！  
仲間になりますか？

はい

↓いいえ

……ゴメンってば。

「で、リアスさんはまだ？」

「……そうです。……そういえば先輩は神器持つてるんですか」

「うん。といっても日常生活じゃあんまり使わないような物だけだね」

「先輩は隠すのが上手いですね」

「まあね……あ、お邪魔してます。部長さんに副部长さん」

のほほん、と我が物顔で部室の中に座っている俺。

入り口、扉の開いた先に居るここの主の眉がピクリと引きつった。

ココの主、リアス・グレモリーが顔を顰めながらシャワー室に消えた。

もう少し懐を広く持つて欲しい。

白音の『王』なら王らしくあつて欲しい。

あと客人が来てるのに目の前でシャワーを浴びるのはどうかと思う。

「……部長がすみません」

「いや、まあ……俺が早く来すぎたのが間違いだったみたいだし。小猫ちゃんが謝ることじゃないさ」

——白音。

まさか捕まるとは思わなかつたけど……私的事、リクトが言うよう

にやっぱり引きずってた。

でないと猫又でも猫？でも悪魔でも妖怪でもない……完全に隠蔽してある私の事を捕まえるはずないから。

辛かったよね白音……ゴメン。

お姉ちゃんが間違ってた。

……というか、あなたは謝らなくてもいいのよ？

「あらあら。小猫ちゃんがそんな風に……部長には私が謝らせますわ」

「ま、些細なことですし。気にしませんよ」

「聞こえてるわよ朱乃！ 小猫！」

——で、前リクトが言ってたリアスの所の『女王』。

この学園でも有名らしいけど、リクトは彼女のこと苦手だ、って言ってた。

なるほど、確かに腹に何か持ってそうな感じがする。

上手に隠してると思うけど……彼は演技だとか凄く上手いから。

……にしても良い性格してるよ、あの人。

リクトが苦手にする理由分かったかも。

見た限り此処の『王』のリアスは中々良い眷属を集めてる。

私と同じ猫？の白音。

学園の中で噂に聞いた木場佑斗。

それから多分……あの『女王』は墮天使と人間のハーフ。

分かるだけでも才能のある人材ばかりだ。

……あくまで才能を見た限りだけど。

「——学園のマスコットの塔城小猫ちゃん!？」

——で、今来たのが『兵士』。

リクト曰く、変化の無かった世界を動かす「愛すべき馬鹿」にして「ド変態」。

兵藤一誠。

悪魔に転生し、人間に戻った今代の赤龍帝。

その変態が今——顔をだらしなくさせてリアス・グレモリーのシヤワーカーテンに映るシルエットを眺めていた。



「……いやらしい顔」

……やっぱりそんな奴には見えないよ。

あと白音がなんだか黒かった……ちよつと悲しい。

——そうして異形と人間の対談が始まった。

## 龍を知らせる日

「……それで、あのオツサンは何だったんですか」

俺の斜め前に座る兵藤一誠。

彼はグレモリーのスカートの中が見えそうで見えない為、チラチラと目をそこに向けながら聞いた。

リアス・グレモリーは浴びていたシャワーから出てきて、見せつけるようにして服を着たのだが……ホント、悪魔は露出狂ばかりなのか、と疑ってしまう。

いや、仮に悪魔全般が露出狂じゃ無いとしても、リアス・グレモリーはきつと露出狂。これは間違いない。

兵藤にグレモリー……実は似たもの同士だろう。

「あれは堕天使よ。欲に溺れて堕ちた天使……そしてこの子も」

「……夕麻ちゃん」

グレモリーの横に控える姫島さんは一枚の写真を取り出して見せる。

これがレイナーレだろう。

如何にも此処最近じゃ見かけそうに無い、笑顔で気がきく女子高生を演じてる。

ただ、ちよつと表情が悲しそうにも見える。

……気のせいかな。

「……奴らはアナタの事を危険だと判断して殺したのでしょうね。そして貴方は私に悪魔として転生させられた」

「悪魔ですか。……でも今日は昨日みたいな朝の倦怠感とか感じられないんですが……ホントに俺は悪魔になったんっすか?」

「いいえ、今は違うわ。貴方はその居る彼——奴良陸人によって悪魔からまた人間に戻ったの。……貴方が殺される理由になった神器とは別の——回復系の『神器』を使っただけ」

そして部長さんが座る机の中から出てきた八つの『兵士』<sup>ポーン</sup>。

やっぱり人間に戻ったから本人の同意の下、この場で悪魔にするつもりか。

……なら俺にもチャンスはある。

「奴良陸人。アナタの神器については後で聞いわ。その前に兵藤くん……アナタ、悪魔になるつもりはない？」

「……それで何か俺に得が「ハーレムが作れるわよ」なります！」

返答早いな、おい。

兵藤の隣に座る小猫ちゃんの顔が歪んでいる。

二年の木場も副部長の姫島さんも彼に苦笑いだ。

「決まりね。じゃあ兵士を……？　なんで全部『兵士』が変異ミューテーション・ピースの駒につっ！」

「あらあら……」

「……不思議です」

「なんでですかね……？」

グレモリー、姫島、小猫ちゃん、木場。

驚きの声がそれぞれ上がる。

「——変異の駒？」

「一個でも複数個分の価値がある駒のことよ。……でもなんでかしら……？」

全員が驚くのも無理は無い。

こっそり俺が変異の駒に変化させたのだから。

兵士の駒全てに、『王』はレベルが上がった」という風に認識をずらしたのだ。

……これで兵藤一誠は八個の兵士じゃなく、いくつの変異の駒で転生出来るようになった。

そして兵士に空気ができ、俺がそこに滑りこめる……という寸法だ。

ゲスいのは分かってる。

でも目的のためだ……致し方ない。

「考えてても始まらないわね。……とりあえず兵藤くんこちらに来てくれるかしら」

「は、はいっ！」

兵藤が立ち上がり、兵士の駒を受け取っていく。

一個、二個、三個……そして四個。

「……大体一つ二個分の価値があるのかしら。おかげで駒の節約が出来たのは良かったわね」

「リアス先輩。普通こんなに使うものなんですか」

「いえ、そんな事はないのよ……多分アナタの持つ神器のせいね。初めの時は8個丸々使ったからそれでも規格外よ……どれだけ強力な物なのかしら」

赤龍帝の籠手、なんて選択肢は無いだろうな。

ましてやこんなエロスの権化に神滅具が宿ってるなんて思いたくない。

逆に兵士の駒八個で手に入れられるなら安いものだ。

……偏に兵藤が貧弱だったからだろうけど。

「神器。……やっぱり、その神器ってのは」

「まあ、神が人に与えた奇跡の具現物だと思ってくれれば良いわ。

……逆に人にしか宿らないから困ったものだけどね」

「そうなんすか……で、どうやったら出せるんですか」

「そうね……それはちよつと後でもいいかしら。——で、次に貴方よ。

奴良陸人」

「ん？　なんででしょう」

はてさて。

これからが俺にとっての本番か。

どうやって魔王に近い、このリアス・グレモリーに取り入れられるか

……割と簡単な気がする。

「なんででしょう、じゃ無いわ。——アナタの神器についてよ。話を聞かせてもらえるかしら」

「まあいいですけど。……でもあんまり驚かないで下さいよ？」

「？　なにかあるのですか？」

姫島さんにはまだちゃんと話していないこと。

まあ、これから話す「設定」は荒唐無稽甚だしいものだけど。

「実は——……神器を自分でも確認出来て無い程持ってるって言ったらどうしますか」

「つまり、どういうこと？ 言葉通りに受け取るなら……貴方は複数の神器を持っているって言う事なの？」

「はい。あの回復系の神器だけじゃないって話です。一部だけでもお見せしましょうか？」

一応見せるのは一部だけ。

ただちよつと度肝を抜く『一部』だが。

ソファアールから立ち上がり、少し広い場所に行く。

そして出すのは赤と白。

本来俺が持っているはオカシイもの。

「赤い籠手に白い光翼。それから……」

「部長……信じられないですが『白龍皇の光翼』じゃ。それに……いや、でも」

「何よ、朱乃」

「いえ、私の勘違いだと思えます……気になさらないで下さいな」

「そう……いや、ちよつと待って。……奴良、貴方のその籠手の能力は？」

さて、驚かそうか……この悪魔達を。

「十秒ごとに自分の能力を倍化します。……恐らく姫島さんのお察しの通りですよ。自分でも訳分かんないですから」

しん、とオカルト研究部の室内は静まりかえっていた。

## 悪魔になった日

『白龍皇の光翼』に『赤龍帝の籠手』。

何処で手に居れたのかと聞かれれば、まずこの世界では無い。  
パラレルワールド……可能性の先にある世界から手に入れた。

……大昔の戦争が、赤い龍と白い龍が暴れ封印されたことにより締結したのは冥界の悪魔であれば誰もが知っている事だと思う。

神と魔王もその時死んだのだが……それはまあ余談だ。

——さて、本来の正史ならば『赤』と『白』の二天龍。互いに仲が非常に悪いとされていた。

それは三勢力が戦争を起こしている所で周りの被害を省みず『喧嘩』する程にだ。

……だがしかしこの二匹のどちらかが雌で、夫婦であり……積年の間、暴れたのがただの夫婦喧嘩であったのならば。

……そして神による封印の際、意図的にこの二つの神器が一人の所有者に揃わないようにしてあったのならば。

それから神器に封印されようとも夫婦喧嘩を続ける程に夫婦間に溝があつたならば。

とはいえ仲直りがしたいと思っていた双方共にツンデレな龍だったら。

そんな「だつたら」「であれば」の世界にある神滅具を俺は次元の壁を越えて手に入れたのだ。

神器所有者が死ぬ事は無い、能力のちよつとした応用で。

……ちなみに、宿るこの夫婦龍の仲を取り持ち、反発する事を止めさせる事は非常に簡単なことだった。

こういう場合は総じて男側が悪いのだ。……うん。

そして、この二つの神滅具ロンギヌスを手に入れた理由は至極明快。

黒歌の手配書の取り消しのためだ。

そしてその実現に必要なのは悪魔等二つの陣営に己が力を示すこと。

ただし手の内の全て——『ずらす程度の能力』を見せるような事は出来ない。

だからそれに準じる力を手に入れた、というわけ。

しかし神滅具一つではインパクトが弱い。

そのために、こちらの勝手な理由で五次元世界の一角から神滅具の内二つを手に入れて来たのだ。

……神滅具を二つしか持っていないのかと聞かれると……反応に困るけど。

——俺が持つ神滅具についてはもういい。良いつたら良いんだ。

……コホン。

……先ほど出現させた中の人達二天龍からしてみれば、余計な親切で迷惑もいい所だ、と自分は思っていたが……。

『いや、感謝してる。お前のおかげでアルビオンと仲を戻す事が出来たのだからな……——浮気なんてもうするものか!』

『反省したようで何より。何度も言うが……リクト、我からも礼を言わせて貰う——ありがとう』

……割と感謝されていたり。

本当の所は分からないが、当人等が感謝してくれているなら良かったとも思えるというものだ。

ちなみにだが……この赤白は白が赤を尻に敷いている。

赤が雄で白が雌。

争いの原因——赤いのが何処かの『天魔の業龍・ティアなんとか』に現を抜かしたのだ。

……この世界では知らないけど、きつとここの赤いのも何かしらやらかしてる。

調べてないけど……きつとそうに違いない。

——と、この身に宿る『可能性世界の二天龍』についてはもういいだろう。

即席で作り上げた『過去の捏造話』をグレモリー及びその眷属に話した。

……「ある日墮天使が家に襲つてきて、ペットの猫が殺されかけた時に幼い自分は幾つかの神器を発動させ、その墮天使を撃退した」——という、なんとも『御都合』で助かった<sup>はなし</sup>漸を。

そして自分の保有する神器については一旦保留となった。

一度上に報告をしてみない事には分からない、と。

よって次の、兵藤の神器に話はシフトした。

とりあえず発現してみない事には神器が何なのか分からない。

そのため、まずは出す事になったのだが——……兵藤が「ドラゴン波ッ!!」と勇ましく叫び、左手に出現した覚醒していないこの世界本来の『赤龍帝の籠手』。

今現在の見た目は『龍の手』だ。

そのためにグレモリーは苦笑しながら『龍の手』だと告げた。

……どうせ何時か気づくし、余計な事は言わないのが一番である。

「それでグレモリーさん。俺の事眷属にしてくれませんか」

「……突拍子がないのね。貴方、空気が読めないって言われない？」

「何ソレ美味しいの？」

「………ハア」

眉間を押さえて「頭が痛い」と部長リアスさんは唸った。

「………頂きます」

「いただきます」

唱和し、一口。

「………どうかな？」

「んーっ！ おいしい！」

「よしっ！」

……でも何時になってもレベルの差を感じさせられる。

なんでこんなに美味しいのか。

まさか別世界の凄腕の料理人の能力を「ずらして」手に入れてるんじゃないだろうか。

いや、考えても限が無いか。

……今日の夕食はオカルト研究部に行っていた事もあり、家にある



材料で簡単な炒飯になった……のだけど今日は私じゃなくてリクトが作る、と。

この家に住むようになってから、私が料理をしようと思った理由は色々あるけど……やっぱり女の私より美味しい料理が作れるのは女としてちよつと悔しい。

いや、本来リクトとは料理を一緒に囲むような仲じゃないのだけでも——って私は誰に言い訳してるのか……あ、自分か。

「にしてもなあ……兵藤の奴、ハーレム目指すからって悪魔になるだなんてなあ」

「……欲が凄いのじゃー。あんな奴の近くに白音置いとけないじゃあ……」

お姉ちゃん、白音があんな奴の近くに居るの心配。

……でもリクトがあの変態の事言えないと思うけど。

私の為に、って結局ズルにズルを重ねて悪魔になっちゃったし。

そこまで想ってくれるのは嬉しいけど……こつちが恥ずかしい。

「まあ、ちよつと様子見よう。……あれでも赤龍帝なんだから」

「赤龍帝で白龍皇なりクトが言ったらなんか重いね」

「まあ、ね。これから彼を中心に世界が廻り出す……って勘だよ？」

勘

洒落にならない

リクトの勘は洒落にならない。

……最近ハマった弾幕ゲームの巫女さん並みに洒落になんない。

「でも今の所、リクトが今代の赤龍帝だって認識されてるよ？ あと白龍皇としても」

「今頃、悪魔の上層部はポカーンってなってるだろな。で、廻り廻って墮天使に伝わると」

ああ、そういえばあそこに白龍皇が居たっけ。

すぐにでも接触してきそうだな。

……あ、そういえば。

「白音に餌付けしてたんだって？」

」  
口に炒飯を運ぼうとする形で固まった。

……なんか良からぬ事企んでたって時の反応だ。

「……クツキーなんて知らないんだけど？」

ホントに知らない。

何時の間に白音と接触してたのか。

「……や、黒歌さんあのですね？ 色々理由があるんですよ？」

「……」

「えつと……仲良くなつてたら黒歌さんが接触できる機会が増える、かなーっと思ひまして」

こやつ。

「リクトのバカ」

「……怒ってる？」

「怒ってる。——……なんで私に言わずになんでそんな良い作戦を進めるの！」

「うおい！ そつちか！」

当たり前じゃない。

でも良かった。……リクトが白音のことを狙ってるわけじゃなくて。

……別に私じゃない誰かを好きになつたのが許せなかつたわけじゃないからね。

だから私はツンデレじゃないんだから……つてこら、ニヤニヤするなりクト。

——それから。

今度から白音に渡すお菓子は私が作る事にして。

話しこんでちよつと冷えた炒飯を食べ終えて、明日のことを考えながらお風呂に浸かった。

「良い湯だあな、にやははっん〜♪」

……とか呑気にお決まりの歌を歌いつつ。

美味しいご飯と温かいお風呂に寝床。

それだけで心のしこりが取れてるあたり、一応ケジメは付けている

とはいえ私は大概現金な奴だ。

……白音、ゴメンね。お姉ちゃんがこんな奴で。今度からおやつ作って上げるから。

## 討伐の日

——……俺の持つ神器については流石に悪魔の上層部でも分からなかったようだ。

とりあえず「大量の神器使いが魔王の妹の眷属に入った」とだけされたようだ。

それを知らされた後曰。

「いい加減になさいイツセー！」

「嫌です！ 俺は——ッ！」

「分かってるの？ 私は貴方の主よ!？」

「……ならわかりました。もういいです……俺を眷属からはずして下さい」

「——それ、貴方本気で言っているの？」

……。

………なんだろうか、このカオスは。

……今日は掃除当番の日で遅くなり、必然的にオカルト研究部に來るのが遅れた。

それから黒歌との合流に遅れたのだけど……あ、コレは余談だ。

とりあえずオカルト研究部についてみると、シヨンボリとした様子で項垂れる未来の義妹。

苦笑いのオカルト研究部では空気の薄い木場君。

楽しそうに眺めるDSの朱乃さん。

……そして口論を繰り広げる一誠にリアス部長。

原因は——。

「菓子如きで喧嘩するなよっ！」

二人の手に握られている菓子があつた。

確か昼休憩の時、俺から小猫ちゃんに渡した黒歌が数日頑張つて作った傑作。

事の発端はどうやら小猫ちゃんがお裾分けしたせいだと予測。

「……ぬらせんばい。おかし……」

「だってイツセーが……」

「だって部長が……」

「喧しい！ とりあえず、しろ……じゃなかった。小猫ちゃんに返しなさい！ 俺が全員分作ってやるから……」

二時間後。

「……美味しいです、先輩」

「ははは……これはこれは。部長と一誠君が喧嘩するのも分かった気がしますね」

「ごめんなさい奴良さん、俺がバカでした」

「ごめんなさい小猫。あんまり美味しかったから……」

「……ちよつと自信を無くしますわ……コレ」

……そんなこともあって、翌日から新入部員の白龍皇兼赤龍帝の俺は何やら菓子係に任命されていた。

黒歌の存在がなんとなく部活の面々に認知されるようになって数日。

何時ものように意気揚々と俺がお菓子を作っている時。

——はぐれ悪魔バイサー。

オカルト研究部、我が部長リアス・グレモリーの元に討伐の依頼が大公から下りた。

「此処に居るんですか？」

「ええ。なんでも人間を誘き寄せて食っているのだそうです」

「……うへえ」

廃墟近くに転移してきたオカルト研究部もとい、グレモリー眷属の兵士である兵藤……と俺。

——そう、無事俺は悪魔になる事が出来たのだ。

兵藤の転生に掛かった兵士の変異の駒は四つ。

そして同じく俺も四つ。

最低でも神滅具二つに、悪魔をも回復させ転生悪魔を人間に戻せるほど強力な価値のある神器一つを持つ俺。

……兵藤とは桁違いに転生コストが掛かるはずが、変異の駒とはいえ同じ個数で転生出来たのだ。いつものように『ずらして』。

当然その場に居る、姿を偽っている黒猫の悪魔を除いて約全員が驚いた。

しかし「変異の駒なら仕方無い」と納得するあたり変異の駒の価値は凄いのだろう。

……いや、それでいいのか転生悪魔。

もうちよつと不思議に思ってもいいんじゃないの？

そんなイレギュラーな転生をした兵士である俺と、同じく兵士の兵藤は、眷属の役割を見せて貰うためにバイサー討伐について来ていた。

「へー……廃墟と言うと何やってたんだろ、ここ」

「……さあ。……ただもう来ましたね」

特定の誰かと話をするわけでもなく呟き、それに返してくれた小猫ちゃん。

「美味しそうな臭いがするぞ。不味そうな臭いもするぞ。甘いのかな、苦いのかな」

「美人の生おっぱい!? ……いや、でもあれは残念だ……」

そしてケタケタと笑いながら出てきたはぐれ悪魔バイサー。

胸部に反応していた兵藤の言う通りその姿は美しい上半身と完全に異形の下半身。

俺は、そんなはぐれ悪魔をみて「悲しい」と思った。

……悪魔と関わらなければ、きつとまともな人生を送っていたのだろう。

それは未だ人としての面影が残る上半身が綺麗なことからわかる。

美人と言うだけでも選択肢は平凡な女性より多かつたろう。

いや、あの容姿があつたからこそなのかもしれない……。

……あのはぐれ悪魔に何があつたのかは分からない。

無理矢理悪魔にされたのか、それとも自分の意思でなのか。

もしくはあのはぐれ悪魔が「はぐれ悪魔」になったのは運命だったのかもれない。

だけどタダ俺はそれが無性に。

……無性にその碌でもない運命が疎ましく思った。

「はぐれ悪魔のバイサー。アナタを討伐しにきたわよ」

「小娘が！その体を紅い髪と同じように血で染めてくれるわアアア  
!!」

そうしてバイサーが襲い掛かってきた。

それに合わせ木場が『騎士』力で疾走し斬りつける。

「佑斗の役割は『騎士』。スピードに特化した駒よ」

腕を切り裂かれ、今度は美しかった上半身をも醜悪な物に変えて、  
小猫ちゃんをその獣の足で踏みつける。

「小猫ちゃん!？」

「安心して、イツセー。小猫は『戦車』よ……圧倒的な防御力と攻撃力  
が特徴ね」

……が、『戦車』である彼女はその頑強さ故に踏み潰される事はな  
く、逆に圧倒的なまでの力で足を掴み振り回し、床に叩き付けた。

「最後に……朱乃!」

「あらあら、うふふ……どうしましょうか？」

そこへ『女王』の朱乃さんが魔力を雷に変換しバイサーに落す……  
恍惚とした表情を浮かべて。

「朱乃は『女王』の駒。『騎士』『戦車』『僧侶』三つの駒の特性を持つ  
わ……それから朱乃は究極のSね」

……やつぱり苦手だ。

「だけど仲間には優しいから……」

なんて部長さんが後ろにいる一誠と俺に言ってるけど安心出来な  
いからね？

……わかってんだらうか。

分かって無いんだらうな。……露出狂だし。

「さて、バイサー。……言い残したい事は？」

「……殺せ」

そうして廃墟の中にクレーターを残し、一人のはぐれ悪魔は消え  
た。

……。

「帰りますよ奴良先輩。……どうしたんですか」

「いや、ね。……はぐれになったら、皆こんな風になるのかと思って、ちよつとね」

先ほど部長の手によって出来たクレーター。

そこにバイサーがいたという痕跡は一切無い。

「……。……そうですか」

きっと小猫……。白音ちゃんは思ったのだろう。

はぐれ悪魔である姉の事を。

今部屋で待っている黒猫の事を。

……なるほど、バイサーを見て俺が苛々していたのはそういうことか。

くだらない運命を作るのは神か。悪魔か。

どっちでも良い。

だけど……

——そのふざけた運命はぶち壊す。

姉妹が笑って暮らせるように。

身勝手だけど……。自分の為にも。

——柄にも無くクツクツと感情を高ぶらせながら、兵士だと告げられてシヨックを受ける兵藤の後を追った。



## 出会う日

兵藤と俺。

俺達二人学年は違えど同じ新人悪魔としてビラ配りから始まり、現在契約を取る段階までに至った。

しかし兵藤の契約取りは難航していた。

まず魔力がすこぶる無い。

どれくらいなのかと言えば赤子以下。

それはグレモリー眷属一魔力の扱いに長けている朱乃さんからの  
お墨付きだ。

おまけに召喚者と意気投合して契約を取ってくるのを忘れる始末。

ただ、評価は最高値だったので部長さんは頭を悩ましていた。

俺に関しては大した問題も無く契約を取る事ができていたが……  
あまり馴れるようなものではなかった。

この辺が人間と悪魔の価値観の違いだろう。  
……とはいえそれが上級悪魔になる一番の近道なので早々に馴れるしかない。

そんな兵藤の成績不良が続く此処数日。

やけに気合いの入った兵藤が自転車走り出し依頼主の元へ向  
かって数十分後。

「……イツセーの反応が……消えた？」

「……悪魔が死神の真似事？　そもそも出版社違いじゃ……」

「何を言ってるのリクトは！　それよりもイツセーに何か起こったんだわ……皆、行くわよ！」

部長が席から立ち上がり、転移の魔法陣を展開してその中に皆を呼ぶ。

「あ、俺行っても邪魔になりそうなのでお菓子作って待ってますね」

『……ハア……』

視線が痛かった。

パクリと一口。

私は出来上がった一口サイズのマドレーヌをリクトの横で頬張る。

……美味しいにやー。

にやー。

……中に入ってるお酒でちよつと酔いそうかも。

私つてば、いま猫モードだし。

ちよつと酔っ払ってきたら仙術使おう。

人型に戻りたいけど我慢にやー。

「それで兵藤はそのシスターを助けたかったと」

「……はい」

……リクトが『聖母の微笑み』で帰ってきたエロガキの受けた傷を治して一時間後。

他のオカルト研究部の面々は先に自宅に帰って、落ち込む今代の赤龍帝とリクトが部室の中に残っていた。

グレモリー曰く、『一緒に行かなかったんだからちよつとは年長者らしいこととして上げなさい』だそうだ。……つまり彼を慰めろと。

とりあえず話を聞くに、なんでも依頼者の元に行つた先で依頼者がはぐれの悪魔<sup>エクソシスト</sup>祓いに殺され、逆十字に磔にされていたのだとか。

おまけに最近知り合つたシスター（美少女）がその場において、悪魔である事がバレたとか。

グロ耐性もついて無かつたらうし……変態とはいえちよつと同情したくなつたのにやー。

……あ、やばい。酔っ払いそう。

マドレーヌ侮りがたいにやー。

ちよつと仙術使つてアルコールの処理を早くする。

これで一安心。

……よし、もう一つ貰っちゃおう。

「確か堕天使……夕麻ちゃんだったっけ？ ……騙されて殺されて悪魔になつたんだよな、最初は」

シスター助けたかつた事と関係無い気がするけど……きつとなにか考えてるんだろう。

私じやリクトの考えてることは及ばないにやいし。

「……そうです……あの、それがなんだっていうんですか？ 出来れば触れて欲しく無い話なんですけど……」

「いや、なんで殺されたんだ兵藤？ お前が持つのは極平凡な神器トウワイズ・クリティカル『龍の手』だったんだろ？」

「……………そうですけど」

「それでお前は部長に悪魔に一度転生させて貰った……全部で八個の『兵士』の駒で。……これっておかしくない？」

「何が……っ?!」

リクトが立ち上がって二天龍の神滅具を出してた。

ああ、なるほど……自覚させるのか。

これでまた混乱を生む事になるだろうにやー。

……結構リクトって周りを混乱させるのが好きな気がする。

「俺と兵藤ってさ同じ兵士の価値だった訳だろ？ ……俺は神滅具と

呼ばれるユニークを最低でも二つ。お前は極平凡なノーマルな神器

を一つ。……ノットイコール≠だとおかしく無いか？」

「……………どういことですか？ 俺には……まだ神器があるって事ですか？」

「それはありえるかもしれない……けど本当に神器は『龍の手』なのかねえ……」

「——じゃあ俺の神器は一体……」

「左手だして」

「え、はい……」

リクトは『翼』を仕舞い『籠手』を残して、彼の神器の出現する左手に触れた。

びっくりするだろうな……神器の形変わるみたいだしー。

「ドライグ、起きろ」

「へ？」

リクトが『ずらした』のか、兵藤の左手には籠手が現れてた。

《起こしてくれたのは感謝しよう——……だが何者だ貴様ツ！何故俺とアイツがお前の中にいるツ！》

「どーもー。赤龍帝と白龍皇やってます奴良陸人でーす。——

貴方とは初めましてだな、二天龍のドライグさん」

「……なんで先輩と同じ神滅具が俺に……そもそも一つだけじゃ……  
——つか喋った?!」

私も聞いた時はビックリした。

……けどこの程度で驚いてたら驚き足りなくなるからね、リクト  
は。

二人と一匹。

夜も遅い時間帯。

私達以外誰もいないオカルト研究部の室内は混沌としていた。

「——おっふる♪ おっふる……? やあああああ! だ、誰です  
かあああああ?!?!」

訂正。

もう一名、吸血鬼らしき少年も入ってきた。

この『氣』は少女じゃない……よね?

男の子、よね?

……??

## 自覚させる日

「な、なんだったんだ……?」

兵藤が呟いた。

洗面器に着替えを入れて部屋の中に入ってきた美少女(?)は物凄い勢いで逃げ出した。

男の娘のギャー君だろう。誤字にあらず。

……知らないフリ知らないフリ。

「さあ? あ、部長の僧侶じゃない? 居るって言ってたし」

「なるほど。……あんな子も仲間なんすね……ぐへへ」

変態さんの一誠君は誤解しているようだが言わないでおく。

停止教室まで待とう……うん。

『……そろそろ説明してもらおうか紛いモノ』

「おまえ酷いな。とりあえず本人から説明して貰うから……出て来いドライグ」

自分の籠手に宿るドライグの精神が「ずれて」兵藤にも見えるようになる。

そして部のテーブルの上に手乗りサイズの半透明の赤龍が現れた。

「……ちつさくないっすか?」

「本来はもつとでかい。ただ、部屋のサイズに合わせて小さくなって貰ってるだけ」

『すまんな相棒。……よう、失礼な変態。あとオレのこと紛いモノ扱いたしたオレ』

『……何故外に出られているのか分からんが……赤龍帝は常に一匹。それ以外は紛いモノ……そうだろう? オレと言うならば分かるはずだ』

『ああ、分かるとも。オレだからな。……たがな、実際にオレは赤龍帝だ。お前と同じくな』

『フン……ならば何故貴様は『白いの』というんだ』

『……はあ?』

籠手の宝玉が明滅し声が流れる。

半透明の龍は至極分らないと入った風にその蛇顔を顰（しか）めさせた。

『そりゃ……仲を直したからに決まっているだろう』

『——は?』

驚く所は違うが、二人の息は何気に合っている。

「や、まあなんていうのかな……どうやら俺の神器にいる二天龍はこの世界のじゃないらしいんだ」

「——ええっ!?」『——なんだと!?!』

兵藤と向こうのドライグが驚きの声を上げる。

脈絡も無く秘密を話した状態だもんな。

「ただ詳しくは言え無い。時間が来れば話せると思うけど……一応その時まで黙っていてくれたら助かるな」

「……はい」

「じゃ、そっちのドライグが驚いた理由も分からないと思うから……とりあえず兵藤は白龍皇と赤龍帝の関係性についてそのドライグに聞いて勉強してこい」

「どうしてですか?」

さして本題だ。

「——鍛えてやる。……いや、少しだけその神器の使い方教えてやる。

あのシスター、助けたいんだろ?」

「……は?!? はいっ!」

「というわけでもう今日は帰ろうか。……あんまり長居してたら生徒会長辺りが怒りに来そうだしさ」

そうして、焼いてたマドレーヌを食べて酔っ払ったらしく眠ってしまった黒歌を鞆に入れて部室を出る。

籠手を出して明滅する宝玉に話を聞く兵藤と、しばらく並んで歩いて帰った。

---

——次の日。

「……ん?」

「——すう……」

ベッドの中に黒歌がいた。

な、何をいつているかわからねーと思うが俺も何を言っているか分からない。

頭がどうにかなりs (ry。

よし、落ち着こうか。

「……服は着てる。と言うことは何も無かった？」

「——んん……」

寝返りをうち、彼女の口から寝息が漏れる。

……。

駄目だろ俺。

駄目だ……ちよつと色つぼいとか思ったら。

………おつと、発育の良い胸が……はっ?!

ちやつちやと起きよう。うん。

……きつと間違いだから。これ。

寝ぼけて俺のベッドの中に入ってきただけだから。

「はあ……」

むなしくなりつつ、兵藤にメールを入れて朝食の用意を始めた。

黒歌さんの赤面を拝みながら朝食を済ませた後。

『——Boost!』

「これで五回目……!」

「よし休憩しようか。……兵藤、感覚は掴めたか？」

「……ええ。ただヤバイほど疲れますね……」

「ま、二天龍って規格外な力だからな。疲れるのも当然の事さ」

失った体力を『トワイライトマザー・ヒーリング聖母の抱擁』で治してやる。

現在、兵藤と俺は朝の公園に来ていた……コスプレのような赤い籠手を出して。

ただし俺の籠手の方は、現在中の奴は居ない。

機能だけ残してアルビオンと一緒に、未だに悶えてた黒歌さんの所に残してきた。

自由が効くようになって嬉しい、と強面の顔で笑っていたのが印象

的だ。

コスプレ、とは言ったものの、実際に人に見られて恥ずかしい事はない。

何せ『公園という区画』を現在時間軸から『ずらしている』のだから。

要はちよつとした『精神と時の部屋』状態なわけだ。

兵藤に言ったら「マジで!？」と敬語が抜けるほど驚いてた。

「? 先輩何してるんすか」

「……いや、ちよつと良いもの見せてやろうと思つて」

『Welsh Blaster!!』

自分の箆手から機械音が鳴り形状が変わる。

宝玉が手のひらに移動し、箆手の周囲に突き刺さるようにして現れる筒のようなボルトのようなもの。

『Magical Boost!』

十秒が来て、設定したように魔力だけ倍化する。

すると一つ、腕に刺さる筒のようなモノのウチ一本が「ガチン」という音と共に少し箆手から盛り上がった。

「……??」

「ま、気にすんな。……とりあえず一発で」

「はい?」

斜め上の空に箆手を掲げて。

「……行くぞ?」

一言告げて、——極光が空を埋め尽くした。

「……はあああああああ?!!」

「こんな事も出来るようになるわけ。神器は『所有者の想いに応える』……つまり『ぼくのかんがえたさいきょうのうりよく』を具現化するものだと思えば良い」

「それって厨二病じゃ……」

「だけどよく考えてみる。」紅髪の滅殺姫”つて渾名。”赤龍帝”つ

ていう呼称。……そもそもが厨二的じゃない?」

「あ」



「だろ？」

「そつすね……っ！」

「笑えば良いと思うよ」

笑いを堪える彼にサムズツプ。

思い至ったようにケラケラ笑う兵藤が落ち着いてから。

厨二的能力を考える上で慢心しない事、決して驕らないことを教えて一応今日は解散することになった。

兵藤はまだ公園で筋トレするらしく、それくらいならと『精神と時の部屋状態』を終わらせて、俺は自宅に帰った。

『おい、赤龍帝が厨二ってなんだ！ いや、厨二病ってなんなんだ?!』  
終始、未来の乳龍帝おっぱいドラゴンの方はうるさかった。

## 禁手する日

兵藤とズル休みをして神器の扱いについて教えた日。

その日の午後から俺は鞆の中に黒歌さんを入れて学校に行き、オカ研にむかった。

——したら小猫ちゃんに連れ攫われて行った先には死ぬ間際の兵藤。

急いで『トワイライトマザー・ヒーリング聖母の抱擁』を使って一命を取り留めた。

気を取り戻した兵藤に死に掛ける経緯を聞いたら、……堕天使レイナレにアーシア・アルジェントが連れて行かれるのを止めようとしたからだ。

俺は原作を知り無事で済むのではないかと考えていたが——それは間違いだった。

……そう、生半可に赤龍帝を覚醒させて力を持たせた俺の所為だった。

それでも善戦したらしいが、向こうは紛いなりにも過去の大战を生き残った堕天使。

早々に赤龍帝だということがバレ、慢心せずに光の槍で四肢を地面に縫い付けられ腹に槍を刺されたそう。

……彼氏だったという情けで直ぐに殺されはしなかったらしいが……。

その後、偶々近くを通った小猫ちゃんが血の臭いを嗅いで一命を取りとめた、と。

「——俺、アーシアを助けてきます」

兵藤の傷は治り万全の状態だ。

前回のような、悪魔から人間に戻るなんて失態はしていない。

「何言ってるのイツセー？ あの子は教会の子よ。私は……そんなこと許さないわよ」

「それでもです。部長が悪魔が堕天使に喧嘩を売るのが駄目だと言うなら……俺を眷属からはずして下さい」

「イツセー。冗談でもそんな事言わないで……今度言ったら叩くわ」

「……行かせて下さい」

そう、彼は四肢を縫い付けられて殺されそうになった。悪魔だからか。トラウマになるようなことだ。

それでも尚、兵藤は行くと言う。

頭を下げて俯く兵藤に部長は手を振り上げるが、朱乃さんが耳打ちした事で手を下ろした。

おそらく墮天使勢についてだろう。……ならば原作通り許されるということか。

「そう……好きにきなさい」

「……はい」

「ああ、イツセーは勘違いしてるかもしれないけど……兵士は決して弱くないわ。チェスと同じ。敵陣に入れば女王にもなれるのよ」  
……そう言つて部長は出て行つた。

兵藤は仲間を引き連れてあの廃教会に向かう。

一度殺してもう一度殺そうとしてきた元彼女がいる場所に。

………凄いと純粹に思える。

彼は元々……原作では殺されるかける事はなかった。

見逃してもらえないはずだった。

俺のせいで殺されかけたと言うのに、彼は俺を責めなかった。

寧ろ有り難うと感謝されてしまったのだ。「俺に誰かを救うための力の使い方を教えてくれて感謝してます」と。

………とんだ大バカヤロウだ。

少し思いつめてた俺の方がバカみたいだった。

「此処があの女のハウスですね」

「小猫ちゃん……冗談言う余裕があるんだね」

「いえ、もう向こうにはばれて居るみたいですから」

兵藤と小猫ちゃんは木の陰から顔を出しながら話していた。

「強行突破で行こう。アーシアさんは地下の祭儀場に居るみたいだね」

木場が言い、暫く様子を見てから小猫ちゃんを前に、並んで扉の前

に行く。

小猫ちゃんがノック代わりに扉を破壊して中に突入した。

「やーやー！ いらっしやい！ クソの悪魔さんたち！……おろろ？  
はじめまし——ぐへえ」

出てきた白髪神父に『自分の位置』を滑らすように『ずらして』詰  
め寄り一気に殴り飛ばす。

「先輩……容赦ないっすね」

「流石です鬼畜先輩」

「小猫ちゃん、それ褒め言葉じゃないよ？」

吹っ飛んでいく神父を見て三人がいう。

しかしまともに相手をしていたら遅いのだ。

急がないと奴らは逃げるだろう。

「ほら話してないで、さっさと行くぞ！」

『はいー』

小猫ちゃんは頷き、二年生の二人は気合いを入れるように返事す  
る。

そうして祭儀場へと俺達は下りた。

祭儀場。

下に居たのは大勢のはぐれ悪魔祓い。

具体的な人数は分からないが、向こうに見える十字架に磔られてい  
るアルジェントの元に行くには骨が折れるだろう。

「……どうしますか」

「これは……小猫ちゃんが一誠くんを投げ飛ばして」

「げ……」

「ふむ……」

どうしようか。一応、俺一人でも打開出来るだろう。

ならここで兵藤……いやイッセーが許してくれたことに対する礼  
としよう。

——いや、彼方を半減し奪い倍化させ譲渡しよう。

……やるぞドライブ、アルビオン。

ちよつとオーバーキルな気がするが……良いよな？

『……ハア。お前という奴は——やるか、アル』

『ああ、リクトの希望に妾らが応えようか——ドライブ』

『——Welsh & Vanishing Double Balance Breaker!!!』

「……奴良先輩？」

「小猫ちゃんどうし……え」

「ははは……まさか先輩が禁手になっているなんて」

……二天龍の神器を同時に禁バランスブレイク手させることで出来た新しい禁手  
体を一瞬にして覆う全身鎧の銀色は照明に照らされ、白の中で赤い  
光が踊る。

背からは二対の『白龍皇の光翼』デイバイン・デイバインング。そしてその間に現れた機動兵器を思わせるスラスター。

腕には赤銀とでもいうような色合いの『赤龍帝の籠手』ブレストッド・ギアが両手についていた。

胸についた宝玉の中には二匹の龍が互いに交わり螺旋を描いた紋章が浮かび、頭部は『赤龍帝の鎧』、『白龍皇の鎧』ブレストッド・ギア・スケイルメイルの名残を思わせるシルエツトである。

——それが『天龍皇帝の鎧』セレスティアル・ドラゴニアカイザー・スケイルメイル。

効果は対象の能力を半減と吸収に、能力の倍化と譲渡が出来る。

そんな一見代わり映えしない二つの能力をあわせ持っただけの禁手に見えるだろう。

だがそれは必ず対象を上回る能力を手に入るようになるという事。それが例え相手が二天龍であっても。

2／1吸い取り、×2高めれば対象の能力をそのまま自分のモノに出来る上、自分の力も倍化出来る。

……また、逆に半減する効果を二倍にして50%の吸収から100%の吸収へ切り替える事も出来る。それだけで対象を完全に無力化でき、また自らも前者より少ないが強化することが出来るのだ。

そんな掟破りな鎧を俺は身に纏っていた。

「三人とも。俺がこいつ等を引き受けよう。だから兵藤……いや、

イツセー！ シスターを……アーシア・アルジェントを助けてこい  
！！」

「……はいっ！」「はい」「了解しました！」

そうして三人は駆け出す。

やって来た四人の内の一人在禁手化したのだ。

エクソシスト達は混乱している。

「——じゃ、俺も行きますか」

『D r a i g !! D r a i g !! D r a i g !! D r a i g !! D r a i g !!  
!! D r a i g !! D r a i g !! D r a i g !! D r a i g !! D r a i g !!  
!!——』

赤い龍帝の名が二つの機械音で流れる。

広域で連中の能力を半減。吸収した力を倍化させていく。

自らの力の増加を優先した能力。

……途方も無い回数繰り返していくと、バタリバタリとエクソシストは力尽き、倒れていく。

そんな中俺は二つの光翼から魔力光を漏らさず、歩きながら三人の後ろをついて行く。

時折襲い掛かってくるエクソシストを指で弾いて、散らす。

——しばらくして、シスターの名前を呼ぶイツセーの咆哮が祭儀場に響き渡った。

## ヨミガエル曰

イツセーはアーシアを抱え、地上へ。

俺も又、残りの弱りきったエクソシスト達を木場と小猫ちゃんに任せ、後を追った。

そして――

「!! ――レイナアアアアレエエエツツ!!」

「赤龍帝だからって調子にのるんじゃないわよツツ!!」

――イツセーが怒りの慟哭を響かせた。

一歩及ばず。

イツセーが地下から連れ出したアーシア・アルジエントはもう喋らない。

神器を抜かれ、魂を傷つけられ。

力無く、ぐったりと。

廃教会に残る長椅子に物言わぬ姿で横になっている。

………俺がいなければ、であるが。

涙を零し怒りに震えるイツセーに対峙するのは――墮天使レイナーレ。

その様子をアルジエントに『トワイライトマザー・ヒーリング聖母の抱擁』をかけつつ、俺は見ている。

アーシアと俺の存在は現在レイナーレの認識から『ずれている』。

俺はのんびりと眠る彼女の魂を修復する。

………そう、『聖母の抱擁』で彼女を救うことが出来ていた。

あと二、三分で治す事が出来るだろう。

………しかし神器を無理矢理はがされた時の痛みは想像を絶する。

一度だけ試した事があるのだ……興味本位でやって後悔したが。

そのため彼女が起きるのには時間が掛かるかもしれない。

「……うん……お早う御座いますう……うん? あれ、私……」

アルジエントが起きた。

無事治せたようだ。

魂の傷は身体的傷を治すより時間が掛かるのが悩みどころだ。

……ちよつと弄つてやれば改善出来るが。

「おはよう、アルジエントさん。痛い所はもうないか？ 助けられて良かった……」

「は、はい……えつと何方どなたでしょうか」

「悪魔でイツセーの先輩。ほら、あそこでイツセーが戦つてるでしょ？」

此処からちよつと離れた位置で戦う、空を飛び槍を投げるレイナーレと槍を砕き倍化の力を溜めるイツセー。

「イツセーさん……レイナーレさま……」

「まあ、本格的に危なくなったら助けるよ。……ちよつと聞きたいんだけどいい？」

心配そうに瞳を揺らすアルジエントに……俺は聞きたい事がある。

「……なんででしょうか」

「——レイナーレ。……あの墮天使は君から見て……どう？」

「どう、とは……？」

「そう。——アルジエントさんから見た、あの墮天使の印象は？」

「印象、ですか。よく分かりませんが……——ただ、いつも憂鬱そうにあの方は窓の外を眺めてらっしゃいました……何を思ってたのかは分かりませんが……」

……。

「……それで？」

「それで私は……きつとあの方は誰かに愛されたかったのでは、と思います。儀式の前、神器を抜き取られる前にそんな事を言われましたから……でもそれが？」

……なるほど。

「……シスターアシア。……貴女はあの墮天使の事を許す事は出来るか？」

「……。どういうことですか？」

「ああ、説明不足だった。……あれでもイツセーは純情な奴でさ。美人な女の人がいたら目で追っかけてしまうような奴だけ……でもきつとレイナーレ、あの墮天使を殺してしまえばきつと一生トラウマ



になつてしまふと思ふんだ」

「はあ……」

「それを乗り越えるのも奴の成長になるのかもしれない……だけど俺はそんな姿を見たくないんだよ。きつとアルジエントさんがレイナーレを許してやればきつと殺そうとは思わなくなるだろうからさ……」

バカだ。イツセーはバカだ。

でもバカだけどバカなりに色々考えてる。

……それは勿論己を騙したはずの天野夕麻レイナーレの事もだ。

これから先例え夢であるハーレムを作ったとしても馬鹿みたいに忘れようとしても、頭のどこかで考え思いつめるだろう事はなんとなくが分かる。

原作でもイツセーは何だかんだと言いつつ肉体関係は持っていないのだから。

「……レイナーレさまはイツセーさんに一体何を……」

「イツセーの恋人をしてアイツにとつての初デートをして……騙して殺した。……将来危険になる神セイクリッド・ギア器を持っているからといって」

「そんな……！ でもあの方は……」

「ああ。……レイナーレも多分初めてだったんだろうさ。……こればかりは本人に聞かないと分からないけど」

……でない俺が、あの写真を見て「悲しそう」だなんて事思ふわけが無い。

人外だろうと人であろうと、生まれてから18年演技を続けてきた俺に演技をしているか、していないかが分からない訳が無い。

原作でイツセーが悪魔になったと知った時、何故あの女は顔を歪めたのか。

何故、赤龍帝だという事が分かつて悪魔になつていたのに殺さなかつたのか。

「……でもきつと奴もイツセーの事を愛していたと思う。短い期間だったけど……それでも人間の天野夕麻として」

アルジエントは頷く。

「……わかりました。ただ、少し時間を下さい。一度レイナーレさまとお話しをする時間を」

「うん。それくらいなら用意しよう。……趣味が悪いけど俺も興味があるしな」

「ありがとうございます。……きつと一度、殺された私が許せればイツセーさんも納得してくれるはずです。……納得してくても私が何時か納得させて見せます！」

セイクリッドギア。

『トワイライト・ヒーリング聖母の微笑み』が宿る指輪の存在していた指を、彼女は悲しそうに撫でる。

「——そう、死んでしまえば本当の解決なんて一生、出来ないと思いますから……」

——その言葉は、聖女として今まで誰かを治してきたシスターアシアの——助けようとして助けられなかった人々への思いが詰まっているような気がした。

「……勝ったぞっ……アーシア……ッ！」

「かきゆう、あくまの……ぶんざいでえ……ッツ!!」

イツセーは勝利した。

俺の見せた、魔力のみの倍化を行い撃ち放つ方法で。

……騙され殺された——そんな過去との清算をつけた。

良くやったと賞賛したいが、残念ながらまだ出るタイミングで無い。

「兵藤先輩やりましたね」

「やったねー誠君」

「木場と小猫ちゃん！……良かった！無事だったんだな！」

「リクトさんのおかげでこの通り無傷でね……——アルジェントさんは？」

「ッ……駄目だったっ……!」

「……っ」

「先輩……」

小猫ちゃんと木場が地下の祭儀場から出てきた。  
いや、初めから居たようだけども……。

「……良くやったわね、イツセー」

「あらあら、一誠君一人で倒してしまったの？」  
部長と朱乃さんも来た。

……あつちはあつちで始末は終わったのだろう。

「ぐ、グレモリーッ！」

「こんばんわ、堕天使さん。アナタの仲間なら消させて貰ったわ……  
コレ、貴女なら見たら分かるでしょう？」

「ッ！……ドーナシーク！カラワーナ！ミッテルト……！」

ひらひらと部長の手から落ちてく三つの羽根。

悪魔と違い、羽根を残して堕天使はその身体を消した。

「残るは貴女だけ……つと、所でリクトは？」

「奴良先輩？」

「一誠君について先に上がっていったんですが……知らないのかい  
？」

「見て無いぞ、俺……あ、アーシア！アーシアの姿も!!」

呼ばれてしまったらしい。

そろそろ出る頃合いのようだ。

「やあ、皆の衆おそろいで。こっちはやる事やりましたよ……ほら」

「……イツセーさん」

「——アーシア!？」

レイナーレまでもが驚愕し、皆が驚き目を見開く最中。

俺の背後から元聖女のシスター、アーシア・アルジェントが姿を見  
せた。

## 転生する日

「アーシア……！ 良かった……本当に良かった……」

ボロボロの体でイツセーはアルジエントが生きている事に歓喜し、フラフラと身体を揺らしながら彼女に近寄る。

「ああ、イツセーさん！ こんなにボロボロになって……待つててください。ちよつとレイナーレさまとお話ししてきます」

「……アーシア？」

アルジエントはそんなイツセーを抱きとめて地面に座らせた。

そしてイツセーに微笑み、彼から離れてもう一人のボロボロになっている人物の所へ行く。

その墮天使……レイナーレの前に彼女は座った。

「……レイナーレさま。私と、お話ししてもらえませんか？」

「な、なんなのよ……アナタ！ 神器を抜き取られて死んだんじゃないのツ!?」

「それは……あの方に治していただきました」

「……まあ、そういうことな」

アルジエントは俺のほうに顔を向け、小さく会釈する。

皆が驚いた風に一斉に顔を向けてきてちよつとドギマギ。

部長が後で話聞かせて貰うわよ、と睨んできてるのが怖い。

——そんなことより黒歌もふもふしたい。

「レイナーレさま。貴女にどのような過去があったのですか？ ……」

墮天使となる前の事。墮天使になつてから。そして、それからの事。

……一度殺した私への贖罪として……話していただけませんか？

私は貴女の事を知りたいんです……駄目ですか？」

アルジエントは静かに語りかける。

「……貴女は私の事恨んでないの？」

その彼女に訝しむようにレイナーレは訊いた。

「……恨んで無いと言えば嘘になります。ですが……その人の事を知りもせずに、私は誰かの事を憎んだり。恨んだりしたくないんです。

……教会では悪とされる悪魔にも、イツセーさんやその先輩さんみた

いな方がいたように」

「……ふんっ……ただの小娘の自己満足ね」

「そうです、私の自己満足です。……でも世間知らずの私ですけど――考える事は出来ます。思いやる事も出来ます。……イツセイさんの先輩にさつき教えてもらいました」

レイナーレはアルジエントの言葉に項垂れた。

そんな様子の彼女を、アルジエントはじつと見る。

「……正直話したくない。でも……」

「――話していただけませんか？」

「――っ。……良いわ。話して上げる。……どうせ私は殺されるのでしようから」

そして短くも長く感じる、ある天使が墮天し今に至るまでの過去が話された。

……知ってるかもしれないけど、私達墮天使と天使は元々「神の造物」として生み出された存在よ。

私もアジアが言うように天使だった。

与えられた位としては今と同じように中級に当たるわね。

熾天使だなんて上等な物じゃなかったわ。

……でもね、私はそんな中でも駄目な「作品」だった。

中級の中でも下の下。

与えられた仕事は上手くこなせない。要領は悪い。肝心な所でドジをする。

……それが私だった。

勿論、天使と言うのは基本「赦す存在」だから私の失敗を咎めるものは居なかった。

そう、私の事を怒りもしないの。

ただ周りの仲間は「貴女の出来る範囲でやればいい」と言うだけ。

何時からだったか覚えて無いけど……でも確か同じような事が続いてたある時から。

私は「要らない存在なんじゃないか」と思いはじめて。

それから「彼らはきつと表面上は私を許してくれているけど、でも本当は消えてしまえば良いと思ってるんじゃない」なんて疑心暗鬼になってしまった。

……今思えばそれが堕ちる切片になっていたのかもしれない。

疑心暗鬼に陥って、私の事を本当に気に掛けてくれて……愛してくれるような存在はいないモノだと思って。

誰かに愛されたくて。求められたくて。

……それで私は堕ちたの。

私が堕ちてからしばらくして、アザゼルさまとシムハザさま……その他のミカエル様達セラフに近い上級天使の方々が地獄に堕ちてき、そして「神の子を見張る者(グリゴリ)」という組織が地獄……冥界に出来た。

勿論私も其処に組み込まれたけど。でも結局……天界にいた時となんら変わり無い生活。

……ただ失敗した時、疎まれるということが増えただけ。

「……だから私はアーシア・アルジェントが魔女に認定され『神の子を見張る者』に組み込まれた時、私は彼女の持つ神器を奪い、アザゼルさまやシムハザさまに気に入られようとしたのよ。……それで私は求められてる、必要とされてる……って自己陶醉に浸りたかったのじゃない。バカな私は……」

「……」

手を後ろでつき、未だに肩で息をするイツセーはジつとレイナーレをみていた。

レイナーレの言葉に嘘はなかった。

……嘘があったら俺は全部喋らせる前に奴の口を塞いでいる。

イツセーにもある程度本当の事だと言うのが分かっていたのだから。

目は真剣に話していたレイナーレを捉えていた。

「あら、なに、イツセー君。……笑いたい？ 自分を騙して殺した女の事、笑いたい？ ……貴方を殺した女はこんな愚かな奴なのよ……至

高だ至高だなんて言ってる……あーもうホントにバカみたい。分かってたでしょうに……どうせドジをするって。結局グレモリーにバレて、騙して作ったとはいえ仲間も殺されて……最後には危険だと思っ  
て殺した元彼氏が悪魔になって復讐しにくるなんて……ほんとにばかみたい」

自分の事を語り、愚かだと言うレイナーレは涙を流す。

アルジエントもどことなく俯いていた。

イツセーは複雑そうに押し黙っている。

「レイナーレ。……いや、夕麻ちゃんは俺の事——愛してくれてたのか？」

「さっき聞いて無茶苦茶に言われて、改めてよくそんな事聞けるわね」

「——答えてくれ」

「ハア……ま、私は死ぬのでもいいか。……——愛してた。……バカみたいに王道なデートで、バカみたいに気遣ってくれて、バカみたいに期待して……そんな貴方の事が可愛くて愛しくて愛してたわよ。悪魔になつてシヨックも受けた。……多分今もアナタの事を愛してるのかもね——プレゼント、今死ぬ寸前まで大事にしちやつてるから」

「……っ！」

イツセーは顔を歪める。

……なにせ殺したいほどに憎んでいた相手だ。

そいつが「愛してた」と本気で言うのだ。

困惑しても当然だろう。

「……レイナーレさま。私は許します……私に、私と同じ誰かを求めている貴女を……これ以上責める資格はありませんから。……イツセーさんはどうですか？ 聖女として祭り上げられて、『友達』という誰かを求めていた私の、初めての友達になつてくれたイツセーさんは——この方の事をどう思いますか？」

「アーシア……うん。——俺はレイナーレの事……許すよ。夕麻ちゃんのこと、まだ好きだからさ……」

「……っはあ？ 何言ってるのよアナタ達……私は殺したのよ？ そ

れなのにつ……なんで許すのよっつ!! ……バカよっ! アナタ達はッ!」

二人の言にレイナーレは叫ぶ。

「——バカでも良いよ。実際バカだから。俺の事好きになってくれて俺が好きになった女の子に……一回殺されたくらい許すよ。バカだから……って言うててむなしくなってきた」

「イツセーさんも私も今こうして無事に生きているのですから……私もレイナーレさまの事、許しても当然ですよ」

イツセーもアーシアも。

悪魔とされて魔女とされて。

絶対悪とされた存在の二人は一度自分達を殺した、堕ちた天使を許していた。

「——ホントにバカよ——」

暫くの間、ぼたりぼたりとレイナーレは涙で床を濡らし、聖母のようなアルジエントに慰められていた。

——結局レイナーレは赦された——

「ふーん……あの神器って禁手だったのねえ——なんで言わなかったの?」

「別に問題無いかな、と。聞かれなかったし。……まあいいじや無いですか。おかげでイツセーは死なずに済んだし。アーシアさんも生き返れた。大団円で良いじゃない」

——俺は事態を收拾するため、レイナーレに三つの選択肢を与えた

「私悲しいわ、眷属に隠し事されるのって」

「そんな風に科しなを作って言われても……露出狂部長じや俺は靡きませんよ。俺、好きな人居ますし」

「アナタの好きな人も気になるけど——ちよつとまって。露出狂ってアナタ……何の事いつてるの?」

「何って……イツセーの横で裸で寝たり。幾ら部室の中だからと言って見せつけるように下着履いたり。日本での暮らしは長いんでしょ



? ……露出狂じゃなかったら何になるって言うのでしょうか?」

「……ひ、否定出来ない……っ!」

——1つ、「神の子を見張る者」に戻り、しかるべき罰を受けるか—

「ちわーっす!」

「こんにちわ」

「あ、あら。イツセーに小猫じゃないの……きよ、今日は早いね」

「? どうしたんすか部長。いつもと同じ時間ですが……」

「おかしいです」

「そ、そうだったかしら……—私が、露出狂……っ?」

——2つ、墮天使として羽根を残しすぐにも消されるか——

「ま、まあいいわ……入ってらっしゃい、二人ともイツセーが来たわよ?」

「ん? なんですか部長——」

「——イツセーさん」

「……イツセー」

——……そして3つ目——

「……ってええ!」

「ど、どうでしょうか?」

「に、似合うと思う?」

——『墮天使である事を死して辞め、転生悪魔と同じように人外へ

天野夕麻として転生するか』——

結局彼女は三つ目を選んだ。

元聖女の神器『トワイライト・ヒーリング聖母の微笑』の使い手である『僧侶』アーシア・ア

ルジエント。

そして元墮天使のレイナーレ改め人外にその身を転じた天野夕麻。

一人はグレモリー眷属として。

一人は祝福も無く光の力が使える天使のような白い翼が生えた、新

しいこの世に生まれた種族として。

新しくこの駒王学園の二年生として入る事となったのだ。

恐らく変態馬鹿三人組と同じクラス。

「まさか『幽世セフィロト・グラールの聖杯』まで持つてるなんてね……なんで兵士の変異の駒で悪魔になれたのかしら」

「さあ？」

聖杯の話は残念ながら真っ赤な嘘だ。

堕天使から光の力を操る能力を『ずらして』残し、種族を『人外』に『ずらす』。

それから翼を『黒』から『白』に『ずらした』だけ。

これで『翼の生えた人外：天野夕麻』の完成だ。

だから流石にチートしてる俺でも聖杯は持つていない。

あ、でも代償は『ずらして』しまえばいいし……。

……ちよつと手に入れてこようかな、と思う俺は悪くない。

## 戦闘校舎のフェネクス 修行に行く日

アーシア・アルジエントが眷属入りしてしばらく経った。

天野夕麻と共にアルジエントもイツセーの家にステイする事に決まり、ハラハラドキドキのイツセー君のハーレム化が進む今日此の頃。

レイナーレ否天野夕麻の事を許したとはいえ、イツセーはやはり騙されて殺された事が少しトラウマになっているようで無自覚に鈍感形主人公になりつつあった。

そんな、原作から改善したのかしていないのか分からない、という俺の心境はともかくとして。

人外になったレイナーレ改め天野夕麻は鬱々としていた。  
主にイツセー関連で。

やっぱり罪の意識があるのだろう、と予測するが……もう俺にはどうしようもできないので、一緒に彼の事を好きになったアーシアと改善していつてもらいたい。

だが俺としては正直そんなことより俺が黒歌とイチヤイチャしたいのだ。

無責任かもしれないが実質きつかけを作っただけであるし。

黒歌と相思相愛になれるのがまず俺にとって第一なのだ。

本当に果たす事が難しい、とても大きな……愚者である俺の切なる願いだ。

——で、現在オカルト研究部から帰ってきてきて自宅。

食事も済ませ入浴もそれぞれ済ませた後。

黒歌と並んでテレビ見ながらジャーキーを齧ってた。

「ねえ、黒歌さん。モフらせて」

「急に何言って……」

「猫の姿で良いからさ。……お願い！」

「……絶対リクトはいやらしいことするから駄目にやん」

未来の嫁が冷たいです。

絶賛寒冷期です。温暖期よ、来い！

「ハア……あ、話し変わるけど、黒歌さん。そろそろレーディングゲームするかもしれない。多分相手はフェニックス」

「何処からそんな事が考え付くのか私には分からないにやー。……そういうえばグレモリー家のフェニックス家の次男坊が婿入りするとかいう話を冥界居た時に聞いた覚えが有るような無いような……それと関係あつたり？」

「多分。なんか最近部長さんが暗いオーラ出してるから。……あのおてんば姫さんと焼き鳥の婚姻が早まるんじゃないかな、と。……で、色々と擦すれてお家同士のレーディングゲーム」

開幕ぶつぱでケリを付けても、きつと問題無いだろうけど……。イツセーの奴には今回頑張つて貰おう。

「はあ……また忙しくなるの？」

「うん。……グレモリー眷属つて基本脳筋が多いから修行するとかいってなんかしそうな気がする」

「……白音も？」

正直修行に行った所でイツセーとアルジエント以外為にならない気が、黒歌もするのだろう。

それでは俺が居ない状態で勝つ事は出来ない。

……ちなみに天野夕麻はイツセーとは使い魔契約をしたらしい。

ただしレーディングゲームに出る事は出来ないそうだ。

残念そうだったが仕方ない。

「多分。……戦車にしては白音ちゃん、言っちゃ悪いけど弱いし仙術使わないから……あの中では一番早く落ちるかもしれない」

「それは……どうにかできないかにやー……」

「仙術を使わせるようにする？」

「うっ……それつてつまり私が白音に指導をするつて事？」

「うん」

……ジャーキー齧つてたらお酒欲しくなる。

買ってこようって……駄目だ。まだ未成年だし。

昔や妖怪じやあるまいし、13で元服と言うわけじやないのだ。

あ、いや、悪魔だった。ならOKか？

「り、リクトが教えて上げれば良いじゃない？」

「……俺が教えないと駄目？ 黒歌さん頑張ろうよ。打ち明けるチャンスだよ！」

「……あうう……じゃ、じゃあ今度デートしてあげるから……駄目？」  
「え」

なんて言った？

「デート？ デートだと!? ……ゆ、夢じゃないよな……現実？ ホントに？」

「ハア……落ち着いてよ……現実だから。……夢じゃないにやん」

「マジか!? ひやつふい！ 黒歌とデートじゃああああ！」

うっしやー！ 思わぬ展開！ 柵からぼた餅！

くろかー！ 愛してるうううー！

「うるさいにやー！ ……それ以上叫んだら怒るよ？」

「はい」

うん、はしやぎ過ぎた。

落ち着こう。デートは逃げないのだから。

「……ちよつと不本意だけど……うん。じゃあその例のレーディングゲームが終わったらでいいかにやん」

「つまり条件的には白音ちゃんの仙術への恐怖心の払拭＋マスターってことか……よし。目指せ最強の戦車」

「あー……うん、じゃあそれでいいよ。あ、でも無理矢理に仙術使わせたりしたらデートしないからね？ あとセクハラとか……」

「了解！ ……ふふふ。何を教えてあげようか……」

『波紋』も然り『念』も然り『ドラゴンボール』も然り。

とにかく仙術はゲーム・漫画・アニメに出てくるような『気』を操る術なわけだ。

勿論自分が使える事でそれは実証済み。

……デートも楽しみだけけど白音ちゃん強化も面白くなりそうだ。

「えつと、……程ほどにね？」

「あ、うん。……コンビニ行こうと思うけど……一緒に行く？」

「なんでそんなに唐突なの……私も行くにゃん」  
夜遅く。

少し離れたコンビニに二人で足を運んだ。

「……悪魔ってお酒は二十歳になってから？」

「さあ？ ……多分良いんじゃない？」

人間はお酒は二十歳になってから！

「——いい加減にしてライザー！ 私は貴方とは結婚しないわっ！」

その言葉から始まり、決まった非公式のレーディングゲーム。

相手はライザー・フェニックス。

試合は10日後。

そしてライザー含め眷属と、現魔王ルシファアのメイドであるグレイフィア・ルキフグスが去った翌日。

今日からオカルト研究部は全員学校を休む事と、これから全員で山籠りをするから用意しろと部長さんからメールが入った。

ちなみにウチのドラゴン一匹の事を赤トカゲだなんて言いやがってくれた焼き鳥野郎は一度去勢してやった。

……まあ、フェニックスだし大丈夫なはずだ。

自分のもヒュンとしてちよつと後悔。

そして連絡が来てから現在自宅にて準備中。

「……勘って怖い。ホントに山籠りして修行するとは……」

「黒歌さんそんな目で見ないで。一応ビツクリしてるから」

俺と言うイレギュラーが居てどうして原作通り事が進むのだろうか。

……神器を腐らせる程持つて、禁手使えて。そんな俺に頼ってばかりではいけないとでも思ったのか？

それはそうと黒歌は思案気に俯いてた。

「……でも私は？ 一応飼いだ猫扱いでしょ？ リクトは一人暮らしっ

てあの人たちに言ってたし……」

「あー……考えてなかった。一緒に行ける？」

「……どうしよう……」

ペットを10日間も放っておく事は少しおかしい。

とはいえ連れて行くとして、10日間もの間、猫の姿のままにいるのは黒歌にとって負担が大きい。

「……人型に戻った時に『存在の認識』をあの人たちからせせない？」

「あーそれなら……そうするか。……にしても修行つけて欲しいなら俺に言えばいいのに……」

ホントに。

時間も増やせるし、修行の効率も上げれるから。

……現にイツセーの奴は既に5〜6回の倍化は掛けれるようになってるし。

「ホントに白音の精神壊さないでよ？ リクトの修行は精神的に参るんだから……」

「いや、あれは黒歌が……や、なんでもないです」

「分かればよろしい」

実はこの黒歌さん。既に色々と出来るようになってたり。

鍛えて欲しい、と言われてちよつと修行したのだ。

何処に気円斬が使える猫又悪魔がいるのか（此処にいるぞ！

「とりあえずイツセーは禁手を使えるようにするから。覚悟しとけよ  
焼き鳥野郎！」

「……やっぱりおかしいにやん」

荷物の支度をして、鞆の中に黒歌を入れて駒王学園旧校舎に向かった。

## 修行を始める日

「ひい…………ふう…………」

「ほら、イツセー。頑張れ頑張れ」

「がんばりなさい、イツセー。ほら、レイ…………じゃなかったわね。天野さんも見てるわよ?」

「くううう!」

兵藤一誠、十六歳の春。

俺と部長に追いたてられながら彼は山を登っていた。

「…………にしても余裕そうね、リクトは。ホントに人間だったの?」

「えー人間ですよ…………疑ってます?」

厳密には違うらしいが。

黒歌と出会ってからの高校に入っているヒトから聞いた話だ。

…………身内と言えば身内なだけど。

そんな俺の事は露知らず、部長はこくりと頷く。

「勿論よ。だって一つしか無い神滅具を貴方一体何個持ってるつもり? それにイツセーも貴方と同じ神滅具持ってるし」

「さあ? ……でも神滅具持ってる時点で人間だって証拠でしょう?」

それに天野がやってたように他人から抜き取ったとしても、使いこなすようになるのにどれだけ時間がかかることやら…………」

「つまり奪い取ったりしてないと…………なんでこうもウチの兵士達は異常なのよ…………」

失礼な。

「イツセーは変態ですよ? 一緒にしないで下さい」

「ぬぐぐ…………! 先輩! 聞こえてますよ!」

「良いから黙って登って来い! お前が変態なのは事実だろうが!」

「うう…………!」

目標の場所は目と鼻の先。

イツセーと、フラフラと歩くアーシアの付き添いをするを天野を残して、他の全員は既に登りきっていた。



荷物をおいて、いざ修行。

「じゃあ「部長、俺から一つ良いですか？」……何よ、リクト」  
だがしかし俺は「待った」を掛ける。

きつと部長さんの修行内容はイツセー、それからアジアの強化がメインにしようと考えているだろうからだ。

禁手を既に使える俺は除外されてるとみて、習うべきは座学くらいだろう。

新規メンバーだけでなく、四人も鍛えるべき。

でないと、まず紛いなりにも不死鳥であるライザーに勝つ事なんて無理な話だ。

「リアス部長。今回の目的はなんでしょうか？」

「？……何って修行だけど？」

「質問を変えます。……今回の修行で鍛えるべきメンバーはイツセー、アジアの二人だけですか？」

「言わんとすることは分からないでも無いけれど……でも、必然的にそうなるわよ？ なんせ10日しかないのだから」

まあ、そうだろうと思った。

なんせ時間は限りなく無いに等しい。

イツセーは俺の言いたい事が分かったようで、納得した顔をする。

「えっと、奴良先輩もしかして……」

「イツセーそれは後でな。……リアス部長、新規メンバーだけでなく貴方たちも鍛えますよ。得に木場と小猫ちゃんは」

二人が驚く。

朱乃さんは口元に手を当て、驚きながらも聞いてくる。

「どうしてでしょう？ さつき部長が言ったように時間は……」

「無い事は無い。……な、イツセー」

「……はい。先輩の神器らしいんですけど、一定の空間の時間を引き延ばす事が出来るらしいです。俺も、ブーステッド・ギアの使い方を教えて貰う時に……」

「あらあら……うふふ。それは初耳ですわね」

朱乃さんが心底面白そうだ、という表情になり口を閉じた。

プルプルと部長さんが震え出す。

なんだろう、風邪でも引いたのだろうか……なんて。

「リクト！ 貴方ってヒトは……どうして先に言わないの！」

「だって聞かれなかったし」

聞かれなかったし。大事な事なので二回言いました。

とりあえず時間のことについてはなんとかなることが分かった。

ただ、肝心の鍛える内容には触れて居ない。

気になったようで名前の出た二人が聞いてくる。

「流石です鬼畜先輩。……でも私と祐斗先輩はどう鍛えるんですか？」

「いやだから、小猫ちゃんそれ褒めてないよ。……ただ僕も気になります。何を鍛えたら良いんでしょうか？」

「後で別個で言う。……二人の引き出しについては俺は知ってるからね？」

二人は黙ってじつとこちらを見てきた。

「……」

「どこまで知ってるか分からないですけど……何時気づきました？」

「初めからだよ。術で知って神器が教えてくれた。……さ、ほかに何か質問はある？」

二人は黙り、イツセーの隣にいるアーシアはオロオロしていた。

そんな中、天野が口を開く。

「……本当に何者なの、貴方……？」

「俺ですか？ 俺はリアス・グレモリーの兵士の一人で神器を沢山持つてる、ただの転生悪魔です」

ニコリと全員に笑いかけ、一応この妙な空気を『ずらした』。

まずはこの『山』という一帯を時間軸から『ずらし』、気を取り直した部長の声掛けでイツセーの戦闘技術の訓練が始まった。

とりあえずイツセーは木場と小猫ちゃんと一戦交えて、己の弱さと技術の重要性を身を持って知って貰った。

後は持久力を増やしてもらう。

それは小猫ちゃんを除いた女性組に任せた。

煩惱は奴を強くする。……良い所でもあるし悪い所でもあるけど。

「じゃあ木場。お前の神器は『魔剣創造』<sup>ソード・バース</sup>であってるな?」

「はい。……でも先輩は……」

「持ってるよ」

「……ははは。もう僕は何聞いても驚きません。ええ、決して」  
無理だろう。

神滅具の『魔獣創造』に、『魔剣創造』の聖剣版である『聖剣創造』、  
その他創造系神器を持つてるって聞いたら卒倒するだろうさ。

「じゃ、とりあえず一個作って見せてくれ——自分の思う最強の剣を」

「……っ! わかりました。——ソード・バース!」

「甘いッ!」

「な!」

形成される剣より先に剣を創り出し、叩き折った。

俺の作り出した剣は黒く、脈打つように赤黒い剣だ。

……スペックと造形はセイバー・オルタの『魔剣エクスカリバー』で  
ある。

魔力を込めるとその魔力を内部で『切断』の概念を帯びた魔力に変  
換&増大させる優れものだ。

魔力の込め具合によればまんまFate／のエクスカリバーであ  
る。……世界観が違うからちよつと貧相に見えるけど。

その剣で、切れ味が上がるレベル程度の魔力を込め斬った。

パラパラと光の粒子になって消えて行く木場の魔剣の残骸を見て  
言う。

「……今考えただろ? どうしたら強い魔剣が創れるか」

「そ、そうですねけど……いきなり破壊するのは酷くないですか!」

「酷く無い。俺と同じ速度で創れるのなら壊されず受け止めれてたは  
ずだ。木場っちは騎士なんだし」

「っ! そうですけど……でもどうしてそんな早く……」

「I am the born of my sword. ……  
知ってる?」

「知らないです……でもそれが何か？」

「そうかー知らないかー。」

「イツセーは知ってたからなあ……よし、木場はコレを見てさっきのセリフを言った人について、Wiiでもいいから調べて理解を深めろ」

「え、ええつと、でもこれって……」

「俺はそのイメージで魔剣創造を使ってる。……アニメ、漫画、ゲームだとか……創作物だからと言って侮るな。魔剣創造や聖剣創造の使い手からして見ればそれは指南書と言っても過言では無い」

「は、はあ……でもこれ聖剣の出てる話ですよね。……僕、聖剣って嫌いなんですよ……どうしようもなく」

俯く木場。

その声からは憂いと恨みを感じさせる。

色々あっただろうから……仕方ないか。

「……まあ、嫌なら見なくても良い。でもそんなことでは強くなれないし己の意地も通せない……悪魔の世界って力がモノを言う世界だろ？ 本当にそれで良いのか？ 力を貪欲に、妥協せず、一切の悔恨も残さぬために……求めるべきじゃないか？」

「……それで強くなれるんですか？」

「保障しよう。もし強くなれなかったとしても時間は10日以上ある。だから俺が噛み砕いて教えてもいいけども……しかし自分で得た方が為になると思う」

「……少しだけ、我慢して観てみます。実際に先輩は見せてくれましたから」

俺からその映画の入ったBDを受け取って、早速彼は与えられた部屋に行ってしまった。

ちよつと気負いすぎじゃないかな……失敗したかもしれない。

でも、まあその時はその時で最終手段。「ずらして」修復してやろう、うん。

良心が少し痛むが我慢だ。

じゃあ次。

今回の俺の此処に来た一番の目的。

「奴良先輩。私はどうすれば……」

「ちよつと、話しをしよう。——猫又の中でも仙術に長けた一族である猫？の小猫ちゃん」

「……っ……やっぱり知ってたんですね。……仙術ですか？」

「ああ、仙術を覚えて貰おうと思う。……きつとこの先、君は力が無い事に後悔するだろうから」

——言うや否や。

小猫ちゃんは拳を握り殴ってきた。

「——私には戦車の力で十分ですっ！」

「……それで守れるのか。要らない意地の為に己の大切な人を守る事が——出来るのかっ！」

その拳を受け止め、俺はその細い腕を振り払う。

あまり重くない拳だ。そこまで本気ではないのだろう。

「貴方には……貴方には関係の無い事ですッ！」

「所がぎつちよん！ 関係大有りさ。……リアス部長の下に集まった仲間なもの！」

殴り、受け流すを繰り返す。

時折混ぜてくるフェイントを見切りつつ、しばらく森の中にて先ほどの一発とは違った少々本気の戦闘を繰り返した。

## 説得する日

小猫ちゃんが先にバテた。

「……落ち着いた？」

「当たってくださいますよ奴良先輩っ！ 私の事なんて何も知らない癖にッ！ なんで——」

「仙術を忌避する理由は知らない。……でも赤の他人である俺が聞いて良い事なのか？」

「っ……それは……！」

——本当は赤の他人と言うわけでは無い。

愛してるヒトの抱える問題だ。

でも其処に俺が直接首を突っ込むのは間違ってると思うから。

……だからせめて彼女の手伝いはさせて欲しい。

それは驕っている、自分でも思うけど。

「小猫ちゃんが話そうと思わないなら俺は無理に聞かない。……でも、さつきも言ったけど一応俺と小猫ちゃんはリアス部長の下に集まった仲間だ。『王』のリアス・グレモリーからしてみれば家族同然の事だと、俺は聞いた覚えがある……違うかな？」

「違わないです……っ。でも……！」

「小猫ちゃんが俺の事を仲間だと思ってるなら話してくれてもいいよ。それで小猫ちゃんが仙術を使えるようになって、そして誰よりも強い戦車になろうと思うなら……俺は何時でも話しを聞くからさ」

「……」  
ぺたりと小猫ちゃんは座りこんだ。

……ヤバイな。なんだか口説いてる気分。

口で説くって言う意味の「口説く」なら問題はないけど。

——……ずらす。

小猫ちゃんの俺に対する感情を親愛にずらして軌道修正をした。

ヒトとしてやっちゃいけない事だけ……ゴメン。

「………ふふふ。おかしいですね。今ちよつと先輩のことかつこよく見えちゃいました。……話、聞いて貰えますか？」

「お、おう……」

危なかつたみたいだ。

……はあ。黒歌に見られてないと良いんだけど……無理だな。うん。

あそのこの木の上でめっちゃ見てるもん。……妹を口説いたって怒られる。

——そして白音ちゃんの口から語られるのは、白と黒の姉妹猫のこと。

優しくて温かかった姉猫の事。

才能溢れる姉が上級悪魔の目に止まり、悪魔となり、もう明日死ぬかもしれないという事を考えなくても良いようになったこと。

でもそれは違った事。

姉が主人を殺し妹をおいて逃げた事。

小猫になる前、猫又猫？の白音ちゃんの受け取った姉の暴挙に対する思い。

ある悲しい事件の一側面。

「その妹が私です。……分かりましたか？ 私が仙術を忌避する理由が……恐いんです。姉さまみたいになるのが」

森の中で語る、白音ちゃんの独白は終わる。

白音ちゃんはいつの間にか泣いていた。

……それは木の上にいる当事者も同じ。

黒猫も目から小さい雫を零していた。

「どうするかなあ……おいで、黒歌」

「え……？」

「ああ、ちよつと吃驚した。なんせウチの飼猫と一緒の名前なんだ。そのお姉さんの名前。……早く来いってば」

急に名前を呼ばれて木の上の彼女は酷く狼狽していた。

……あ、落ちて足から着地した。……猫って本当に足から着地できるもんなんだなあ……。

トボトボとゆつくりこつちに来る。

「よしよし。……お前木の上なんかに登ったりして……ホントにどう

やってお前ついてきたの?」

「……。先輩、本当にその猫はただの猫なんですか?」

「うん? 多分。三年くらい前に拾ったんだけどね」

ビクリ、猫の身体が震える。

念話が来た。

『止めて、リクト!』

……でも本当に良いの?

『駄目だけど……でも、まだ……』

……。

俺が言う筋合いは無いけどさ……何時になったら打ち明けられるのよ、黒歌さん。

本当に……一生打ち明ける事なんて出来ないよ?

『うう……でも……』

わかった。じゃあもうそれっぽい事は言わないから。

……ごめん、余計な事した。

『……リクト!』

「……どうしたんですか先輩」

「んあ? や、ちよつと考えてた。小猫ちゃんいや、この場では白音ちゃんと呼ぼう。……白音ちゃんはそのお姉さんが嫌い?」

「直球ですね……好きでした。けど嫌いです。だって私の事、置いて行ったから……姉さまは私の事が邪魔になったんです。それで姉さまが行った後、私は……」

——処分されそうになった。

ああ、これだ。これが俺が少し悪魔を嫌う理由。

……いや、悪魔だけに言える事じゃない。

人、妖怪、悪魔、天使。

知性ある生き物が異端を嫌うかのような、忌まわしい存在を理解もせず消そうとするのが。

なんのために知恵を付けたのか。

なんのために頭が付いているのか。

なんのために——。



「先輩？」

「……ごめん、また考え事。……どうしてもそういった話を聞かされると考える所があるからさ」

「……先輩らしいですね」

苦笑された。

ちよつと暗い気持ちが晴れただろうか。

もう一押し。

「さて。……ちよつと話したけどさ。やっぱり使う気にはなれない？」

「……はい。まだ恐いです」

結構深いトラウマになってるんだろう。

……腕の中でピクリともしない黒歌が少し気になる。

「そうか……俺は恐くはない。誰かを救う事ができる。誰かを守る事が出来る……俺にとって仙術は大切なヒトと一緒にいるために振るえる力の一つだ。だから外界の瘴気なんてものは……俺はそれすら従えてやる。……自分に毒になるように、それは相手に送り込めば毒になるんだから」

「……そう、ですか……」

言う事は言った。

あとは小猫ちゃんの決心しだい。

「すぐに結論を出せとは言わない。だから考えてみて。……大事な部長を守るため必要と思ったら……俺の所に言いに来れば教える。暴走しない方法に……瘴気を従える方法を」

「……わかりました。少し、考えてきます……」

そういつて、服に付いた土を払って小猫ちゃんは先に戻って行った。

……黒歌が腕から飛び出てその場で人型に戻る。

同時に俺は自分と黒歌を外界から『ずらした』。

「……リクト。どうしてあそこで私の事を……」

「ちよつとした出来心じゃ駄目……だよな」

「うん。……どうしてなの」

追及する言葉は少し刺々しい。

少し恐い。

もしかしたら嫌われるんじゃないか、と思うとどうしようもなく恐い。

そんな関係でないにしろ……多少なりと好意を受けている自覚はあるのだ。

今の関係は楽しい。でも先にも進みたい。

……とにかく今は。

ちゃんと答えなければ軽蔑されるだろうことは、既に分かっていた。

「デートの約束を黒歌はしてくれたけどさ……今回の合宿で白音ちゃんの強化は打ち明ける絶好の機会だと俺は思ってたんだ。……目先の欲に囚われたけど」

「私もそれは……なんとなく分かってた」

「……そう、絶好の機会だったんだ。今回の事は。……白音ちゃんに仙術を教えに来た、と言って彼女の前に黒歌が出る。何故黒歌が主人殺しをしたか、何故白音ちゃんを置いて一人で逃げたか話せば……良いと思っただ」

思っただ。

実際にどうなるか、その時にならないとわからない。

所詮シミュレートだ。想像と現実は大きく違う。

……少し、自分は浅はかであったか、と今なら思う。

「……」

「やっぱりもつと二人の溝は深いのかな」

「……わからないよ私には。白音の苦しみは……わからないよ」

猫又の姉妹。

互いを想う良き姉妹であったのは……もう過去の事だった。

——未来は未だ、わからず。

## 鍛え始める日

黒歌となんとも言え無い空気になり、とりあえず彼女は黒猫に戻り部長たちの元に帰る事にした。

俺と同じく、彼女も少し気落ちしてる。

解決出来るのなら早くしたい。俺も黒歌も皆の所に帰りながらそう思ってた。

だが今はまずライザーに勝つ事を優先しつつ、小猫ちゃんの強化が最優先だ。

しかし当の本人は未だに仙術を使う決心が付いていない。

気持ちは分かるが彼女もまた、必ず何時か力が無い事を悔いる。

それこそイツセーがアジアの時に感じたように。

やはり必要になった時では遅いのだ。

……というわけで。

何時までも気落ちしてはられないので、まずはイツセーについて取りかかろうと思う。

木場は、流石に直ぐ知識を深めれるわけでは無いようで自分の部屋から出てこない。

まあ、二時間も経っていないから当然だろう。

ちよつと部屋から出てきた時の事がコワイ。

エクスカリバーに対する憎しみだとか、変に増幅させていない事を祈るばかりだ。

黒歌を与えられた部屋に戻してから、イツセーが筋トレする所に着く。

……イツセーを見ていた朱乃さんが話しかけてきた。

「あら、奴良君。祐斗君と小猫ちゃんはどうしましたの?」

「少しばかり話しをしました……まあ、何かあったら俺が責任持ちます。……で、イツセーどうですか?」

朱乃さんに答えて、イツセーの様子を見る部長に聞く。

「頑張ってるわよ。……顔がずっとだらしないけど」

見れば背中に天野とアーシアを乗せて腕立てをしていた。

……スケベな顔してやがるね、ホントに。

「アイツらしいというか何というか……。じゃ、そろそろアイツ借りて行きたいと思うんですが……」

言いかけてふと思った。

部長と朱乃さんの訓練はどうしようかと。

少し考えて思いついた。

「でもまずは部長と朱乃さんに聞きたい事が。全員の中で魔力量が一番多いのは誰だと思いますか？」

「——まさか」

「……その通り。恐らく俺が一番多いです。……魔力の質でいえば部長が一番ですけど……それくらいなら魔力の量が多ければ再現出来ます。見ますか？」

本当に出来る。

それは『ずらす程度の能力』は使わない。

俺の超圧縮された魔力に触れば全てが消し飛ばされる。

単純に攻撃力のカウントストップしたようなものだ。

「……しなくても結構よ。どれだけの規模なのか分からないし……それにアナタがこんな時に嘘を言うヒトでは無いって事は分かってるから。……それで、リクトは何が言いたいの？」

「魔力を鍛えましょう。折角修行に来てるんですから、部長たちも修行しないと損ですよ？」

「……。ええ、そうですね……。で、具体的にはどうしたらいいのかしら？」

朱乃さんも部長もこちらをじっと見て来ていた。

美人二人に見つめられると俺でも表情に出そうだ。

「体を鍛えるのも有りと言えば有りなんですけど、魔力を直接鍛えましょう。……今からある道具を二人に使います。いいですか？」

「……その道具はどういうものか聞かせてくれるかしら。……危険なものじゃないわよね？」

「まあ単純に、使えば少しづつ体力だとか精神力だとかを消費してい

くもので……ちよつとした負荷を掛ける道具ですね。命の危険になるまでには至りません。ちゃんと自分で外せますし」

言い切つて二人の様子を見る。

まあ、すぐに返事をするにはちよつと無理のある話だ。

それも提案しているのが、毎度の如く色々やらかしている俺だ。

また何かおかしな事をやらかすんじゃないか、と思うのが普通である。

……此処まで自分に信用がないっていうのもちよつと悲しい話だけれど。

黙り込んだ二人に確認のため、聞く。

「どうでしょう？」

「……………いいわ。朱乃もそれでいいわよね？」

「ええ、私も陸人さんを信じますわ」

俺は返事を聞き、取り出していた道具を二人の手首に付ける。

ブレスレットだ。余り重くも無い。

「なんだか力が抜けていく感じね……………」

「これはこれは……………」

……………ただ、倦怠感は着々と溜まっていく。

「えつと、今日から数日間付けててください。段々と体を動かすのが億劫になつてくはずです。……………ただ、寝る前は必ず外して寝てください。翌日死にたくなるくらいの疲れがありますから」

「それは……………気を付けるわね」

「数日間続けて、次のステップに進みますのでそれまで普通に過ごしてくださいね……………出来ればですけど」

本当に、一日目はまだ良い。

二日目からがもう死ぬつてレベルで疲れる。

それこそ身体が動けないくらいに。

「……………でも、そんなに辛いのですか？」

「辛いなんてもんじゃ無いです。ゴールの無いマラソンを延々と続けるつて言つたらどうですか？」

「……………なんか私、自信無くなつてきた。でもコレも勝つためよね？」

「ええ、勝つためです。じゃ、俺はイツセーを見ますので、アーシアさんと天野の魔力の指導をして上げてください」

「え……魔力が使えるの、あの子？」

「そう設定しましたから。……才能の点ではオカ研の中でも結構上なんじゃないですかね？」

いや、うん。

今の『天野』を形作る時にどの程度自分が出るか、知りたかったつてのもあるけどあれほどまで弄れるとは……早速『ずらす程度』から外れてる。

……まあ『ずらす程度の能力』は『本当の能力』の一部分だけらしいけど。

最近自分が怖いです。

ハア、と眉間を押さえる部長を置いて、タイヤにアーシアと天野を乗せて引っ張って走るイツセーの方に向かった。

イツセーを引き連れてやってきたのは、皆のいる所から遙か遠くの何処か。

アーシアと天野が着いてこようとしたが部長たちに任せた。

彼女等は部長たちの元で魔力の扱いについて学んでもらうつもりだ。

——天野は今まで使って来たのが光の力なためコツを掴むのはイツセーより早いと思うが。

早速俺はイツセーに問う。

『禁手』ですか。確か前にアーシアを助けに行った時……」

「そう、バランスブレイク。俺が鎧になってたあれだな。あんな感じにイツセーもなるから。つーか成らせる」

『……ホントにあれには驚いた……アレがありえた可能性か。……」

覇 も超えるような力強さを感じたぞ』

「ドライグ、一体何言ってるんだ？」

「イツセーはまだ知らなくてもいいこと。……ちなみに『覇』じゃないからな、アレ」



倍化を6回。

手には計64倍のイツセーの持つ十倍の魔力。

『——相棒よ……逃げろ』

「へ？」

イツセーの足元に一発。

魔力のレーザーを放った。

「——一回死んでみようか」

空いた穴から立ち昇る煙——そして地面が爆ぜた。

揉みくちやになりながら吹き飛ばされるイツセー。

遠く先の地面に変な音をたてて落ちる。

「い、いきなりなにするんすか！」

『相棒。禁手と言うのはだな、本来持ち主がある領域に達し、劇的な変化が起きないとなれないのだ。しかしお前はその領域にも達して無い——つまり奴はお前をその領域まで鍛えるつもりで、尚且つ殺す気でくるぞ。——恐らく、一度死んだ程度生き返らせるのだらうさ……』

「なんだよソレ！ 聞いて無いですよ先輩っ！」

あのドライグが説明してくれた通り。

「本気で殺しに掛かるからな。俺からの攻撃は当たれば即死だ。制限時間はお前の体感時間で12時間。生き返らせるのは面倒だから……死んでくれるなよっ？」

「うわっ……！」

もう一発。

足元に先ほどと同じ一撃。

「……もしお前が本当に部長を救いたいのなら——生き残れ、兵藤一誠ッ！ お前はきつと強くなる！ 心で言えば俺よりも……。死ぬ気で逃げろよッ！ でないと死ぬぞッッ!!」

「ぐッ……ああああああっ！」

そしてイツセーは駆け出した。

俺に見つからないようするため、木々の中に。

俺はそんなイツセーに見付けるため『白龍皇の光翼』を出し空へと



舞った。

次はお前が誰かを救えるよう……鍛えてやる。

原作ブレイクでもいい。

……だけど多少なりともお前が好きな人の事を守れるように。

——誰よりも、俺よりも”強い”リアス・グレモリーの兵士になる  
ために——。

## 走らせる日

今代の赤龍帝——兵藤一誠は森の中に隠れつつ逃げていた。

現在は木の幹に背中を預け、息を何時襲われてもおかしくない状況下で肺に溜まった二酸化炭素を深く吐いている。

まだ一応走れる。走れないは許されない。

何故なら走らなければ死ぬのだから。

だけど今は少し休憩をして……と、だがもう動かなければならなかった。

——さもないと……と、思った所で背中の木が爆ぜた。

「ホントに容赦ねーな先輩！ チクシヨウ！」

「あたりまえだ。お前はまず体を鍛えないことには禁手に至る段階まで行く事すら出来ないしな」

「だー——もうッ！」

その場から駆け出す。

後ろから赤く迸る魔力光が感じられるようになって、一誠は一応避けられるようにはなった。

——だがその感覚が短い。

その上、一発一発が必死の一撃なのだ。このままでは何時か当たるだろう。

……当たった時の惨状は振り返れば分かる——後方一帯が更地になっっているのだ。

ちなみに此処は山。木々は吹き飛び、土は捲れ、クレーターをいくつも作っている。

そんな状態の後方へ戻ろうとするのは愚行というものだ。

一誠にはもう、後戻りの選択肢は無い。

既に山を一つ二つは越えている自信はある。

後何時間でこの逃走が終わるのか。

後何時間この生と死の狭間を疾走しなければならぬのか。

——……もう一誠は考える事は出来なくなっていた。

「イツセー！ 今日はお終いだ！」

不意に告げられたそんな言葉。

「……!? ホントですか!」

イツセーは混濁とした意識の中で振り返る。

——目の前に迫ってきたのは赤い閃光だった。

……が——当たるものか——と一誠は身を翻し、かわす。

「……避けれるようになったか」

「なんでっ——!」

そして見るのは地面に降り立つ赤い鎧。

緑色の宝玉がキラリと光り、よく見ればまだ夜にもなっていないかった。

「……スマン一誠。まだ12時間は来ていないんだ。……あと九時間ある」

「——……うそでしょ?」

「マジと書いてガチ。……ただまあ今からちよつと勝負をしようか。

一回でも俺に触れたら三時間減らす……やる?」

一誠にとつては良い提案であった。

……しかし——。

「……やめておきます。きつと触れる事すら出来ないんでしょう?」

「正解。それに一回当てたくらいで三時間も修行をしないなんて……自分の為にならないからな」

「……ははは。もう、なんだか意地でもやってやろう、って思い始めました」

「まあ、それでこそだ、お前は。……それに……」

奴良陸人。

彼は鎧の面を収納して一誠の前に立つ。

「小猫ちゃんも今努力している。自分と向き合って。自分が誰かの為に力を振るえるかどうか……考えてる」

「……小猫ちゃんが」

「ま、お前も頑張れよ。——さて、続きを行くぞ。40秒待ってやるから……今度は隠密行動を意識して避けろよ?」

「——はいッ!」

……40秒経って再び一誠の逃走劇は始まった。

実は周囲の時間の流れが遅く、イツセーの認識がずらされているだけで。

——イツセーは既に12時間近く逃げていた。

木場は思っていた。——何故あの先輩はこんなものを僕に見せるのだろうか——と。

しかしその考えはソレをみて払拭される。

世界観については、まだ彼は理解の域に入っていないので省かなければならないが……今見た映画の主人公とも言えて主人公でないそのキャラクターは、ネットで調べた前知識によると『聖杯』と言う願望機をめぐる『戦争』ともいえる争いに巻き込まれた過去が有り、その以前に起こった『第四次聖杯戦争』による災害を生き残った一人。先ほど木場が見た映画では描かれていなかったが、その彼が呼び出した『英霊』。

彼は、木場の憎む形状も作られた方法も違うが、同じ名称の忌まわしい『聖剣』を持つ『英霊』に憧れて限りなく近いその『聖剣』を作り上げたのだ。

少しだけ共感もでき……同時に数多の者を魅了するその『聖剣』が憎く思えた。

その彼の考え方、精神は異常と言っている。

……中世、騎士を超えるだろう自己犠牲の精神が彼の幼少からの異常な人格形成をしていた。

原因は作中に出てきた『聖杯』の中にあつた『泥』——この世全ての悪——アンリ・マユというゾロアスター教にでてくる悪神の所為だとされるが……まあ、省こう。

話を戻す。

——赤い外套を身に付けた彼。

主人公にもなるくらいだ。それなりに彼は特異な技能を持っていた。

それは『無限の剣製』アンリミテッドブレイドワークスという固有の能力。

具体的には剣を中心に本物を魔力で創り上げるといふ、彼の世界観に置いて途方も無いデタラメな能力。

しかし、木場はこの能力に近いモノを持っていた。……創造系神器『魔剣創造』だ。

木場の持つこちらは想像し創造する。……オリジナルで魔剣を『創れる／作れる』がその想像を創造に反映させるのには、人間の場合は魔法力だが、彼は悪魔故に魔力を消費する。しかし、神器の使い手自身が成長しなければ創造するのも難しい。

因果逆転、龍殺し……概念の付与となるとどれだけかかる事か。

……だがその主人公の場合、『創造理念』『基本骨子』『構成素材』『製作技術』『憑依経験』『蓄積年月』という工程をもって本物を創りだす、要は『本物の贗物』を造りだすことが出来るのだ。

それは、

『創造の理念を鑑定し、基本となる骨子を想定し、構成された材質を複製し、製作に及ぶ技術を模倣し、成長に至る経験に共感し、蓄積された年月を再現する』

と言う事で、つまり一度「見て（／視て）理解する」事で、自分が使える伝説に記されるような剣が出来てしまうのだ。

……此処まで知って木場は分かった。

——何故、僕にこの作品を見せたのか。

——何故、このキャラクターについて調べろといったのか。

——何故、剣の創造系神器を持つ者にとって指南書と言ったのか。

自分はあるのセイギノミカタと同じ戦闘スタイルであり。セイギノミカタとは違い、自分には悪魔の膨大な『魔力』があり、『魔剣創造』<sup>ソード・パース</sup>という『無限の剣製』<sup>アンリミテッドブレイドワークス</sup>よりも、「魔剣」だけであるが応用の効くモノを持っている、ということ。

つまり、と木場は合点がいく。

『先輩が言いたかったのは、創ろうと思えば本物を越える魔剣を作れるんだぞ、と言う事か』

……と。

また、「本物の魔剣を超えるための方法」も創作物を通して教えて貰

えたと理解を得た。

そして、”ならば”と一人部屋の中。

木場は自らの魔力で、ある「魔術」を再現する事からはじめた。

……木場祐斗。

彼は残念ながら少し拡大解釈をしたようだった。

——当の教えた本人が予想だにしてなかった成長を木場は始めていた。

ちなみに。

木場がこの『型月』という世界観に少しハマったのはどうでもいい余談である。

## 出会う、その日

私は一人、部屋の中で想起していた。

仙術を得て暴走した姉。殺された主人。……そしてあの冷たい視線と殺意。

その全てが仙術によって引き起こされた忌まわしい過去だ。

だけどその仙術にきつと罪は無いのだ。

罪があるとするれば使う者たちに。

そして仙術という力を使う上で、自分の持つ気ではない世界の『悪意』とも言える『瘴気』が一番の原因だと。

そして、あの先輩が言うように瘴気を『使う』のではなくて『従える』のであれば……力に溺れる事は無いんじゃないかと。

だけど、とも思う。

仙術は自分から大切なヒトを奪っていった。姉を奪われ自分を傷つけていった。

きつとどつかで仙術は姉を今も魅了し、その力を振るっているのだろう、と。

「姉さま……私は——」

——大好きで大嫌いな姉。

私を置いて行った優しかった『お姉ちゃん』。

私の声に振り向きもせず行ってしまった『姉さま』。

……あの悪魔を殺したのには何か理由があったんだ、と思いたかった。

だけど。

……あのヒトに訊いたわけじゃない。

——でも私は『はぐれ悪魔』となんら変わり無い『力に溺れたから』というとても身勝手な理由」だと聞いた。

「私は……私は——一体どうしたら」

ベットの上で蹲り、誰にも聞かせるわけでもなく呟く。

あの先輩は私に仙術を使えと言う——でもその決心は付かなかつ

た。

……やっぱり姉のように暴れてしまうのでは、と頭をよぎる。

——にやあ、と何処からか一鳴き、猫の鳴き声がした。

部屋の扉の外からだ。

少し考えて——先輩の連れて来ていた猫だと、気づいた。

姉と同じ名前に黒い毛並み。

色々と想起させる、姉にとってもよく似た黒猫。

泣き声が聞こえていたのだろうか……その猫が扉の前に来ていたようだった。

——なあお、とカリカリと扉を引っかく音、再び鳴き声が聞こえた。このまま無視をするわけにもいかない。

扉を開けて、抱き上げて部屋の中に入れる。

「……どうしたの？」

なあお。

猫の顔を正面から見つめて聞く。

泣いてる声があったから、と猫の鳴き声は言う。

珍しい。基本気分屋の猫はあまり他猫の事を気に掛けたりしない。

その猫が気にするくらい……私は情けない声をだしていたのか、と少し恥ずかしく思った。

「心配いらないから。……大丈夫だよ」

にやあ？

ベッドに座り、背を撫でて私は言う。

それに、本当に？ と猫が鳴く。

……本当の事を言えば辛かった。

仙術の事を考えるとつい姉の事を考えてしまう。

「……っ……ねえ、さま……」

にやああお。

情けないことだ。涙が零れてしまう。

猫に心配されるようじゃだめだ、と涙を堪えようとするけれど止まらない。

「……とまっ、て……ないちゃ、だめだから」



この猫に心配させてしまう。  
私はただの飼い猫に心配されるような弱い子じゃない。  
……そんな自分の小さな意地もポロポロと零れていく。

——……ごめんなさい白音！  
不意に。

なつかしくて温かい……優しくかったお姉ちゃんの声が聞こえた。  
……気のせいだ。

だって此処には雌の黒猫と私だけ。

いくら姿が似ていても。

いくら名前が同じでも。

自分の鼻も、気配も違うと訴えてきている。

——……だけど。

「——っ！……ごめんね白音え……っ！ 私、わたし……！」

「……ねえ、さ……ま？」

私を抱きしめるのは猫じゃない——ヒトの形をした誰か。

そこにいるのが、仙術に溺れて暴走した『姉さま』じゃなくて。

大嫌いで大好きな、優しい私の『お姉ちゃん』だと気づいて。

「——くろかおねえちゃん……っ！」

「うう……しろねえ——っ！」

幻想でも幻影でもいい。

……でも今だけは優しいお姉ちゃんに会えた事が嬉しかった。

二人で泣いて、落ち着いてから。

「……黒歌姉さま」

「えっと……」

……どうしよう。

白音が心配になって部屋に来てみたのはいいけど、泣いてる白音を見て思わず人型にもどって抱きついてしまった。

……や、やばいにやー。な、何も考えてなかった……。

ううっ……助けてえーリクトー……。

「……やっぱり姉さまは仙術に溺れてあの主人を殺したの？ ……私の事を置いて行ったのは邪魔になったから……？」

「うあー！ ち、違うのよ白音！ えっと……」

ひとしきり泣いて、目の周りが赤い白音がまた涙を湛える。

べ、弁解し無いと……白音と仲直り出来ない。

リクトじやあるまいし嘘なんて直ぐに思いつけない。

——ええい！ 覚悟決めろ私！

「……実はあの男は私が仙術つて力を手に入れてから眷属に力を求めて、……まだ仙術なんて使ったら暴走しちゃう白音にも覚えさせようとして私はやめるように言ったのだけどやっぱり聞かなくて……」

白音の視線は戸惑いに揺れていた。

ああ、——落ち着こう。慌ていたら伝わるものも伝わらない。

一つ深呼吸して、私は続ける。

「……私は白音を仙術から遠ざけたかった。白音にはまだ早い”つて私が会得したから分かったの。だから奴を殺して、私は白音を置いて逃げた。……私なんかと一緒に行ったら白音は絶対不幸になると思っただから……」

「……それは本当なの？」

真偽を聞かれて私は頷く。

私は追われる身になっても良かった。

白音に嫌われても。白音が幸せならそれで良かった。

……あの時白音を連れて行って——私のように追われることは。幸せを逃すような事は——。

「——っお姉ちゃんのバカッ！ なんで……私は——私はッ！」

「……ごめんなさい。白音が辛い思いをしたのはずっと見てて分かった。私のせいで処分……殺されそうになった事も知った。……ごめん。私が馬鹿だった——本当に御免なさい」

「……ッ！ ……頭上げてよ……！」

額を床に付けて謝る。

許してくれなくても、許してくれても……私は白音に謝らなくちゃ

いけない。

リクトに会って、白音の様子を見れるようになって分かった。……  
白音は私以上に辛かったんだって。  
だから私は謝る。

……嫌われても良かったけど——やっぱりそれは嫌だったから。

「ごめんなさい、白音。許してくれとは言わない。でも私、やっぱり

……白音に、嫌われるのはっ……嫌で……っ！」

「……」

許されないことを私はしてしまった。

白音は……許してくれるだろうか。

無理なら私はもう……。

「——嫌いです姉さま。私を置いて行った姉さまなんて大嫌いです」

……やっぱり。

「そっだよね嫌い——」

「……でも大好きです。私の事を考えてくれる不器用なお姉ちゃんが  
私は好きです。……好きの反対は嫌いじゃ無いんですよ？」

「……っ！ しろねえ……！」

「——大好きで大嫌い。……頭上げて、お姉ちゃん」

「——っっ!!」

ああ、白音。

本当に——。

「大きくなったね……」

「——はい！」

ヒトとして。

悪魔として。

身体はまだまだけど……。

——もう私よりアナタは大人だよ——白音……。

---

今まで見ていた無表情な小猫悪魔はいない。

「所でお姉ちゃん。……奴良先輩とどういう関係なの？」

「べ、別にリクトとはまだ何でもないよ？」

「——まだ？」

「うっ……あう……」

「はははっ……変なお姉ちゃん」

「……白音がいじめる——」

白猫 白音は今、笑っていた。

## 聞かない日

イツセーの感覚で12時間が経った。

俺は本来の時間軸から『ずらして』いた『周囲一帯の空間』と『イツセーの時間の感覚』『成長率』『疲労に対する認識』を元に戻していく。するとあら不思議。俺の手によって出来ていた惨状は元通りに。

イツセーと俺は、始めイツセーを連れて来ていた所に戻っていた。構えていた魔力球を消してイツセーの所に行く。

「今度こそ終了だイツセー」

「……」

返事が無いただの屍のようだ。

「おい。部長が生乳触らせてくれるってよ」

「ツ！ 何ですとっ!？」

「おはよーさん」

「先輩！ 部長の生乳は！ おっぱいは!？」

バカめ。

「あるわけねーだろんなもん。それに此処何処だか分かってる?」

「あ……—先輩ツ！ よくも俺を騙したな！ 部長のおっぱいが触れるなんて嘘をツ！」

「イツセーは……馬鹿だなあ」

「すみません、俺が悪かったです。だからその哀れみの視線やめて下さいー」

「はいはい」

「ホーン。」

「……さて、イツセー。体はどうだ?」

「だい——っ——!」

俺の時間感覚で言えばトータル時間48時間。

12時間は逃げることを最優先として。

それから12時間は隠れ忍ぶことを重点的に鍛えた。

残り半分からは肉弾戦を交えつつの特訓。

最後の12時間はイツセーからの一方的に行われる攻撃訓練。

始終動き回り、悪魔と言えどボロボロになるが、そこはそれ  
『トワイライト・マザー・ヒーリング聖母の抱擁』で時折治して、体力も回復させていた。

——その間、筋肉痛の『痛み』を『ずらして』誤魔化していたから  
——。

「まあそうなるよなあ。——ほれ、筋肉痛が来るぞ。気を付けろよ」

「——つつうああああ！ なんすか、コレええええつつ!!」

想像を絶する程の痛みに襲われる。

——……外道の所業だと罵られてもいい。それ相応の事をしてい  
るのだから。

……ただ、甘い修行をしてイツセーが満足するのか、と言われたら  
違った。

イツセーの目は常に前を向いていた。

後輩いびりよりも酷な事をしてきたのだ。

何故そんなに精神力が持つのか、俺には分からない。

……イツセーの考え方については『ずらしていい』のだ。

これが主人公が主人公たる所以なのかどうかは分からないが。

「……ほれ、ちよつと緩和してやるから」

「うう……ありがとうございませ……」

『聖母の抱擁』で少しだけ痛みを和らげてやる。

涙で顔がぐちゃぐちゃだ。

おまけに顔も痛みで歪んでいる。

「……どうだ？」

「うう……。ちよつと楽になりました……いてて」

それなら良かった。

「じゃ、帰るぞ。……ちなみに始めてから一時間も経ってないからな」

「まじすか……すみません。ちよつと歩けそうに無いっす……」

「あー大丈夫大丈夫。……距離もそんなに離れてないから……ぎつと

100mくらい？」

「え……」

「ほれ、肩貸してやるから。……今日は俺が上手い料理食わしてやる

「からさ元気出せ」

「はははっ……先輩の飯かあ……美味しいんですよね？」

「不味いわけないだろ？——戻るぞ、イツセー」

「……はい！」

イツセーに肩を貸して、俺は馬鹿でかいグレモリー家の別荘に戻った。

「おーい。アーシアさーん、あまのー」

「……あ、イツセーさん！」

「イツセー！ こんなボロボロで……何があつたの!？」

「へへへ……ちよつと鍛えて貰つてた。……心配すんなって二人とも！……つてえ……骨に響く」

「頑張つてたしな……——ちよつとご褒美やつてやれ」

『——っ』

精神的疲労の回復のため照れる天野とアーシアの二人にイツセーを引渡した。

アーシアと天野で引つ張りだこだろう。

それからリアス部長と朱乃さんは姿を眩ましていたので、アーシアと天野の二人に訊けばどうやら休みに行ったらしい。

……ぶつ倒れて、あのブレスレット付けたまま寝てない事を祈る。そして。

「黒歌？ どうしたの、そんな上機嫌で」

部屋に戻ると黒歌がいた。

ベッドの上でゴロゴロと行ったりきたり。

それはもう、見るからに上機嫌で……。

「うにゃあ？——へへへ……何でも無いにゃんっ！」

憑き物が落ちたかのような、そんな笑顔。

……絶対何かあつたに違いない。

とりあえず彼女、小猫ちゃんの様子を聞く。

「白音ちゃんの様子はどうだった？」

「うん。『仙術を習うんだ』……って張り切ってた」

「——っ。へー、そっかあ……」

なるほど把握した。

つまり――。

「それは良かった。――……何時かき、彼女に何があつたか聞かせてくれる?」

「――」

ピシリと黒歌は固まって、ベッドの縁ふちに腰掛ける俺を見てきた。

「……今聞かないの?」

「うん。だって今聞いても黒歌にはまだ……俺が解決しないといけな  
い問題が残ってるからさ。……俺にまだあの『答え』を聞く権利は無  
いよ」

「――なんで! 私、わたしは……リクトのこと……」

続く言葉は聞こえない。

今まで感情を仙術を使ってまで抑えていた黒歌は最後まで言わず、  
押し黙った。

でも何時かした――「付きあつて下さい」と俺が告白したその『答  
え』は聞かなくてもなんとなく……わかる。

だって、でなきや3年も同じ屋根の下で一緒に居ない。

料理をするから教えて欲しい、だなんて言つてこない。

態々自分の為に弁当なんて作つてくれるわけがない。

……きつと俺が望む未来はすぐ其処にある。聞けばそれは叶えら  
れる。

だけど。

「……もうちよつとだけ我慢したいんだ。俺、ずっと黒歌の事好き  
だったから。ちゃんと周りを誤魔化さなくてもいられるように、俺も  
頑張るから」

「……この意地っ張り」

ごめん。

「――でも……」つだけ言わせて」

黒歌は持っていた枕を離して。

「――ありがとう。私はリクトの事、大好きだから」

「……うん……」



俺に抱きつき耳元で囁いてきた。

……頑張ろうと思う。

自分の為に黒歌の為に。

——猫又の姉妹が笑って、何も心配せず暮らせるように。

「……そ、外行ってくる……っ」

「……」

恥ずかしくなった黒猫の黒歌さんは部屋から出て行く。

やっぱり黒歌はとても可愛らしかった。

## 憂いを解く日

恥ずかしくなったらしい黒猫になった黒歌が、何処かの白猫さんの部屋行って。

俺は厨房で人数分の飯を作っていた。

そして一時間で完成。

「飯出来たぞー」

「っしやー!」

「……お義兄さんの料理楽しみです」

「にやつ!」

キャリーに料理を乗せて運ぶと腹を鳴らす赤い龍と白い猫がいる。

……といかなんでお兄さん呼び? と思っ見てみると、無表情だった小猫ちゃんはニヤリと姉の姿を見て笑っていた。

「……小猫ちゃん、なんで奴良先輩の事を兄だなんて」

「イツセー先輩には関係無い事です……」

じーつと小猫ちゃんは見つめてくるけど——あー! 俺はしーらない!

赤面しないよう努めて、イツセーの隣に座る二人に声を掛ける。

「えー、アーシアさんと天野は部長達起こしてきてくれないか。飯が冷えるから」

「はい……」

「わかったわ。……うう……お腹減った」

二人も相当訓練したらしくへばっていた。

それでも言われた通り部長らの部屋に行ってくれたので助かる。

イツセーが周りを見て不思議そうに言う。

「そーいや木場は?」

「……私は見てないですよ。……部屋に籠ったつきりじゃないですか」

「え?」

……なんか嫌な予感がするのは俺だけか。

多分二人には見に行つて貰う事は出来ない。

「……二人ともちよつと待っててくれ。——俺が見てくる」  
「……何かあったんですか」

「何でもないといいけどな……じゃ、俺は行くから」

「先輩っ！」「……お義兄さん」

今生の別れのようにして俺は木場の部屋に向かった。  
というかノリがいいな、二人とも。

木場の部屋の前に来て二回ノック。

「木場さーん。ぐ飯出来ましたよー」

『……』

部屋から返事は無い。

不安になりながらももう一回。しかし返事は無い。

「……開けるぞー」

中を覗くと、木場はベッドの上で瞑想していた。

「おーい。木場——つと……」

「……先輩？」

「おう。飯出来たから呼びにきたんだけど……なんか掴めたのか？」

「はい、おかげさまで。……今行きます」

「で、何掴んだの？」

「それは——」

あの映画とネットから得た事を教えてくれる。

「……マジか。いや、うん……凄いな、お前」

「そんなことないですよ。結局個人の力では何にもならない事ですか  
ら」

「そりやそうだけど……」

彼が得たものは魔力による対象の『鑑定理解』。

それは『赤い弓兵』と同じ『トレース』が出来るようになったと言  
うこと。

——『創造の理念を鑑定し、基本となる骨子を想定し、構成された  
材質を複製し、製作に及ぶ技術を模倣し、成長に至る経験に共感し、蓄  
積された年月を再現する』——

つまり魔剣限定にだがアーチャーと同じ事が、出来るようになったという事だった。

「……ただそれだけなのかどうか……まだ分からない事は多い。」

「……アニメ映画見せただけなのにこんな事になるとは思ってたなかった。」

「よくて『魔剣創造』の参考になればいいかな、と思ってたんだけどさ。」

「——木場……恐ろしい子！ と戦慄しつつ、少し精神状態が不安定な木場君を連れて食堂に入る。」

「……待ちくたびれました」

「木場、早く席に座れ！」

「身体が重いですわ……」

「……なんなの、アレ。ホントに辛い……」

木場が空いている席に座り、俺も小猫ちゃんの隣に座る。

全員が揃い、唱和して夕食を取り始めた。

「うめえ、うめえよお……」

「イツセー、口の端にご飯粒ついてるわよ……でもホントに美味しいわあ……」

「むー！ 夕麻さんずるいです！」

号泣しながら飯を食べるイツセーの横で甲斐甲斐しく世話をする天野と、それに嫉妬するアーシア。

「……朱乃。私ね、料理は上手だと思ってたのよ……」

「私ですわ……」

「……ああ、あの子たちにも食べさせたかった……」

「確然とした料理の腕の差に嘆くお姉さま二人に、涙を流しながらスープを飲む木場。」

「……」

「……」

「黙々と食べる白音ちゃんと、黒歌用に用意した料理を黙々と妹と同じように食べる姉猫。」

「カオスだなあ、と思いつつ俺は箸を動かした。」

風呂である。

イツセー君のスケベ魂が発動し、女性陣と一緒に入る入らないの問答があったがそんなことは忘却して。

黒歌を小猫ちゃんに任せて、現在男湯に木場とイツセー、俺は浸かっていた。

食事以後木場は暗く、どうにも風呂場の空気が悪かった。

「お前、エクスカリバーが苦手なのか？」

タオルを頭の上に乗つけて湯の中に浮きながら俺は木場に訊いた。やっぱり雰囲気悪いところちも暗くなってしまうから、改善しようと思う。

自分に来るのか不安だけど。

イツセーがアホ面をさらす。

「へ？ なんすか、それ」

「イツセーは関係無い。女湯の透視でも頑張るとけ」

「……ひでえ」

しくしくと女湯との仕切りに近づいていくイツセーは放つといて。

「で、どうなんだ？」

「……苦手どころじゃないです。あの剣のせいで僕と彼等は……」

「あー……すまん。無粋なこと聞いたかもしれない……けど今は部長の危機だからさ、心の隅に追いやれないか？ その復讐したいって感情」

「――！ ……凄いですね、そんな事分かるんですか。……僕、表情出てましたか」

木場の問いに頷いて返事する。

まさしく彼の言う通り表情に出てたし纏わりつく暗い雰囲気でもなかった。

それ以前に『原作』での木場の行動を知ってたからなんだけど。

……壁際に行ったイツセーも静かに聞き耳立ててるのがわかる。

奴なりに木場が心配なんだろう。エロの権化の癖に、と思うが……それよりもだ。

どうしたものか。共通の話題で話を振ろうか。

「あの映画……見てどうだった？」

「何を急に……いえ。そうですね……面白かったですよ。ちよつとハマりました」

「……そうか」

木場がハマつちやうのは予想してなかったけど……。

「なら、ちよつと思つたんじゃないか？ アーチャーが格好良いって」

「……はい。でもそれが何か？」

「……正義の味方を目指して生きてきた。でも正義の味方ってのは矛盾してて……それでも、自分の信念を通すため戦つて……最後は仲間裏切られて処刑されて死んだ。でもさ、その事には抵抗しなかった。……皆が決めたことだからって最後まで誰かの事を信じてさ」

ぶかぶかと浮かぶのを止めて俺は胡坐をかいて、体を木場に向ける。

「ただ後悔はしてた。抑止力の一つと契約を交わして正義の味方になれたと思つたら——それは少数を切り捨て、大多数を助ける——彼の望む正義の味方じゃなかったからだ。だから自分を消そうと聖杯戦争の中で過去の自分を——衛宮士郎を殺そうとした」

「……」

「木場。お前の復讐は果たしたらどうなる……？ もし、お前がその聖剣に復讐をしたら……過去が何か変わるのか？ ……あの話には色々な結末がある。衛宮士郎が英霊エミヤにならなかった結末の一つは聖杯戦争の時、過去の自分が変わってくれる事を信じて後悔をやめたからだ。それであの弓兵の願いは叶った」

「……っ……でも僕は、あの子達の代わりにあの聖剣に……！」

木場は声を荒げる。

でもそれは無駄な事だとわかったようで、押し黙った。

「今更、なんとなく分かったよ。お前は人生を聖剣に振り回されたのか。……でもそれ、今も振り回されても良いのか？ それで大切なものが分からなくなってるんじゃないか？」

「——」

「お前に何があったのか……本当の所は俺には分からないさ。でも今は、あのバカと元シスターと元墮天使と小猫ちゃんや部長たちと。……バカやって、どうしようもなく長い悪魔の一生を歩けば良いんじゃないか？ ……復讐は止めろとは言わない。時に生きる活力にもなるから。……だけど今はゆつくりすればいいじゃないか」

「……そうでしょうか」

「そうに決まってる。これからの人生、いや、悪魔生は長いんだから。……だから今は笑えば良いと思う。お前の言う『あの子達』の分もニコニコと。イツセーの嫌うイケメンスマイル振り撒けばいいじゃん」  
ホントに似合わない事を言ってる自覚が有る。

きつと黒歌の事もあってすこし舞い上がってるのかもしれない。

まったく。……こういう自分は嫌になる。

でも言いたかった。

「……良いんですか、僕は。……笑っても、楽しい時間を過ごしても——」

「復讐してくれ、ってその子達は言った訳じゃないんだろ？ なら笑って、その子たちを喜ばせてやれよ。復讐なんて回りくどい事せず  
にさ、俺は元気だぞ、って」

「そうですね——先輩の言う通り彼等の為に笑ってみます……」

木場が笑い、暗い雰囲気は消えた。

「手始めにグレモリー眷属の仲間同士交友を深めますね——イツセー君！ 背中流して上げるよ！」

「やめろおー！ 気持ちわりーんだよお！ 背中くらい自分で——つてえー」

「流して貰え、イツセー。お前、筋肉痛でやばいんだから」

話を聞いていてなんか泣いてたらしいイツセー。

割と奴には木場の提案は嬉しいものだったりする。

ただ、そんな木場君がホモではないかとちよつと疑う自分が嫌だった。

違うよね？

——違うと言ってくれよ。

『『違うよ』』

お前らじゃないし、ドライブにアルビオン。

——…少しして「ぬわあああああ！」というイツセーの音が風呂場に響いた。



## 仙術を教える日

翌日。……というよりも眠り始めてから八時間後。

起きたら自分の胸元の上に、白い肌着を肌蹴させて眠る黒歌さんの顔があった。

勿論猫じゃない。猫又の姿でだ。猫耳猫尻尾である。……単なる猫の姿だったらどれだけよかった事か。

人型であるのが残念だった。……この胸の感触は残念というわけじゃ無いけど。

むしろグツジョブ、ナイスおっぱい。

彼女限定でいえば俺はイツセーの事を言えないかもしれない。

「……すう……」

「っうー！」

——というか理性が限界。もう無理かも。抑えてる情欲がONに切り替わりそう。昨日強がって「黒歌とお付き合いはもうちよつと後で」なんて言わなきゃよかった。過去の自分を殴りに行きたい。

とにかくホントに限界なので黒歌の肩を揺する。

「うん……うん？」

「おはよう黒歌さん」

「ふわあ……おはよう？」

見上げてきて欠伸するのが大変可愛らしい。

黒歌、いとううたし(たいへん可愛らしい)。

「おはよう。ここ、俺のベットなんです……何故に？」

「え……私のベッドでもあるでしょ？ この部屋一つしか無いんだから」

「……あ」

先に寝たから分からなかったけども——そうだったあ！

ベッド一つしか無いじゃん！ あれれー……もしかして合宿中ずっとですか？ 堪えられる自信ないです！

「と、とりあえず上から退いてくれませんか。——やばいんで」

「何が？」

「いろいろ！」

「私にはわかんないなあ……ナニがやばいの？」

「確信犯めえ……！ とりあえず退いてっ！」

ホントに！ 寝てるけど立っっちゃうから！

「やだ。ちゃんと saying してくれないと退かないにゃん♪」

言っても聞かない我俣猫。

もう諦めて二度寝する事にする。起きれないし。

と、思ったら、我俣な黒猫さんはすんすんと何かのにおいを嗅ぐ。

……ちよつとまっつてよ。

「……な、何してらっしやるの？」

「うにゃあ、リクトって良い匂いするにゃー……」

「うあ……ちよつと……やばいっ！」

わたくし鼻血が出そうですよ黒歌さま、と。

すりすりとは今度はニオイを付けるように頭を胸元にこすり付けてくる。

一々可愛いのがいけない。身体が反応しそうになる。

「にゃははは——」

「……うん？」

自分の悶える表情を見て笑ってた黒歌は少し真剣な表情になった。

「うん。……私ねリクト。ちよつとシヨックだったんだよ？ ……も

う自分の気持ちを仙術使ってまで誤魔化して、アナタに接さなくても良くなったのに……酷いこと言うから」

「……ごめん」

「いいよ。……リクトは無理矢理えつちな事してこない……だから体裁はちゃんとしたいでしょ？」

良く分かってる。黒歌さんてばホントに良い女だ。

……うん。女々しい事に結構純情だから。ごめんよ黒歌さん。俺ってば付き合ってもないヒトとそんな事出来ねーんです。

「……ところで黒歌さんから見て俺ってへタレに見える？」

「うん、見えない事も無いけど……少なくとも私からはそうは見えないにゃん」

「はあ……愛想を尽かされる前に早くしないとなあ……」  
「にやはは……リクトのばーか。白音と何があったか聞けばすぐにも付き合っただけだね」

さらりと黒歌が言った答えを聞くけど、でも駄目だ。男に二言は無  
いのだ。

というか。

「……白音ちゃんがお義兄にいさんって言うてきてる時点で分かってるも  
んだけどね……」

「どうするにや？ 妹は了承してくれたよ？」

「やめて！ 誘惑しないで！」

本当にこういう黒歌の悪魔の囁きは色々危ない。

この悪魔め！ 猫の小悪魔め！ ちくしよう、可愛いなあ……！

「……何やってんですか二人とも。早く起きてください」

「——ツ?!」

ばたん、と扉が開いて白音ちゃんが顔を出した。

いきなりで驚かされる。

「いちやいちやイチヤイチヤ……このバカツプルめ」

「ごめんさい！」

……他の誰かだったらやばかった、と後になって冷や汗が出た。

イングリッシュ風な朝食(?)をとってから一時間後。

顔も洗いさっぱりして、小猫ちゃんに仙術の指導する事になった。

それは俺だけでなく。

「よろしくおねがいます先輩に——姉さま」

「よろしく」

「よろしくにや……って私の事」おねえちゃん”って「呼びませんよ  
恥ずかしい」……けち」

……実姉であり、俺よりも仙術に長けた黒歌もだ。

此処は別荘から少し離れた森の中。

もしものために、黒歌の存在がバレないように”認識”も忘れずになら  
らしておく。

白音ちゃんとはやっぱり何かあったようで、それなりに仲が良さそうだ。……さて、何があったのやら。

さて、まあそれはともかく。

「じゃ、小猫ちゃん。自分の”気”は分かる？」

「……なんとなくですが一応」

「そっか……じゃあ自分の”気”を目に集中させてみて」

「目に集中……？」

黒歌のじつとりとした視線が辛い。

いや、言いたい事はわかるけどさ。……だってまんま”凝”だし

……でもこれが現実じゃないか。

——ちなみに自身の気と闘気とはまた別物であったりする。

「ちよつと難しかったですけど、はい。なんとか出来ました……気が見えるように」

「そう、それは”凝”って覚えて。字は凝視の凝ね。いずれはその”凝”をしなくても肌で感じて判るようになるのが目標。……ちなみにだけど、基本的に自分の中にある”気”だけをを使う時は”外気”の影響は受けないから、”瘴気”を心配しなくても良いよ」

「……はい。ところで姉さまはなんでそんなに先輩の事睨んで」

「……なんでもないよ、白音」

黒歌さん怖いです。

「いいじゃない。」 唸”って仙術教える上で便利なんだもん。もん。

「次行ってみようか。……”凝”はしたままで、”悪い気”と”良い気”が分かると思うから……”良い気”だけを引き寄せてみて。手で掴んでも良いから」

「……む、難しいです。どうしても”悪い気”がくっついてきて……姉さまは出来るんですか？」

「私は出来るよ。だってこれは気を身体に取り入れる上でちゃんと出来ないといけない事だから。……出来なかつたら狂うハメになる」

真面目な顔をして黒歌は言う。

その通りだ。

仙術の中でも、『外氣と内氣の合成』を行い”氣”を一気に高めて使えるようになるのが、使う上での最大の到達地点で奥義。

その『外氣と内氣の合成』が使えるようになったら、ほぼ無尽蔵に仙術による技が使える。

ただ、そのためには”外氣”は選んで体内に取り込まないといけない。

”瘴氣”が身体に入ったら大なり小なり悪影響が出るからだ。

本当の事を言うと、黒歌は俺と会うまでコレをやらずに”瘴氣”もまとめて合成していて危なかった。

そのために俺と試行錯誤しつつ黒歌に基本的な事を教えて貰いつつ修行したのだけど……流石と言うべきか黒歌のほうが先に成功してしまったのだ。猫？、実に悔り難し。

……ちなみに、その奥義に至るまでの行程として、内氣を扱う仙術を黒歌と決めて『地仙術』とし、逆に外氣を扱う技術を『天仙術』とした。

基本『地仙術』が使えればいいけれど、どうしても『天仙術』の方も同時に使えるようにならないとすぐにばてる。

だから少しづつ難易度の低い内氣を扱う『地仙術』の修行をしたいのだけど、白音ちゃんの才能を信じて『天仙術』の基礎も早めのだ。

「くっ……姉さまに出来て私が出来ないわけがない！」

「……白音がなんか酷い」

……この後二時間程で白音ちゃんは天と地、どちらの基礎をマスターした。

ちなみに習得に掛かったのは黒歌が同じく二時間ほど。

そして俺は……二週間掛かった。

才能ってやっぱりコワイ！

「……応用に入ろう。”内氣”と取り入れた”外氣”を合成してみ  
て」

「はい。……えいー！」

「さすが私の妹にやあ。何処かの誰かさんと違ってもう出来てる  
……ねーリクト」

「……」

ホントに……才能ってこわいね。

俺が一時間掛かったものをこの二匹は……！

「お義兄さん、元気出して」

「ううっ……」

「にやはははー！」

慰めが身にしみた。

黒歌は後で覚えてろよ……と、ちよつと復讐してやろうと思ったのは言うまでもない。

## 試合を始めた日

木場は俺の作った魔剣で、魔力で作った『解析』<sup>トレース</sup>という技の練習。あと『固有結界』とかいう『解析した対象の情報を貯蔵及び神器を通して剣の群を展開できる結界』を頑張って作ろうとしてた。

本当にお前は何を目指しているのかと。

聞けばちよつと Fate / 及び型月にハマったらしいが……。いや、お前の好きにやれば良いと思う……。うん。

楽しそうにやってたのでもう何も言えなかった。

部長と副部長は特訓の第二段階目。

始めにやって貰ったのは魔力の回復速度の向上。

第二段階では、渡したブレスレットに寝る前に一回魔力が尽きるまで注いでもらう事で魔力の総量を微量ながら上げて貰った。

塵も積もれば山となる。

体感時間10日ほどで1.5倍ほど総量が上がった。

総量が上がるといふ事は、一度に使える魔力の量も増えるということ。

ただ、第一段階で回復速度が上がっているので一気注ぎ込まないと無くならないのが難点だ。

実感があるため二人は、今後赤子よりも少ないイツセーにも使わせようか、とか考えてた。

天野とアーシアは魔力の扱いの練習。

アーシアは元来努力家というか真面目なのでしつかりやってた。それに加えてゲームに出ないとはいえ天野はサボらずやってた。

成長の乏しい墮天使でなくなった為に持ち前のドジやうっかりも減ったようでやる気がでるのだろう。

仲良く魔力の練習に励んでた。

そして小猫ちゃん。

彼女は俺と黒歌の指導の下、順調に気を使った術を覚えていった。

肉体的に若く保てる特殊な呼吸法だとか、気を圧縮して足元に向かって放出し空を飛ぶ方法だとか。あと自然から元気を集めて打ち

出す極球だとか。

後は気配を完全に絶つ方法、ちよつとした気の性質変化を教えた妖術については黒歌の方が詳しいので任せたが、あちらもすぐに習得出来るだろう。

正直やりすぎた感はあるけれど良しとした。

イツセー。

奴は、俺からすれば地獄にも思えるあの特訓について来た。

成長率も上方に『ずらして』いたせいか、特訓二回目で既に息切れはしなくなり、四回目からで逃げに徹してた24時間分ですら攻撃を入れ混ぜてき、八回目からは倍化させた魔力の運用でシールドを展開できるようになり、攻撃を正面から受けられるようになった。

十六回目からは48時間手加減した俺の攻撃と打ち合えるくらいには体力もついてきたので、一応訓練は終了。

奴のドライグが、そろそろ禁手になれるかもしれない、と言っていたのでまあ、部長の乳でも触らせとけばいいだろうとか考えながらイツセーに関してはもう良し。

俺については、神器で出来る可能性を模索しつつ試したり、異世界に精神だけで行ってきて料理の勉強してきたり、とまあ色々遊んでいた。

いや、でもちゃんと座学もやったり、木場やイツセー、小猫ちゃんの模擬戦での感想も言ってやったりもしたし。

自然に被害が及ばないようフォローもしたし。

あと毎回起きるときに黒歌さんの誘惑に堪えるという精神的な修行は出来たかもしれない。

だから遊んでたって訳じゃないんだ。

遊んでたかもしれないけど。

……というわけで今日から10日間、レーディングゲームの時のために作戦を練る&休暇となった。

へとへとでそれなりに皆疲れており、来る日に向けて今は休む。

たるまないよう各々が個人で鍛えつつ10日間の休息を有意義に皆過ごしはじめた。



十日後。

レーディングゲーム当日。

「——良い？ 全身全霊蓄えた各々の力、存分に発揮しないさいッ！」  
『はいー！』

《——これより、リアス・グレモリー様とライザー・フェニックス様の試合を開始します》

皆の顔に不安の色は一切ない。

あるとすれば自分に出番はあるのだろうか、なんてちよつとした高慢な思いだけ。

皆が皆、そんな心中で状況は開始された。

序盤戦の動きはこうだ。

木場が体育館を制圧に。

小猫ちゃんが体育館周囲で遊撃。

イツセーは修行で得た耐久力を生かす為、こちら本陣を朱乃さんとペアを組み偵察していた。

具体的には朱乃さんが見つけ、それをイツセーに伝えて対応するといった連携だ。

それでも間に合わない場合は、朱乃さんが張ったトラップで誘導しつつ、雷を落して一気に殲滅するのだそうだ。

部長とアーシアは部屋に残って、中盤戦から動き出すとの事らしい。

そんな俺要らずの配置で俺はというとバトルフィールド全面を対象に、序盤戦・中盤戦・終盤戦一括して遊撃を任されていた。

あの濃密な10日間での部長からの評価は良い意味で酷い。

『貴方は本当にバランスブレイカーだから正直一人でもゲームを任せれる気がする』

——と、呆れたような口調での評価だ。

だけどそれでは「自分達が勝った気にならない」らしく俺は必要に応じて動けとのことらしい。

正直な所、敵陣に向かって魔力砲を今にもぶっ放したいのが本音で

ある。

「ただどそれは折角の修行の成果を皆が發揮出来なくなるので、流石に自重中。」

「なので余りにも暇で暇で。」

「俺は悪魔の翼で空を飛びつつ、皆の様子を見て回ってた。」

「イツセー君、向かって四時の方向から来てます」

「了解です朱乃先輩！——多分二人そっち行くと思います」

「あらあら、うふふ……良かったわ。私にも出番がありそうで……」

「集団で攻めてくる兵士三人は、うち一人をイツセーの所に残し、二人が朱乃さんのしかけたトラップに引っかかり、幻影で出来た旧校舎へ、蜘蛛の巣に誘われるように向かっていく。」

「……なんで動け——グハッ！」

「アナタの気を乱しました。——もう戦えないはずですよ。リタイヤして下さい」

「出会った騎士二人の気を乱して再起不能にする小猫ちゃん。」

「コレが僕が10日間で得たモノだよ！」

「な、剣が!？」

「そう。寸分違えず同じ剣に同じ剣を創造することで強度も上がる！」

「それが日本刀ならば、切れ味は——！」

「——!？」

「変わらない！——だから一度目よりも無茶が出来る。……例え僕が西洋剣を専門としても、日本刀で君達のチェーンソーなんて切り刻んで腕を落すくらい——容易いよ」

《——ライザー・フェニックス様の『兵士』二名リタイヤ》

そして木場。

……ふと見ると幼女二人にやらかしてた。

「瞬殺過ぎて呆然とした相手の戦車と兵士は、レイピアのような先の鋭い剣群で足元から刺されてすぐにまたやられた。」

《ライザー・フェニックス様の『戦車』一名、『兵士』一名リタイヤ》  
フィールド上にアウンスが流れる。

そして木場は体育館を剣の群で埋め尽くし、その場を後にした。  
こちらに気づいて軽く手を振ってくる。

振り返して——俺はその場から一気に離れた。

「撃破——とは行きませんか。……余裕そうですが、私を相手に勝てるのかしら?」

「はいはい。勝てますよ、と。というか随分な挨拶だな、爆弾女王。渾名の爆弾はその胸と尻かい? んなちやちな爆発じゃ俺は倒せないよ?」

「ごいつ……! いいわ——ライザー様を一度去勢した償いをさせて上げる!」

「おお、こわいこわい。じゃ、一発。お手本見せてあげようか」

相手の女王による小規模の爆発が、空を移動してついて来る。

逃げに徹しながらも、自分の手元に小さい魔力球を生み出す。

大きくなったり小さくなったりを繰り返して最初の小さいサイズに収まった。

「なに……?」

「さあて。……足元気をつけなよ?」

「? ——まさか!」

相手方の女王、ユーベルナの足元には彼女から俺まで……距離にして半径20メートル程の魔方陣が展開されていた。

慌てて逃げようとするも、もう遅い。

作った魔力球はフェイク。

俺は指パツチンにてソレを起動させた。

「その通り。——吹っ飛べ!」

爆音。それと共に光と衝撃が魔方陣の中で迸った。

しかしアナウンスは流れない。

なるほど、フェニックスの涙を使ったらしい。

「逃げた様子も無し。やられた気配も無し。使いたくなかったけど——」

作っていた超圧縮した魔力。

フェイクのつもりであったが、仙術で人型の把握を行い右半身に当

たるよう、幾らか威力を削って撃った。

「——はあ、はあ……目を潰され——ッ!？」

パシユンというような音を立てて女王の半身が消える。

それと同時に転送されて消えた。

《——ライザー・フェニックス様の『女王』一名リタイヤ……》

兵士が女王を取るだなんて本来のチェスでは考えられないような事。

《続いてライザー・フェニックス様の『兵士』三名、『騎士』一名リタイヤ》

女王のリタイヤと共にイツセーの所の兵士二人、小猫ちゃんの所の騎士がリタイヤしていったようだった。

現在

ライザー・フェニックス

残り

兵士 2

僧侶 2

騎士 1

戦車 1

女王 0

王 1

リアス・グレモリー

残り

兵士 2

僧侶 1

騎士 1

戦車 1

女王 1

王 1

少しこちらに残る駒のほうが有利。

しかしフェニックス相手となるとやはり何が起こるか判らなかつた。

『リクト！ 貴方ちよつとは自重なさい！』

『そうですわ。私にも活躍の場を与えて下さい』

『お義兄<sup>にい</sup>さんは意地悪ですな』

そんな通信が耳に入る。

何故女王を倒したら怒られなければならないのか。

ちよつと強くなってゲーム感覚になっているのだろうか、とか。

もう少し確実性を取ったらいいんじゃないだろうか、とか

色々と疑問に思う所はある。

その慢心が良いものなのか、それとも悪いものなのか。

序盤戦の今の段階では判らなかつた。

## 追い詰める日

相手女王が倒れた事により試合は中盤戦へと移る。

一通りインカムからグチグチとした俺に対する文句が流れて、部長から全体に指示が入った。

『ともかく。——……少し早いけど中盤戦よ。祐斗、小猫はグラウンドに向かつて頂戴。イツセーは朱乃とそのまま旧校舎周辺の守護を続行。……相手兵士を一通り倒し次第、一度部屋に戻ってきなさい。それからイツセーには指示を与えるわ。』

「部長ー、俺は」

『……。散歩でもしてなさい、まったく』

「……はーい」

ちよつと呆れが入ってた。

……気持ちは分かるけれど。

いや、女王やつちやうのはどうかなー、とは思ったけど……あのまますんなり逃がしてくれるとは思えなかったし。

一般人じゃ有るまいし、気絶させなくても——って気絶させれば良かったか？

アナウンスが入らない。つまり相手側に情報を与えず、かつ無力化していける。

気絶って戦闘不能扱いになるのか、と思い部長に確認を取った。

「部長、気絶させたらリタイヤですっけ？」

『確か違ったはずよ……ってアナタ、何をするつもり？』

「いえ、今度敵に会ったら気絶させます。それなら文句無いでしょう？」

『ハア……アナタってホントに、もう！』

ブツン、と向こうから切られた。

なんでそんなに怒らなきゃならないのか。

というか、やっぱり当初の目的忘れてないか。

あんたの結婚云々が原因でしょうに。

はあ、と溜め息を吐く。

地上に降りて、お馴染みの散歩の時の曲を鼻歌で歌いながら歩き始めた。

「……なんですか、アレは」

「……私にも、何が何だか……」

空中に投影されるレーディングゲームの様子。

一人、また一人と倒れていく。

それは見ている側……駒王学園会長、副会長からしてみれば異様な光景だった。

——現在行われているゲームはプロ対アマ。

御家同士の問題解決として行われる事になった試合だが……聞くだけでもアマチュアであるリアス・グレモリーに勝ち目など皆無であつた。

……しかし善戦、否、このまま一時間もしない間に勝ちを取るだろう速さで進軍して行っている。

プロで実質無敗のライザー・フェニックス相手にだ。

生徒会長室でその光景を見る二人にはそれが異様に見えた。

「……特に驚きなのがあの兵士……確か三年A組に在籍してる奴良陸人ですか。どうにも悪魔に成りたてとは思えません」

会長が言う。

「確かに。あの魔力量は異常ですね。——あそこの『王』であるリアス・グレモリーさんにも迫るレベル……いや、それ以上かもしれませんね。確か神器を沢山持っていると言いましたが……もしや自分の体を弄っているのでしょうか」

副会長が続けて言った。

二人の見る先、投影された画面の向こうには鼻歌混じりで体育館の裏を歩いている奴良陸人がいる。

場違いなまでのんびりとゆったりしている。

やる気は有るのだろうか、と二人は思った。

「二年の転入生、天野夕麻。堕天使から人外に『変えられた』元堕天使。……ありえるかもしれませんが、『セフィロト・グラール幽世の聖杯』が生命を司ると報告書

には書いてありました。——ですが……」

会長は閉口し思考する。

報告書には乱用すれば亡者が見えるようになる、と書かれていた。……そんな事を今まで一般人であった人間がするだろうか。

幾ら過去に墮天使や悪魔……異形達に襲われたとしても自らの身体を躊躇なく改造出来るだろうか。

しかし何かしら力に渴望するようなことがあれば理屈は通る。

だがそれもオカルト研究部の部長……幼馴染であるリアスの言では無さそうだと。

ならば何故——。

「……ソーナ会長？」

其処まで考えて生徒会長——ソーナ・シトリーは思考の海から引き戻された。

——兵士である奴良陸人の魔力が膨大なのは偶々であろう。

……今気にしていても仕方は無い。

「ごめんなさい。……やはり魔力が多いのは天に恵まれた、いや、運が良かったのでしょうか。——それよりも今現状はどうなっていますか？」

「今リアスさまが動き出しました。今の中に相手側兵士全滅、リアスさまの損失はゼロです」

「……」

ソーナ・シトリーは頭を押さえる。

その理由は相手女王を瞬殺した規格外の兵士でもない。

女王と連携して敵を撃ち取っていく赤龍帝の兵士でもなく。

急速な成長を遂げた騎士に、術で無力化して倒して行く戦車でもない。

一番はリアス・グレモリーという幼馴染が10日という短い期間で、プロを凌ぐ強さにまで眷属を鍛え上げた事だった。

——後の話だが。

ソーナ・シトリーの邪龍を宿す眷属がこう語る。

「多分会長が眷属の育成に熱心になったのは兵藤の初試合のせいだ」



それは彼の夢が叶った時、自分の受け持つ生徒に聞かせたり聞かせなかつたりするが……それはまた何時かの話だ。

駒王学園レプリカのグラウンド。

そこでは小猫ちゃん、木場、遅れてきたイツセーが戦っている。

——そんな最中、現在俺は相手の僧侶……ライザーの妹であるレイヴェルと戦闘風景を見ていた。

「……あ、お宅の戦車さん……えっとイザベラだったけ。……イツセーにやられたけど使わなくて良いの？」

「……中々やりますわね、あの赤龍帝……スケベだけでは無いですか。ユーベルーナも貴方にやられてしまいましたし、今更使う相手は居ませんわよ。——私の持つフェニックスの涙は今、よくてサクリファイスに一度誰か使える程度の価値しかありませんから。それなりに精製にも時間が掛かりますし。……なので今回はもう使う気はありませんわ」

「いやーごめんね？ 気絶させれば良かったと反省している」

「変な事で謝らないで下さいまし。……ハア、まったく」

まあ、お門違いも良い所だ。

本来倒すべき相手なのに、気絶させれば良かったって……アホかつての。

「それでおぜうさんは戦わないんだよな？」

「ええ。どうせ結果は見えていますし。それに疲れるのは嫌ですから。……それに今回の結婚については兄が悪かった所もあると思いますから」

「まあ、これから結婚する相手の前でディープキスなんてするのは常識知らずだわな」

「……ですわね」

肩を竦めさせて相槌をうつレイヴェル。

見ていたら小猫ちゃんが僧侶の一人を倒し、木場が騎士の残り一人を倒していた。

……これでもう残りは此処の『僧侶』と『王』だけ。

「ま、もう俺が出張らなくても勝てると思うし。……というかやらせてくれないんだよなあ……」

「怖いですわ、貴方。本当に元人間なのか疑ってしまいますわよ……」  
「はっはっはー照れるぜー」

「……棒読みで言われたらツツコミをする気も失せますわね。……それでは、程々になさって下さいな。ちよつと私は気になる事がありますのでこれで」

「ばいびー……つと」

そう言つて残り一人の僧侶はイツセーの下にゆつたりと歩いていった。

さてと俺は——……ちよーつとやらかそうか。

「おーい、木場ー、小猫ちゃーん。ちよつとこつちに来てー」

一息ついている二人に声を掛けて、俺は手招きする。

「どうしたんすかせんぱーい」

「イツセーは関係ないぞー作戦通り先に行つてろー」

ハテナマークを頭上に飛ばしながらイツセーは部長と朱乃さん、アーシアの向かった新校舎の方へと歩いてつた。

そしてこちらに来た二人。

「なんですか、リクト先輩」

「……なんですか」

「おつかれ、二人とも。……体調はどうだ？」

「……？」

「大丈夫ですが……？」

まあ、なんでこんな事聞いてくるかなんて分からないわな。

「うんうんそれならよし。……で、今回全力出せた？」

「いえ……少し消化不良です」

「小猫ちゃんと同じく僕も……」

そっかそっか。

「じゃあ……——丁度いいから俺と模擬戦しようか。あつちはイツセー一人行つただけで十分だろ。……来いよ、本気の稽古付けてやる」

「……へ？」

「……お義兄さん馬鹿ですか。今回の目的は」

「リアス部長の婚姻破棄、だ。それは俺も分かってる」

「……なら、どうしてでしょう」

木場が聞いてくる。

わかってないな、多分。

「今回ちよつと調子に乗ってたろ。ちつとばかり力つけたからって慢心して。——そんなので勝てるわけないだろう」

《——リアス・グレモリー様の『女王』一名、『僧侶』一名リタイヤ》

「……っっ!!」

「言わんこつちやない。勝てたのに慢心しやがって……まあ、イツセーが一人で戦う事になってんなら模擬戦もお説教も試合の後だ。行ってやれ、二人とも。多分残りが実質『王』一人になってるからライザー・フェニックスは本気でくるぞ。不死鳥は精神の続く限り無限に生き返る。例え剣で刺したままにしようが、例え相手の気を滅茶苦茶に乱そうが即全回復だ」

不死身の恐ろしさはそこにある。

『フェニックスの再生』とはつまりダメージを受ける度にオートでケアルガがかかるようなもの。

そんな毎ターン全回復してくるようなラスボスと戦うのだ。持久戦はお勧め出来ない。

短期決戦。しかも一撃必殺の力が必要だ。

「くっ……!」

「……分かってたんですか？」

「ライザーはチャライがあれでも好戦績を残してるんだ。……俺はアイツの事もアイツの眷属の事も油断してなかったよ」

だから俺はユーベルーナを倒す時、フェイクで作ったとはいえヒト一人消し飛ばせる威力の魔力球を作った。

鼻歌混じりで散歩していたとしても、俺は幾ら各下の相手だろうと決して油断はしていない。

慢心は強者必衰の理だ。

何処かの金ぴか王のように。

「ほら、さっさと行ってこいや。——部長の心が折られて居なかったら俺は助けに入るからさ。急がんと手遅れになるぞ」

「わかりました……！」

小猫ちゃんは頷いて走り出し、木場も持ち前のスピードで走りだす。

「さて、と。……じゃあ俺は上空から眺めてましようかねー……」

悪魔の翼を出して俺は新校舎の屋上、部長らの居る場所の上空へと飛んだ。

早く終わらして黒歌とデートしたいなー、とか考えながら。

……ふざけてるだなんて誰にも言わせない。

こちらら大真面目だよバカヤロウ。

——そうして最後の戦<sup>終盤</sup>いが目前にて始められた。

## 試合が終わる日

私が着いた時、イツセー先輩はボロボロの姿で戦ってた。先輩の左腕にあるブーステッド・ギアに今、光はない。

禁手に至るか、至らないかで使えないかもしれないと合宿の時言っていたけれど……結局間に合わなかった。

だから今回、倍化の能力も少ししか使えないと言っていた。

……ボロボロの姿にまでなつて部長のために頑張っている。

だから私が頑張らないといけない。

”内気”と”外気”の合成。

良い気だけを取り込み、悪い気だけは取り込まない。

お姉ちゃんとお義兄さんに習った『地仙術』と『天仙術』。

……私はもう仙術は恐くない。

なぜなら大切な人たちを守れると知ったから。

優しいお姉ちゃんともう一度引き合わせてくれたから。

掌底を焼き鳥の腹に打ち込んで合成した膨大な気を私は送り込む。

——血を吐いたようだけど効いていなかった。先輩の言う通り、気の巡りも肉体と一緒に再生された。

ああ、本当に心が折れそう。

幾ら仙術を克服しても、力を付けても……敵わない者には敵わない。い。

でも情の深いリアスお姉さまの事だ。……今の私よりも辛いだろう。

『滅びの魔力』——その性質上、迂闊にリアスお姉さまは攻撃はできないから……。

私は気を活性化させて治りが早くなつてるとはいえ、火傷は今もこうして出来て行く。

祐斗先輩も攻撃は効かず、ずっとダメージばかり増えていく。

そしてイツセー先輩は——もう見るに堪えない。

それを、その光景を私達の『王』は一人受け止め……。

「——リザインします。もう、お願いだから——この子たちを傷つけ

ないで……っ」

——れなかった。

私達はまだ戦える。

でも私達の王がもう限界だった。

——……そして勝てたはずの試合が終わる。

私は呆然としていた。

横でアーシアが涙を流して倒された。

怒った朱乃は目の前で倒された。

「俺が部長を——守って……ッ！」

「！……もうやめて——イツセーっ！」

そしてイツセーが今、成長段階らしいブーステッド・ギアのせいで強化もうまく使えずに殴られて、蹴られて……それでも顔を上げて、睨みつけて戦ってくれてる。

「部長！」

「……リアスお姉さま！」

祐斗と小猫が来たけれど……あの不死身には勝てそうにない。

相手はフェネクス。聖獣一匹にも数えられる種と同じ不死身の悪魔。

祐斗が氷の魔剣で斬り付けるけど、炎は消えない。

小猫が相手の気を滅茶苦茶にしようとしているようだけど、燃え盛り治ってしまう。

ああ、小猫が燃やされてしまう。

祐斗が想像創造を働かせて新しい剣を作るけど……それも思うようにいかず、苦い顔をしている。

どうしてこうなってしまったのだろう。

リクトのおかげですっかり修行は出来た。

皆は力を付けたし、私も少しだけ成長できた。

なのに——何故？

イツセーが動かなくなつた。

ああ、この子は……私の為にとって……『リアス部長の為に』って。祐斗も新しい火傷の痕が見ていて辛い。

小猫の小さい身体がボロボロになっていているのも見ていて心が痛くなる。

……ああ、そうだ。私が負けを宣言すれば……。

「——リザインします。もう、お願いだから——この子たちを傷つけないで……っ」

三人の私を咎める声が聞こえる。

……ごめんなさい。私は——。

——グレイフィアの声がフィールドに響いた。

試合が終わり、治療のために運ばれた部屋。

そこに俺は、肩に黒猫を乗せて見舞いに来ていた。

「……お疲れさま、小猫ちゃん」

「……先輩っ！ どうしてあの時助けてくれなかったんですか！

イツセー先輩も祐斗先輩も私も……あんなになつてたのに」

「俺は部長の心が折れなかったら助けに入ると言った」

見ていたから知っている。

イツセーは気絶しながらも立ち上がって戦っていた。

木場は無駄だと分かって居ても斬り付けに行っていた。

小猫ちゃんも諦めずに気を送り込み戦っていた。

……一番に負けたのは部長だ。

「っ……でもー」

「王様は部下が目の前で殺されても常に冷静でならなきゃならない。

……優しくてもいいさ。そりゃあ民から好かれるような眷属を大事

にする王様でもいい。だけど王が挫けてしまえば、幾ら部下の士気が

高くてももう集団としては機能しない。その辺はチェスのゲームと

一緒だ」

あそこから支えられて部長が立ち上がれば、俺は助けに入っていた。  
た。

でも負けてしまった。……それは気持ちの面で、だ。

小猫ちゃんも分かっているようで、悔しそうに顔を歪めた。

「はあ……ともかく！ ……これからリアス部長の結婚式が始まる。付き添いで一緒に行こう、小猫ちゃん。——まだ寝てるイツセーは恐らく後から来るからさ」

「後から……？ ——もしかして……」

「さてはて。ちよろつと夢の中で激励送ってきたような送ってないよ  
うな。——負けたけど勝つぞ、小猫ちゃん」

「……」

回復系神器で小猫ちゃんを諸々回復させて、俺は彼女を連れ立って部屋から出た。

場所を移して冥界。

リアス・グレモリー、ライザー・フェニックスの結婚式。

木場にもこれから起こる事を説明して、一応怒りの矛を収めて貰った後。

何時か入ってくるリアス部長と付き添いの朱乃さんを待ちつつ、一時的に入れる許可を貰った俺は、木場と小猫ちゃんの二人と会食を口にしていた。

「それで、何でリクト先輩はあの時助けに入ってくれなかったんですか？」

「知りたい？ じゃあ、……小猫ちゃん説明」

「嫌です。……口が塞がっているので」

「いや、今何も食べて……うん何でもないよ。……ちつと赤い髪のお嬢さんに灸を据えるためさ。普通自分の人生が掛かっているのに慢心するかね？ お前らもだけど」

「……ごめんなさい」「……すみませんでした」

二人が気まずそうな顔をして顔を背けながら言う。

いや、謝る相手が違うでしょうに。

「まあ、この場では言わないでおくよ。さて、新郎新婦のご入場だ」

パチパチと何処からともなく拍手の音がしはじめる。

音の発生源を見ると部長が副部長を連れて一段上の貴賓席に着い



た。

魔王のサーゼクス・ルシファーを挟んで反対側にライザーが座る。しかし、待ったを掛けるように「頼もう！」と一つ声が響いた。

「同じく花嫁泥棒もご登場っ」と

「……馬鹿で変態な先輩を持つと大変ですね」

「小猫ちゃん、何時になく饒舌で毒舌だね……」

大きな扉を開いて現れたのは赤龍帝の籠手を身に付けた兵藤一誠。

……これからこの結婚式の花嫁を奪おう、という大層な奴だった。

「……勝てるんでしょうか、イツセー君は」

「勝つき。俺が断言してやる」

始まるイツセーと部長の兄であるサーゼクス・ルシファーの問答。

……そうしてイツセーの一世一代の大勝負が始まった。

## デートする日

今日は結婚式の後日である。

会場に乱入してきた転生悪魔の兵藤一誠。

彼は来て早々、我等が部長を返して欲しいと申し立てた。

希望通りライザーと戦う場が作られ、そこで禁手へと至り、10分という長い時間でもってライザーフェニックスに打ち勝った。

……だけど代償として、禁手へ至る発破剤に片腕をドラゴンへと変質させた。

まあ、それは良いとして不死鳥<sup>Life</sup>に赤龍帝<sup>Power</sup>は、見事花嫁を奪取する事が出来たのだ。

それから二人して人間界まで逃避行。

最中俺は笑顔のこわい朱乃さんに助けなかった理由を説明していた。

……納得してくれて何よりだった。

で、その後部室に戻り、木場と小猫ちゃんは覚悟していたけど、イツセー以外への短いお説教。

慢心していた事も含め、勝ちに拘るのだったら、俺の主として俺も積極的に登用するべきだったことを話した。

一応、部長も渋々納得して今回の敗北を糧にするそう。

ちなみに、具体的な怒った内容は「自分の力を発揮したいからといって俺を除け者にしやがって」と概略だけ聞けば自分勝手だと思われるようなこと。

それをさも認めさせるようにごまかしつつ言ったのだが……まあ、俺がヒーローの如く颯爽と現れてしまったらきつとリアスさんから好意を寄せられる可能性が大きかったから助けなかった事に関しては許して欲しい。

確実にイツセーが部長を救えるようにしてやったのだからそのくらい、ね？

……明日行って駄目って言ったら俺がずらしてやる。

「それにしてもリクトは意地が悪いにやん。助けてあげれば良かった

のに……」

「わかっているよ。でもまあ、これでリアスさんの興味はイツセーに向けられる。……俺が万事解決！　なんてしちやったら俺はどれだけ女を侍らす事になるやら」

「……リクトはハーレムに興味ないの？」

「んー……俺はこの世で一人にしか興味ないからなあ……。あ、でももう一人居るんだったらソレはソレで……」

「——っ！　もうっ！」

黒歌が腕を叩いてくる。

「痛っ！」

「……痛く無いくせに」

で、俺は黒歌とデートなわけだ。

例の白音ちゃんの仙術を使えるようにする事の報酬。

まあ、でもデートといってもデパートだとかにちよっとお出かけする程度である。

そして現在いるのは駒王市の某大型量販店。

ちよっとな調味料が無くなっていたのでその買い足しだ。

なんで態々隣町まで来ているかと言うと、自宅の周辺に品揃えの良い所が無いのだ。

まあ、コンビニが近くにあるのが有り難いところである。

……と、まあそんなわけで。

「買うもの買ったし……次は何処に行きますか、黒歌さん」

「はあ……陸人くんはヘタレだからにやー——言っても行けないでしよっ。」

「ぐ……ソレ以外でお願いします……」

「にやはははっ——リクトってばナニ想像したのかなー？」

「くそう……」

妹との事も解決し自分の気持ちに素直になった黒歌。

ちよっと思う所はあるけれど多分彼女も、それから俺も。

今は嬉しい思いで一杯だと思う。

……そうであって欲しい。

「ごめん、イジワルだったにやん……リクトはむっつりだからねー」  
「へっ、どうせ俺はむっつり助平ですよーだ」

「いじけちゃった。もー、ごめんってば……許して欲しいにやん？」  
「……上目遣いは反則……ぐはっ」

「ふふっ……大げさにやー」

笑ってくれて、自分も笑って。

初々しいそんな関係でもいいかな、と思う俺はやっぱり意気地なし  
だろう。

——意気地なし。

ああ、だから……俺は黒歌の事が解決しても直ぐには深い仲になれないと思う。

『猫は気分屋だからでもその心も行動も、もしかしたら一過性のも  
のかもしれない』と、どうしても思ってしまったているから。

何故信じられないのだろう。馬鹿だ。本当に自分は馬鹿だ。

……ああ、そう思う理由は判っている。

——”所詮『愛し合ってる』なんてものはエゴの押し付け合いに過  
ぎない”って考えが何処かにあるから。

……頭を振ってマイナス思考を振り払う。

止めだやめ。考えても仕方が無い。

並んで歩いていた黒歌が、ふと横から消える。

「リクト」

「うん？ なに？」

片手が塞がった俺の服を握る愛しい彼女。

「私も待つから。我侷な猫だけ……我が侷なりに私も待つからね  
？」

「……ん、頑張る」

「あ、でも遅すぎたら悲しいよ？ やっぱり早く解決して欲しい  
ナーって」

「………何処かで聞いた事があるような、無いような」

「ふふっ……さて、誰が言ったでしょーか？」

くすくす笑う黒い猫又の悪魔。

握っていた服から手を離し、腕に抱き着いてくる。  
可愛くて、愛しくて。

ついこちらでも頬が緩んでしまう。

きつと自分には勿体無い、今日一日は恋人である彼女。

自分の中の悩みや不安——そうした『どろり』としたものが燃えて消えていく。

こんな風に彼女が笑えるようになったのなら、今まで間違ったことはしてないのだな、と純粹に思えて。

「黒歌」

「ん、なにかにゃん？」

「……俺は黒歌の事好きだから。だから——」

この気持ちを伝えたくなくなった。

一緒にいて欲しい。そばにいて欲しい。

例え世界が認めなくても、俺は黒歌の事が好きだと。

例え世界が敵に回ろうとも、俺は黒歌を守ると。

そんな痛い子みたいな、きつと正常な思考だと言えそうに無い言葉がつつらと口からでる。

「……つつ」

……彼女の白い肌が真っ赤になっていた。

急にこんな事言っただけとは思って悪いとは思って、どうしても今伝えられなかった。

好きなヒトを信じられない醜い心が隠れているこの時に。

やっちゃった、と思って彼女の顔を見るときもじもと、言葉に詰まっていたようだった。

……本当に可愛いくて少し理性が外れかけた。

「あ、うえ……つと。——……うん、ありがと。私もリクトとずっと一緒にいたい……にゃ」

「あー、えつと……一旦荷物置きに帰りますか」

「……うん……にゃあ」

変な空気になったのを誤魔化すため。

しおらしくも、頬を緩ませる彼女の手を引いて俺は自宅の玄関へと

『ずれて』戻る。

「……ちよつとお水飲んでくるね」

「うん……」

少し一息つき、自宅付近のファミレスで昼食を取ろうと決めて外に出る。

「……デートですか、二人とも」

「白音ちゃん？」

「あ、え、白音!？」

と外には黒歌の妹の白音ちゃんが。

……『ずらして』玄関に直接入ったから気づかなかった。

「……。酷いです……インターフォン押したのに誰もでないし。ずっと待つて……—あ、ごめんなさい。そういうことですか」

一人で納得し、悲しそうだった顔からポンと手を叩いて一変。

「——さっきまでお楽しみでしたね」

「ち、ちがー!」「ちがうにやあつ!」

にやにやと笑う白猫はチエシヤ猫のようだった。

……お楽しみだったけどソレ違うから!

「——……で、どうして家の前に?」

とりあえずデートは一旦中止。

白音ちゃんを家に上げ、俺はさくつと昼飯を三人分作ってそれで済ませる事にした。

「頂きます。……えつと、今日から先輩の家にお世話になろうかな、と。リアスお姉さまに相談して住所を教えてくださいました。……止めて下さいい姉さま、鬱陶しいです」

「だって白音、今日からウチに泊まるんでしょ? 私、シロネニウムが枯渇してたんだもん。ちよつと我慢して欲しいにゃん♪」

「シロネニウムって……」

よく分からない物質である。

多分口で説明されてもわからないと思う。

……あ、俺で言う黒歌成分のことか。よし納得。

後で俺も補給させて貰おう。……ぐへへ。

「じゃ、黒歌と同じ部屋で良いか。……というか父さんと母さんに知らせないと」

「白音と一緒にの部屋かあ……久しぶりだにやあ……」

うにやあ、と嬉しそうに笑う黒歌さん。

仲直りして貰って本当に良かったと思う。……って別に何か有ったってただだよな……。……

べ、別に仲直したなんて聞いて無いしー。

……はあ、なんだって自分に誤魔化してるんだろ。

「……いいんですか？」

「……ん？ 良いって。気にしない気にしない。……黒歌の妹が家に住むって言えば一発だから」

「えつと……何も隠してないような……」

ああ、そうだった。

「あー、まあ色々あるんだよ。色々」

「まさかバレるとは思わなかったけどね……」

「?? ……一体……？」

首を傾げてまったく分からない、と言った風の白音ちゃん。

まあ、当たり前といえば当たり前だ。

「白音ちゃん」

「っ！ ……何ですか」

「……部の皆には内緒にしておいて欲しいんだけど……」

真剣な顔をして見つめてくる黒歌の妹、白音。

「——俺って”人外”らしいんだ。生まれた時から、悪魔になる前から……ずっと前から」

「え」

うんうん、と頷く黒歌は知っている俺の秘密。

そして両親も知っている事実。

”妖怪”。

原初はヒトのおそれが心から抜け出て生まれる異形のモノ。ただ、それとは違い俺は人の子から生まれた”人外”。

百鬼夜行の主、「妖怪：ぬらりひよん」とよく似た存在。

『ずらす程度の能力』だなんてモノを生まれつきもった転生者。

『ずらすが自分の起源』だなんて言ってた厨二野郎。

——…その実態は『ずらす程度』ではなかった。

己が正体を知ったのは高校二年の時。

…修学旅行の時季、紅葉の綺麗な秋の事である。



## 木葉舞のダイグレッション 実家に連れて行かれた日

高等科、二年の秋。

駒王学園の生徒は修学旅行に、紅葉が綺麗なこの時期京都へと行く事が決まっていた。

宿泊施設は京都の中でもそれなりに高級とされるサーゼクスホテルとセラフオールホテルに泊まるとの事。

……ツツコミを入れたくなかったけれど堪えた。きつと言つても経営者の妹とその女王しか分からない。痛い子で見られることは必至だ。

そして仕送りだけをしてくる両親にその事を伝えたら……危うく俺の修学旅行が無くなりかけた。

「……どうしてなの？」

『いや、どうしてって言われてもなあ……母さん、どうする？ 説明するか？ ……うん、うん——あー、母さんに代わるぞ』

「……うん」

電話の相手が変わる。

『もしもし陸人。口で説明してもわからないと思うから——母さんたち、一度ソツチに帰るわ。……いいわね？』

「……」

内心、「ただ事じゃないな」と思った。

基本海外暮らしなのだ。

前世と変わらず二人とも。

少し、日本から逃げているんじゃないかと思ってしまうが、そういう訳じゃないと顔を背けながら言っていたので正直な所は分からない。

ただ、とんでもない事が起こりそうだと心の内で思っていた。

二日後。帰ってきた二人。

必需品だけらしい軽めの鞆をリビング付近に置いて、両親は黒猫を

抱く俺と机を挟んで対面していた。

とても険しい視線でこちら……主に黒猫の方を見ていた。

「陸人。とりあえずこれから母さんの実家に帰ろうと思う。……いいな？」

「……急すぎてアレだけど。……というか初めてじゃない？ 母さんの実家に行くのって」

一度目の人生からして初めての経験である。

「そうよ。……ちよつとこの人が苦手だね……！」

「……ははは」

肘で小突かれる我が父はとても気まずそうに顔を背ける。

「んん！ その前に一つ聞かせてくれるか。……その黒猫は何だ」

「うん？ 二年くらい前に」

「そういう話じゃない。——その黒い猫又は何だと聞いているんだ。……正体を現せ化け猫」

「——ッ」

俺も驚きだが手元の彼女も、驚きで身体がはねた。

黒猫……黒歌から、仙術を応用した念話が来る。

『……陸人。コレってどういうことなの……』

いやいや俺も驚きなんです。……マジで。

なんで二人とも分かったの……。そりゃあ俺は家の中では黒歌の存在だとかいうモノはずらしてないけど……。

でも黒歌は確かそれでも仙術使って猫又の気配は散らしてたら？

なんだって……。

『……じゃあ本当に陸人は何も知らないんだね』

……うん。というかそろそろ姿見せた方が良いと思う。

母さんと父さんからの殺気が凄い。……というかなんでこんな殺気出せるの!?

念話を切られ、黒猫が腕の中から出て人型になる。

着物を正して彼女は俺の隣に座った。

「猫又、名前はなんだ」

「……黒歌。黒い歌と書いて黒歌よ」

「お前は何を思つてウチの息子に近づいた。——返答次第では俺が直々に滅す」

父さんが手に持つのは筆記体で文字が書かれた札。

……アレ、凄い退魔の気配がするんですが……つて！

「——や、ちよつと待つ」

「陸人は黙つてなさい！……それで？」

母さんも手元の妙に長いモノに手を掛けていた。

……あれも凄い退魔の気配がががが。

「私はお宅の息子さん、陸人さんに拾われただけです。……恩義も感じていません。決して仇なそうだななんて考えておりません」

「証拠は」

「それは……」

なんでこんな事になっているのか。

なんでウチの両親二人からこんな気配を感じるのか。

とりあえず言えるのは、

「落ち着けよ三人ともツ！ 母さん父さん！ 黒猫が彼女だつて事、俺は知つてたから！」

この剣呑とした空気は好けなかった。

「……どういふことだ、陸人」

「説明してくれる？」

どうしましょう、今度は矛先がこちらに向いてしまいました。

……うちの母親と父親がカタギじゃ無さ過ぎる！

「……で？」

「いや、でつて言われても……はい。黙つてて御免なさい」

「……よろしい」

黒歌が家に居候する事になったあらましを話して一応の理解は貰えた。

でも流石にあれだ。

黒歌が俺の事を騙して居候していたならともかく、俺が認知しているために実質は同棲生活のような状態だったのだ。

親としては思う所があるのは分かりきったことだった。

「それでだ。陸人、お前は妖怪についてこの世界の裏の顔について知っているんだな」

「……はい。知ってます」

「妖怪については知っているの?」

「それは、あまり……でもなんで妖怪?」

気になった。なんで妖怪の話を持ちだしてきたのか。

今の所皆目見当つかない。

「……うーん。俺の口から言っているいいものか。とりあえず母さんの実家に行くぞ。多分その方が早い」

「……。お父さん? 行きたくなかったら行かなくてもいいのよ?」

「うー……でもそろそろ顔出しとか無いと……」

えらく弱々しい我がファザー。

そんなに母さんの実家が苦手なのか。

よくわからん。

「とにかく行くぞ。多分今から行っても夜には着ける。昼も嫌だけど……夜かあ……」

「はいはい。……じゃ、行くわよ。……黒歌さんも一緒に行く?」

「えつと……」

「一緒に来なさいな。これから陸人と一緒に暮らすのなら知っておいた方が良くないから、ね?」

「あ、いえ、私は……」

もじもじと言葉に詰まる彼女。

あーうん。だってそんな関係じゃないし、俺たち。

……いや、俺はそうなりたけどき……って言っても駄目か。

「ほら、準備準備。あ、多分日帰りは出来そうにないから着る物も持って行つときなさいよ」

「わかった」

「……うう……」

そうして車に詰め込まれ、電車で東京へ。

浮世絵町という町へ行く事が決まった。

「ゴメン、黒歌。巻き込んだつぼくて」

「ううん、いいのにや。私の方がリクトのこと巻き込んだりやってるんだから……」

両親が帰宅し二時間後、新幹線の二人席。

俺と黒歌は並んで座っていた。

前の席に座る両親二人は多分、眠ってる。

飛行機で飛んですぐに……だから、時差的に辛いものがあってもおかしくない。

……ただ二人の体力を考えると実は起きて話を聞いているかもしれないが、まあ良いだろう。

特に気にする事はない。

ただ、寝ているかもしれないのは確かなため、小声で話をする。

「それにちよつとリクトの事知りたかったから、良い機会だなんて思ってる」

「……そっか」

「うん。……にしてもリクトの親はなんの仕事してるの？ いつもは海外に居るって聞いたけど」

「さあ？ 外資系の会社に勤めてるって聞いた事はあるけど他はさっぱり」

ただ、退魔は関係なかったと思うけれど。

「というか世界の裏の顔って言うてたし……エクソシストとかじゃないのは確か。」

「札って事は陰陽師？ でもなら悪・即・斬だから問答無用で黒歌の事を殺しに掛かってるはずだ。」

「つまりまだ分からない、か。」

「気になるにやん……」

「……うん」

会話をしつつも時間は流れる。

しばらくして東京駅へと着いた。

浮世絵町。

文明化の進む現代日本でも、何処か江戸の風情を未だに感じさせる町。

その理由は分からない。

……ただ此処に立った時、懐かしいモノを得れた。  
来た覚えがある、ような気がする。

「さて、到着。……此処が母さんの実家よ」

「えー……つと。武家屋敷ってどういう事？」

にんまりと笑う母さんは答えない。

目の前にあるのは門。

古風溢れる武家屋敷の門であった。

ただ思うのは……少々一般人の実家と言うには規模が大きいように思う。

「うう……居るんだろうなあ……今日に限って家に居ないとか無いだろうし……ハア」

「もう、アナタ……そんな何時までも私のお父さんの事恐がらないのよ。……さ、入った入った」

「……まったく、訳が分からないよ……」

「同じく。……というか凄い妖気を感じるのにやあ」

戦々恐々としながら、俺は目の前の大扉を開ける。

……そして、気のせいではなければ。

ああ多分気のせいだろうと……そう思いたいのだけけど。

——少し開いて覗いた先に、手乗りサイズの口が3になってるナニかが居た。

「どうも」

「あ、どうも。失礼しまし「なーにやってるのよ。ほら、行く！」ちよ、母さん押すなって！」

押されて敷地の中に入る。

……見渡せば極道系のドラマを想起させるような屋敷に庭。

そして至る所から感じる異形からの視線。

さつき見た3の口をした妖怪が俺の服を引っ張る最中。

俺は驚きで体を硬直させて思う。

「母さんの実家は妖怪屋敷らしいです」と。

そして、お嬢が帰ってきたあああああ！　なんて叫び声が至る所から聞こえてきたのを俺は忘れ去りたい。

……母さん、アンタお嬢って……。

突っ込む事も出来ないまま、駆け寄ってくる白い着物を着た美人さんが一人。

「お帰りいいいい！　もう！　ずっと帰ってこなくて心配したのよ！」

「ははは。ごめんね母さん。それからただいま。……お父さんとお爺ちゃん達いるかな」

「うん居るわよ。あの人は丁度出掛けたから今居ないけど。……アレ？　もしかしなくとも……陸人くん？」

「え、まあ……」

母さんが母さんというと言う事は……もしかしなくともこの方が俺の祖母で。

若い。若すぎるくらい若い。

そして瞳が人とは違う。

「始めまして。妖怪の雪女、奴良氷麗ぬらつららです。お婆ちゃんって気軽に呼んで頂戴ねっ♪」

「は、はあ……」

お前のようなお婆ちゃんがいるか、と声を張り上げてニコニコと笑う彼女に言いたかった。

……自分の血に4分の1妖怪が混ざっている事が確定。

お婆ちゃんしてないお婆ちゃんに手を握られながら、俺は改めて自分について考え始めた所だった。

## 宴をする日

氷麗さん（お婆ちゃんだなんて呼べるわけない）が、台所に戻って行った。

そして『どうよ』と胸を張る母さんに連れて行かれる場所は大広間らしく、そこで会って欲しい人が居るんだそうだ。

行く途中母さんが、黒とかいうイケメンな妖怪と、青っていう強面の妖怪と再会を喜んだり、色気むんむんの髪長い女の人とハグしたりとテンション高かった。

妖怪屋敷らしいけど、なるほど母さんの実家だな、と納得できたけど。

……ただ、妖怪とすれ違う度に、お嬢！ お嬢だあ！ と呼ばれているのにはちよつと恐くなった。

だってノリが完璧にカタギじゃないもん。

どういふことなの、と思いつつ何時の間にか着いていた大広間に、母さんと俺、黒歌に父さんの順に入る。

「おお、これが俺の曾孫かあ……うんうん。中々良い男じゃないかね、父さん」

「そうじゃのー……となると儂は高祖父になるわけか。……いやあ、長生きはするもんじゃのう！」

「……………え？」

入ってすぐ、ポンと両肩に手を置かれジロジロと横からをみってくるイカした男が二人。

後ろに髪長い、上下で黒と白の髪をした男。

そしてよく似た、同じく後方に髪長い、濡れ烏色の癖っ毛のある男。

もしやもしや、いやいやまさか、と。

でも確認して見ない事には……うん。多分本当の事なんだろうけどさ。

「あの……」

聞く前に二人の頭がガコンと前に傾く。



ふらりと横から姿が消えた。

……うん？

「あいた」「……つてえなあ、雪麗さん」

「いい加減にしなさいよ、この年齢詐欺どもが！ もう、困ってるじゃないの！ ……ごめんね、ウチの大うつけとクソガキが」

「ああ、いえ……」

誰この人、と思ったけどどうやらあの、お婆ちゃんしてないお婆ちゃんによく似ている。

……気の強そうな所を見ると娘さん、と言うわけでも無さそうだ。

「氷麗さんの……」

「母親よ。……曾お婆ちゃんになるけど——言ったら凍らすから。雪麗さんって呼びなさい」

「はい」

なんだか体感温度で二、三度程気温が下がった気がする。

……絶対言わないようにしよう。うん。

怒られた事を特に気にしてなさそうな風の白と黒の髪の高祖父と名乗る男。

その隣に雪麗さんが座り、一番上の上座に自分の事を曾孫と言っていた黒髪の男が座った。

三人の前に対面するよう父さんと母さんが座り、俺と黒歌もそれに続いて座る。

そして父さんが手を床に付き、頭を下げた。

「ご無沙汰しております” 奴良組二代目総大将” 奴良鯉伴殿、並びに” 初代総大将” ぬらりひよん殿。……長らく訪れる事が出来ず、申し訳御座いませんでした……」

「鯉伴まかせたぞー」

「おうよ親父。まあ、色々こちらとしても言いたい事があるが……一応今日来た理由、” 裏” の事を伝えるという認識で良いのか？」

「——いえ、それに付いてはどうやら既に知っているようでして。……今日知ったのですが此処に居る猫又、名を黒歌と言いますが彼女から聞いたようです。……例の三勢力の内、悪魔陣営から抜け出た”

はぐれ”らしく」

値踏みするように黒歌のことをジロジロと見る黒髪の男。

……ちよつと胸の事見すぎやしませんかねえ、鯉伴さんよ。

ジトーつと俺が睨むと、すまん、と片手を上げてから瞑目しはじめた。

しばらくして片目だけ開け、口を開く。

「ふーん、なるほどな。……つまりウチの組について話せば良いわけか」

「そうなります。——どうも近々京都に修学旅行に行くようで……京都の妖怪に目を付けられても、と思つた次第です」

「あー……八坂が居る所か。それなら仕方ないな。ちなみに——変化は出来るのか？」

「いえ素振りすら見せず。……出来る事ならば裏には関わらせたくは無かつた……」

変化だ、なんだつて……よく分からん話になつてきた……。

……ただ、父さんが出来るだけ俺に裏について色々と言いたくなかつた事は分かつた。

知らなくても良い事を知つて一喜一憂するくらいなら初めから知らない方が身の為だから、なのか。

まあ、父さんと母さんの気持ちも露知らず、生まれる前から既に知つていたけれど。

「まあ、こうなつた以上無理だろうな。……えーつと、陸人だつたか。お前、京都に行くのは諦めれるか？」

話を振られた。

何時かくるだろうとは思つてたけども。

ちよつと前振りが欲しかつたかな……。

「えつと。……話によつては行きませんけど……出来る事なら行きたいです。……どんな理由で行つては駄目なんでしょうか。えつと、総大将さま？」

「あー、そんな堅苦しくなくて良いつて。お前の父さんは筋を通してただだから。……曾爺ちゃんでもクソジジイでも好きな呼び方す

れば良いから、な?」

多分女ならクラリといきそうなウインクで言ってくる。

……よし、決まりだ。

「じゃあクソジジイで。なんで駄目なん?」

クソジジイ一択で。

「え?! いや、確かに良いって言ったけどさ……立花にも言われた事  
ない……」

「はあ……陸人、後で謝りなさいね」

「……考えとく」

母さんに諫められる。

なに、ちよつとお返ししたただけだ。

黒歌の事ジロジロ見やがって。

主に胸。……誰が見て良いって言ったし。

黒歌がちよつと不快そうな顔をしたのを俺は見逃してなかった。

知ってるんだからな?

後ろにあきれ返ったような顔してる、ウチの母さん似の誰かが憑い  
てるの。

死んだ奥さんとかじゃないのか、それ。

俺の心境は知らずに、しくしくと泣きが入る曾お爺ちゃん。

ちなみに母さんの名前は立花<sup>りっか</sup>だったりする。

雪麗さんが曾爺ちゃんの方を見ながら呆れた声を出す。

「つたく、しゃきつとしなさい、しゃきつとー!」

「クソジジイって……曾孫に……クソジジイって……アレか、お年玉  
上げなかったのが悪かったのか……」

……思った以上にダメーじ受けたみたいだった。

ちよつと悪い事したかもしれん。

駄目だこりや、と雪麗さんが溜め息を吐き、隣に座るこれまた色男  
である高祖父を小突く。

「ああ、もう……ぬらりひよん、あんたが鯉伴の代わりに説明なさい  
よ。当分戻せないじゃないの。……若菜が死んで後は乙女しか慰め  
れる子が居ないのに……あの子も台所だし。……大体アンタが御子

「あの子にちよつかい出したからでしょ？」

「瑛姫のう。……いや、うん、今更じゃし……仕方ないじゃろ？」

「あの九尾の加護があるって知ってて拉致して嫁にしたくせに……良  
い子だったけども」

「はっはっは！ まあ、若気の至りという奴じゃ。……許せよ雪麗、今  
こうしてお主と一緒に居るから、な？」

「そ、そんな甘い声だされても納得なんてしてやらないんですから  
ねっ！……もう。……大体なにが若気の至りよ。未だに他所様の家  
に上がり込んで飯食って。挙句にその家の爺婆を痴呆扱いさせて  
る妖怪が言っても言い訳にもならないわよ。大体そんなことされた  
ら誰だって怒るに決まってるでしょうが。どうなのよ、ええ？」

「や、それは儂の存在意義みたいじゃし。そういう妖怪じゃし？ と  
いうか八坂の奴もお前もなんというか……女々しいのう」

「そりゃ女ですからね！ それともなに、アンタは私の事男だとも  
思ってたの？ うん？ と言う事はアンタ私の事男だと思って抱い  
てたわけ？ へー、ほー」

「いや、それとこれとは関係ないじゃ——」

周囲を放って二人で痴話喧嘩をする雪麗さんと、おそらく曾曾爺さ  
んの”ぬらりひよん”。

小一時間ほど喧嘩は続き、二人とも手が出そうになった頃合に山吹  
乙女という鯉伴さんの現奥様が夕食を運びに来て収まった。

いじける鯉伴の曾爺ちゃんを慰める彼女に、もう一人の亡くなった  
らしい若菜さんの話を聞くと、曾爺ちゃんに憑いてる彼女は第二夫人  
であったそうだ。

なのに第二夫人の子供である、俺の爺ちゃんが三代目らしいからよ  
くわからん。

なんか深い事情があったのだらうと思うが、まあ其処は気にしない  
でおく。

……ふと憑いてる母さん似の若菜さんを見たら、目が合ったので気  
まずかった。

とりあえず話が進まないとの事なので、一番物分りの良い母さんの

父さん……つまりお爺ちゃんが話してくれる事となったのだが未だ帰ってきてないらしい。

何かお爺ちゃんが苦手らしい我が父はその事に安心していた。

曰く、どうやら母さんとの事で何かあったそうだ。

……なにやらかしたのか聞いたが、結局首を振って答えてくれなかった。

ちなみに夕飯は天麩羅で、自分の作るソレよりも美味しかったので驚きだった。

「なんとというか……賑やかだね、妖怪って」

「ああ。ま、有名どころの妖怪が多い京都の方は格式高いのが多いから余計にな。関東の妖怪は基本的に賑やかなんだよ。火で例えるならあちらが線香の火。関東の妖怪が一瞬の華やかさを楽しむ花火って例えられるくらいだから」

「……なるほど」

夕食の後、母さんの帰りを喜ぶ宴の席も一通り済み、夜も更けた。此処からが本領、と言わんばかりに未だに広間からは宴の声が聞こえてくる。

母さんは未だに喧騒の中で、父さんと俺は先に湯を使わせて貰い、今は縁側で涼を取っている。

……ちなみに黒歌は、早々にあの色気が凄いお姉さんに酔わされて潰れて先に母さんと同じ部屋で休んでいた。

流石に俺は遠慮してちよっぴり舐める程度で終わらして後はジューズだ。

黒歌も妖怪兼悪魔なので一応大丈夫だろうとは思うが、やっぱりちよつと心配である。

そういえば。

「あー……父さん、ちなみに俺の人間の血ってどれくらいあるんだっけ」

「うーん、たしか1/4が雪女の血、1/16がぬらりひよん。残り1/16が人間だな、って母さんと話したなあ……」

「ふーん」

まあ、分かつてはいたけど結構複雑な血筋だ。

全くもってややこしい。

それにしても何故、自分は妖怪にならないのだろうか。

血的には妖怪変化しても可笑しくない、と鯉伴さんは言っていたけど何故……。

——母さんの父さん……つまりまだ見ぬ我が祖父奴良リクオも、一日の四分の一……夜の間は妖怪変化が出来ていたのだそうだ。

ただ、四分の一の妖怪の血が濃いせいか未だに昼間の人間である時間も若々しい姿で、あのお婆ちゃんしてない氷麗さんと並んで、幼妻ではなく幼い夫婦という意味で幼夫婦ようふうふと言われているらしい。

ちなみに母さん情報だ。

「へー、ボクとあんまり変わらないんだね」

「あ……」

「……ん？」

どっこいせ、と父さんとで俺を挟むようにして座る少年。

背格好からして歳は変わらないように見える。

その彼を見て父さんは固まっていた。

「うんうんなるほど。——……妖怪でも人間でもないね」

「……へ？ えつと……」

「あ、ごめん。自己紹介しなかったや」

頭を掻いて苦笑いをする彼の姿はとてもじゃないが。

……おそらくそうだろう、そのヒトのイメージとはかけ離れていた。

いや、信じたくないけどあのお婆ちゃんがそうだったから——そんなのだろう。

「……もしかしなくとも……」

「うん、ボクが奴良リクオ。今の所『現奴良組総大将』。三代目”つて事になってる。——お爺ちゃんって呼んでくれると嬉しいなあ……」

昼間の太陽のように笑うその彼は何処からどう見ても同年代の少

年。

あのお婆ちゃんと言い、貴方と言い。

『お爺ちゃんして下さいよ』と切実に言いたかった。

あと曾祖父と全然似てないな、と思ったけれどそれも言わないでおく。

——月には村雲。

——紅の葉は舞い散り、辺りを彩る。

……あやかし妖の夜はまだ始まったばかりであった。

## 揺らぐ日

ぬらりくらり

掴めぬ現実 舞い散る幻想

凍てつく寒さも 燃えうる熱さも

夢も希望も 野望も宿願も

三千世界の万物万象

其の遍く全ての理

其の起源

揺らぎよ 揺れよ

ゆらり ゆれり

ゆりゆれ ゆれゆり

人にあつて人にあらず

妖にあつて妖にあらず

魔にあつて魔にあらず

仏にあつて仏にあらず

神にあつて神にあらず

揺れよ体よ

揺れよ心よ

揺らぎよ 遍く全ての揺らぎよ 混沌たる揺らぎよ

今はずれろ 人にずれろ

意思を持って 心を持って

揺らぎよ 理の揺らぎよ

其の魂を理が一にせよ

起源はずらし ずれよ ずれて昇れ

ずれて下へ 下へずれて

ずれて上へ 上へずれて

ずれてずれてずれの果てへ

夢幻の如く昇華せよ

無限の如く昇華せよ

其が魂は揺らぎへ



其が魂は夢現へ  
ゆらりゆれり

「つつつ!!! つハア——ツ! はあ……つつ!」

唐突に目が覚めた。

口の中が気持ち悪い。

用意された水差しから直接水を飲む。

吐きそうなほど気持ちが悪かった。

……部屋から外を見れば、まだ日は昇っていない。

部屋に置いてある時計も針は四時半前を指している。

寝たのは十一時頃だったろうか。

確か最後、祖父から話を聞いたのだ。

……あやかし妖についてだ。

京都の妖怪について。

此処の妖怪について。

……妖怪は皆、始めは人の「おそれ」から生まれた者達なのだそう  
だ。

だからか元来気性が荒い者達が多い。

そんな彼等無法者を纏める大きく別けて二つの組織がある。

東の百鬼夜行の主、ヤクザ者の『ぬらりひよん』。

西、裏の京都の主『九尾の八坂』。

そしてこの両者は仲が悪い。

故に、ぬらりひよんに連なる俺はあまり京都へ近づかない方が良  
いのだそうだ。

仲が悪い原因はぬらりひよんに有るらしいが、それは誤魔化された  
のでよく分かって居ない。

……ただ、少し予想は付くが……。

「っはあ……」

肺に溜まった嫌気を吐き出し、少し落ち着く。

思考で頭を埋めて、気分が少しよくなった。

……それにしても気味の悪い。  
何もかも無くて何もかもが有る夢。  
夢から覚めれば大抵の内容は忘れるものだが、事欠かなく覚えてい  
る。

全てを曝け出されて全てを暴かれるようなあの感覚。

アレは自分だったのだろうか。

あの声は自分のものだったのか。

誤魔化してはいけない。

誤魔化せばきつと分らないままだ。

知らないといけない。

知らないときつと後悔する。

ただ、コワイ。

知るのがコワイ。

アレは人ではない。ヒトでもない。

ただ、アレは……自分だ。

つまり、自分は――

「何でも無い」

あの言葉の通り『夢現』<sup>ムゲン</sup>

”ゆめ”と”うつつ”。

無いが有って、有るが無い。

夢想は現実。現実が夢想に。

無限と夢幻の二匹の龍のように。

自分はそう。

遍く全ての理の一つから生まれた ”揺らぎ” が体現されたモノ。  
ノ。

「此処に居るべきではないモノ……」

「そんな事ねーよ」

部屋に声が響く。

声の元を辿り、後ろに振り返って見ると枕元には奴良リクオが座つ  
ていた。

……いや、先ほどまで見ていた姿とは違う。

奴良鯉伴とぬらりひよんとよく似た、銀と黒の長い髪を持っている。

背も少し長くなっている。

「もう一度言うぞ。んなこと言うな。ヒトの心に勝手に入り込む妖怪としてお前の心を見させてもらったが……陸人。お前は此処に居れば良い。……お前は俺の娘とアイツとの子だ」

「……ならわかるはずだ。俺は俺であって俺じゃない。……揺らぎで夢現だ。例えアంతの孫でも。例えあの二人から生まれたとしても……違うんだ」

ユラリと手が揺らいでいた。

手から腕へ。腕から体へ。

徐々に自分の身体が揺らいでゆく。

試しに合わせた両手は互いに肘まですり抜けた。

まるで何も無いかのように。

今の俺の体は実体であり虚像だ。

ああ、揺らいでいる。

心も体も……どっちつかずで決まらない。

「……本当に夢現だ」

「夢現か。……オレやオヤジ、ジジイよりもよっぽど”ぬらりひよん”らしいな。……とりあえず人に戻れ、陸人。お前は生まれて泣き、立花の乳を吸って育ち、己の足で生きてきた俺の孫でヒトの子だ。今はそれで良い」

「……それでいいのかな」

「ああ、いいさ……逆に何の問題があるってんだよ。……もう一眠りしな、爺ちゃんが見ててやっから」

「……うん」

祖父が懐からだしたキセルを啜えた。

口から吐き出された煙が部屋に充満する。

……その香りを浴びていると、段々と眠くなり……。

——そうして俺は目を閉じる。

……暁前。

妖あやかしが休み始める時間帯。

奴良組の武家屋敷、その縁側で髪の高い二人が酒を飲みつつ昇る朝日を待っていた。

『ああ、なんとも良き日であった』と曾孫であり孫娘あるのが帰省したのを喜び、二人で日本酒を空け、飲み交わす。

とは言えもう二人とも眠い事には変わり無い。……現に黒髪の色男、400年近く奴良組を纏めてきた奴良鯉伴は通路でもある縁側で欠伸をしながら横になっていた。

対してその父である、初代奴良組総大将ぬらりひよんは少し酒気で顔を紅くさせながらも、胡坐をかいて眠気覚ましにキセルでタバコを吸っている。

其処にもう一人。

二人によく似た者がやってきた。

「オヤジにジジイ、こんな時間までなにしてんだ」

「んあ？ なんだリクオか……若菜かと思ったよ。てつきり化けて出てきてくれたのかと」

「んな訳ねーだろうが。……オヤジ、オレにもその酒一杯くれ」

「鯉伴よ、もうボケたのか？ 若菜さんは四年前に死んだじゃろうて。……それに化けて出てくるにしてもまだまだじゃわい」

その来た人物。

三人の中で一番年下のぬらりひよんの孫、現総大将の奴良リクオ。彼はどさりと祖父の空いている隣に座り自分の父親に勺をさせる。鯉伴は何時もの事だと思っ居るので気にしない。

何時もの如く無礼講らしかった。

「……でも親父は良いよな。母さんもう直ぐ現代復活出来るらしいから。……式神でらしいけどさ」

「秀元の奴には感謝感謝。……安倍ん所の延命の秘術を改良して不老になった時は驚いたもんじゃがな」

「親父、あれホントに人間か？ もう俺、アイツのほうがぬらりひよんじゃないかって思うんだけど」

ぬらりひよんが盃の酒をぐいっと飲んだ。

「あ、そうだ。ぬらりひよんで思い出した。——陸人の奴、人間じゃねーぞ」

「何、妖怪変化でもしたか？」

「そりや目出度のう。——や、待て。リクオ、何があつた」

転がっていた鯉伴は起き上がり、足を外に出す。

酒気も少し収まったようで、顔も若干引き締まっている。

「いや、覗いてきたんだが……人でも妖でもなかった」

「……どういことじゃ、ソレは」

「 ”ぬらりひよん” より ”ぬらりひよん” らしい『人外』だ。

まさしく夢現ゆめうつの存在さ、俺の孫は」

「夢現か。読みようによつてはあの二匹の龍と同じか……」

「うーむ、最近あつとらんのお。最後に蛇の奴と『かふえ』したのは何時じゃったか……。いや、そんな事はどうでも良いか。京都行つても大丈夫なのか、あやつ」

ぬらりひよんが煙を吹かす。

紫煙が宙に舞った。

「大丈夫だと思う。……下手したらボク達よりも強いかもしれな……あ」

「お、昼間の姿か。……さて、夜も空けたし寝よ寝よ。お父さんはもう寝みーんだって……また起きてからにするわ」

リクオの姿が昼間の姿になり、

ふわあああ、と欠伸をしながら鯉伴はその場から去っていた。

「はあ。……とりあえずゆらちやん所に電話しとく。もし何か有つたらいけないからさ」

「おう、そうせい。とりあえずあの二人にも今日話すぞ。にしても夢現ムゲンか……一混乱有るかもな」

「……だね」

孫と祖父もその場から離れてく。

縁側には酒器と空いた酒瓶が残っていただけだった。

はて、それはともかく。

「あ、アナタ！ お早うございます。昨日は……」

「あ、つらら。コレからボク寝るから……添い寝してくれないかな」

「え、ちよつと!? ……ああ、もう！ これから朝食の準備があるのに……」

「いいのいいの。雪麗さんには僕から説明しとくから、ね」

「むう……お母様怒ったら怖いのに、もう。——若のバカ」

——さて、と白雪を抱いて桜は一眠り。

穏やかに眠りについた二人の姿。

聞けば、何処かの孫が羨み望む姿がそこにあつた。

## はつきりする日

目が覚めたら清々すがすがしい朝——……とは言えそうになかった。

時間帯は既に、そろそろ昼飯を食べようかという時間であった。

一概に原因とは昨夜の事、いや今朝の事。

とはいえ起きなければ元も子もなく、格好悪くも寝間着のまま食卓へ向かった。

行く途中で廊下の扉が開き、同じ程の背丈の祖父が出てきた。

「あ」

「陸人、おはよう……じゃないか。おそようかな」

髪が少し撥ねているのをみると、自分と同じくさつき起きたらしいのが分かった。

自分がまた寝入ってから少し見ていてくれたのだろう、きつと朝に眠る事になったからだと思う。

「えつと……ごめんなさい。迷惑掛けたみたいで」

「いや、全然。むしろこつちが謝らないといけないくらいだから。

……ごめん、アレを陸人が見たのは多分僕のせいだ」

両手を目の前で合わせて頭を下げる姿は、どうにも齢60を過ぎたお爺ちゃんには見えない。

「……でも何時か知らないといけない事だったろうから……気にしてないよ。爺ちゃんの言ったように例え何があろうとヒトであればいいんだから」

「そつか。……さ、多分皆がご飯用意してくれてるだろうから一緒に行こう」

「うん」

自分と祖父。

端から見れば、其処まで歳の変わらない友人のような関係に見えることだろう。

しかし歳の差は実に40近くあったりする。

……どれだけ若作りか、これで分かるだろう。

食卓に着くと、曾曾爺さんと曾爺さんが卵かけご飯をかき込んでい

た。

……厨房の女衆から、

『奴良組の大將達は今日は全員それで済ませ』との事らしい。

自分もそれで済ませろ、とやってきた母さんに言われたので卵をご飯の上に落として食す。

ただの卵掛けご飯ではあるが、悔る無かれ。

醤油は高級な奴らしく、祖父宛に父方のお婆ちゃんから送られてきたものだそうだ。

……美味しいのでよしとした。

—— 一通り食事も終わり、場所を移して大広間に集まる。

自分と両親そして黒歌の四人と、祖父と祖母。

曾爺さんと山吹さんに、曾曾爺さんと雪麗さん。

計十人がその場に居り、今朝俺に関する事を知った祖父が話してからというもの、ずっと沈黙が続いている。

一番衝撃をうけている両親は俯き、黒歌も黙りこんでいた。

「——えっと、よろしいでしょうか。……つまり、陸人君は妖怪でもなく、人でもない。仏教用語で言う所の三千世界全ての揺らぎを司っている人外……ということでしょうか」

「うーん……揺らぎそのものと言ったらいいいのか、それとも揺らぎを操れるという人外なのか。……概念が擬人化したのが陸人なんだと思うけどなあ……俺」

その空気を山吹さんが発言して破り、続くように鯉伴の爺ちゃんが頭を捻りながら言う。

二人の言葉を聞いて、両親の二人は心なしか悲しそうなオーラが増した。

……それもそうであろう。

あの時自分でも思ってたけれど……自分はどっちつかずの存在だから。

二人の子供であって子供じゃないから。

お爺ちゃんが口を開いた。



「うん、妖怪という訳でもないから、そうなんじゃないかなとボクも思ってる。……でも立花と皐月くんの息子だともちやんとボクは認識してるから。だから二人ともそんな落ち込まない。血の繋がりが有っても無くても二人の息子……それで良いじゃん」

「……お父さん」

「……はい」

どうもフォローしてくれたようだ。

自分も陰鬱な気分が少し晴れた。

「ただ、陸人は……まだ何か隠し事してるよね」

「……」

「話してくれないかな」

「……話さないとだめ？」

「うん、教えて。……陸人は何を隠しているの？」

……。

言うべきかわざらざるべきか。

良い機会なのだろう。……きつとそうだ。

「実は……」

話すのは事実と推測。

これは二度目の人生だと。

自分は記憶を持ったまま、恐らく下位の世界で有る此処に、肉体という枷を外して魂だけ ” ずれて ” 生まれてきたと。

だからか『認識をずらす』というぬらりひよんの血が入った自分の『ずらす』という起源が、呼び水になって規格外にもぬらりひよんの原初である ” 揺らぎ ” そのものに自分の存在が変質したのだろうと。

そして一通り話し終えた後、俺は隣に座る両親に向き合い、頭を下げた。

「父さん、母さん。……色々と黙っててごめんなさい」

謝らなければならなかった。

生まれてから今までずっとひたすら隠してきた事だった。

時には自分の感情すらずらして。

時には自分の演技と本音をずらしてでも誤魔化して。

……本音と演技が分からなくなっていた時もあった。

幸いにも海外で二人が暮らすようになってからその必要はなくなっただけだ。

でも、それでも。

——俺は二人に嘘をついていた。

「嘘をついていて。打ち明けられなくて。……二人を信じれなくて御免なさい」

「……陸人」

「……」

打ち明けるのが恐かった。

拒絶されればどうしようと、思っただけで。

親の事を信じれない自分も嫌で。

臆病だった。

「……??」

「頭を上げなさい陸人……それから歯を食い縛りなさい」

不意に謝る自分の体を起こされた。

身体が反応しないまま、母さんに両頬を同時に叩かれた。

「——いい? ……アンタは私の息子! 一回目だ二回目だなんて言われてもそんなもの私とお父さんにとつたら変わんないからね……っ!」

「……ふあい」

頬を押さえられて上手く返事が出来ない。

返事の声は変なものになってしまった。

ふるふると母さんは震えていた。

俯いて陰った表情は覗えないけれど、ぽたりと母さんの目元から畳の上に雫が落ちる。

頬から手が離れて、母さんに抱き占められた。

「……二回も私達の所に生まれて来てくれて有り難う。それから、ごめんね叩いたりして。……コレからは私とお父さんの事もっと信じさせて頼って頂戴」

「わかったよ、母さん。……ありがとう」

ちよつとの間、俺と父さん、母さんはその場で泣いた。

……ふと見た黒歌の、もの鬱げな表情は暫く頭の中から消えそうになかった。

リクトについての話が終わって、私は与えられた部屋に戻っていた。

今日聞いて思う所は沢山有る。

リクトが悪魔的な意味で無く、これが二度目の人生であること。

……悪魔や天使といったモノより人外だと言う事。

その彼が私の事を好きだと、出来ることなら私の問題を解決して全て綺麗にしてから……嫁に迎えたいと、あの場で言ってくれた事。

彼が妖怪でも有ると言う事は昨日知ったけれど……。それ以上はずつとずつと……。私より長い時間思い悩んで辛かった事も、今日始めて知った。

一年間ずつと彼と一緒に居て知らなかった事を今日と昨日で知った。

……思う所は沢山有る。

人じゃないんだと思い知らされた。

普通の人間なら二度も同じ人生を歩むなんて真似は出来ない。

演技が上手いと一年掛けて知った……。でも彼は周りだけじゃなく己にも嘘をつき続けていた。

妖怪で有る事は彼も初めて知ったのだろうけど……。それ以上に本当に人から外れている事を知ってどうだったのだろう。

それはきつと私では、仙術を使っても分からないと思う。

……でも、知りたかった。なんで平気なの、って。

彼の事を知りたくないと言えばそれは嘘だ。

私は、リクトを知りたいと、思っていた。……今も思っている。

……でも知れば知るほど分からなくなってくる。

私より辛いはずなのに私の事を心配してくれるのは何故。どうして平気で居られるの、と。

——まるで恋する乙女のように、一人の男の子の事を考えていた私の所に誰か来た。

「黒歌さん」

障子越しに話しかけてくるのは今考えていた彼だった。

入っても良いかと聞かれ、部屋に入れる。

……どうしたのだろうか。

「……なんだかゴメン。……黒歌さんの前であんな事しちやつて……」

なるほど、あの時目があつたから……私は表情に出ていたのか。心配して来てくれたみたいだった。

でも——尚更それが分からなかった。

どうしてそんなに私なんかを気遣う事が出来るのか。

さつき辛い思いをしたばかりだというのに。

……今は中等部にいるという妹と、未だに向き合う事が出来ないよ  
うな自分の事を。

「……リクトの家族は良いね。……ちよつと私もお父さんとお母さんの事思い出しちゃった」

あの時、少し羨ましく思ってしまった。

……私にはもう白音しか家族は居ない。

その妹とも、今では話をする事も出来ない。

少し前までは私と白音と……お父さんとお母さんで四人一緒だった。

それが両親は私と白音を守るために目の前で斬られて……死んでしまった。

……二人で逃げた。逃げて逃げて、深い山の中に逃げて。

それから私と白音は厳しい生活を強いられて。

——……あの悪魔に出会った。

……私の家族は壊れて無くなった。

だから羨ましかった。……ああやってリクトが母親に抱き占められているのが。

不謹慎だと思うけど、それでも母親と触れ合う事が出来るリクトの

事が……羨ましかった。

「ごめん。……つまらない人情劇なんか見せちゃって」

「あ、や、ううん！　ちよつと懐かしく思っただけだから！　……だから気にしないで欲しい」

「語尾がないし……嘘だよね」

「……っそんなこと……」

気丈に振舞おうとしても……無いとは言えなかった。

それにしてもよく分かっている。

私はリクトの事をよく知らない。

……でも彼は私のことをよく知っている。

——なんでリクトは私なんかの事を気に掛けてくれるの。

再度私は思う。

分からない、知りたいと。

「……黒歌さん。俺はあの時言って無い事がある」

私の前の彼は居心地悪そうに、言う。

……きつと今日話していたことも関係有る話だ。

「俺は君に言わなきやいけないことがあった。——出会う前から俺は、黒歌さんの事は知識として知っていた」

黙って聞く。

きつと彼が私を思ってくれる理由だろうから。

「貴女にとってみれば気持ち悪いかもしれないけど……俺は貴女と出会える事が出来るという事を、心の支えとして生きてきた。……ずっとずっと生まれてきてから」

……ちよつと複雑だった。

同い年の彼が幼少の頃から私の事を知っていたということ。

私のことがずっと前から好きだった、という事には納得が行った。

……ならなんで私達親子が殺されそうになった時助けてくれなかったのか、とは聞けない。

彼もまた私と同じように幼かったから。……自分の正体についても知り得ない、ちよつと特殊な唯の子供だったから。

「……許して欲しい。そうでもしないと俺は狂っていた。……人外の

俺は狂って災いになっていたと思うから」

彼は謝った。

見ず知らずの誰かに自分自身の事を思われるのは……確かに気分が悪い。気味が悪い。

……でも、それで目の前の彼は救われていたのなら……少しは良かったと思ってしまう。

大いなる力には大いなる責任が伴う、と。

何処かで聞いた、そんな言葉がふと頭によぎった。

なんだつたろうか。……でもリクトはその最もたる例だった。

『万物万象をずらせる』ということはまさしく人には過ぎた力だ。

……だから彼は人外なんだろうけど、それでも弱い人でもある。

リクトは進んで化物バケモノになろうとは思わないだろうし……心根の優しいヒトでありたいと彼はこれからも思うだろう。

「いや、もう狂ってるのかもしれない。黒歌さんの事が好き過ぎて自分でも気持ち悪いくらいだから……」

自らを嘲るように彼は笑う。

ああ、なんとも人間らしい人外なのか。

今なら聞けるかな。聞けるだろう。

今なら分かる。……彼の事がきつと解わかる。

「リクトは……貴方はなんで私の事を助けてくれるの」

私は彼の顔を見て聞いた。

彼は目を丸くして、そして笑った。

自嘲の笑みではない。……とても儂い笑顔だった。

「——それは俺が黒歌さんの事が好きだから……助けられてきたから、今度は俺が黒歌さんの事を助けて上げたいんだ」

聞いて損をした。

心臓が早鐘を打って少し寿命が減った。

ドクリドクリと顔に血が昇って血管が少し痛んだ。

胸が痛い。答えを聞いてから何かに締め付けられたように痛くなつた。

——だから私はなんとも彼の事を想っていない。

——だから人でヒトじゃない彼が愛しいだなんて想って居ない。

——私はリクトの事を好きだなんて想っては駄目だから。

「……黒歌さん？」

「ごめんなさい。……ちよつと一人にして欲しいのにや……」

心配してくれる彼を部屋から追い出す。

……ああ、この感情は仕舞ってしまおう。

何時か私がちゃんと想いに応えられるようになるまで。

そうして翌日。

なんとも想えない彼と一緒に自宅に帰らせてもらった。

——今帰るべき家に。

奴良陸人が帰った後。

「まさか神器を異世界から取ってくるとは——本当に陸人は ”ぬらりひよん” じゃな！ 流石は儂の曾曾孫じゃ！」

「……まったく爺ちゃんは。……婆ちゃんと同じセイクリッド・ギア持ってるって知って泣いて頼み込んで貰うなんて。あいつもアイツでだけどき」

「……だってこれで瑛姫降ろせるって秀元が言ってたんじやもん……」

「お爺ちゃんのバカ」

「……ぐはあ」

「はっはっは……ま、でもいいじゃねえの。これで奴良組は安泰だろうしさ……そろそろ四代目決めるか？」

「……次は鯉伴と乙女ちゃんの子供って決めてたんじやろう？ お前はそれで良いんか？」

「いいって。……アイツと俺とでのんびり暮らすから。……そろそろ教育。パパさんやってみたいし」

「ハア……なんでお父さんこんなの何だろうねお爺ちゃん」

「……ワシも同感じゃな。何で儂の倅はこんなになっけしもうたん

じや。……瑛姫が降りてきたら雪麗と一緒に再教育じやなあ」  
「うおお、それは勘弁してくれえ……」  
——奴良組は今日も平和であった。



## デートが終わった日

話が終わった頃には既に作っていた昼飯は冷え切っていた。話すタイミングを間違えたと少し後悔だ。

家にやってきた白音ちゃん。

彼女に俺はオカ研の誰にも言っていない秘密を話したのだ。

「……と、まあそんな具合で俺は自分の正体を知って、今はリアス・グレモリーの眷属悪魔になってる」

話したのは次の事だけ。

自分は、妖怪でもなく人でもなく、悪魔でも天使でも神や仏でもない ” 揺らぎ ” という概念そのもので、人外だということ。

そして俺は妖怪を総べる主である ” ぬらりひよん ” ——つまり悪魔勢で言うところの魔王に値する血族だということ。

それから両親は黒歌の事も自分の事も知っているとということ。転生したとかそういう話は彼女にはしていない。

言っても多分混乱させるだけだろうから。

それにしても……元の話はなんで黒歌の妹が泊まる事になったと両親に伝えただけで納得するのか、という話だったような。

……素晴らしく脱線しているな。

まあ、いつか伝えなきゃいけなかった事だし良い機会だと思っておこう。

「なんだか複雑な気分です。姉さまのために眷属をやっているだなんて……」

「そうだろうな。捉え方によったら俺は部長の事を利用してるんだし」

「……はい」

白音ちゃんはこくりと頷く。

心中は穏やかではないだろう。

俺は、彼女の……自らを救ってくれた恩人を利用している。

全ては自分の姉、黒歌の罪を清算させるためだ。

「で、白音ちゃん。……できれば今日の話は ” 小猫 ” としてじゃ

なく”白音”として胸の中に収めてくれないかな」

「……わかりました。この事は胸の内に秘めておきます……でも何時かちちゃんと皆に話して下さい」

「うん、わかった」

よかった。納得してくれて助かった。

……今ここで部員達にバラされたら練っている計画が頓挫する。

黒歌がもじもじと、白音ちゃんに小さい声で言う。

「……ありがとね」

「ううん。折角お姉ちゃんの罪が晴れるのに、邪魔するようなことしても意味無いから」

「うう……しろねー！」

「……でも暑苦しいので離れて下さい」

うう、と情けない声を出す黒歌。

それでも、白音ちゃんも口ではああ言ってるけど、二人とも楽しそうだった。

俺はそんな姿を見て、二人が外聞を気にせず暮らせるよう頑張ろう、と再度決意。

「先輩」

「うん、何？」

しくしく、と今度は泣き真似をし始めた黒歌を気にも留めない白音ちゃん。

どうしたのだろう、と思っていると彼女は正座をして、姿勢は綺麗なまま前へ倒した。

「赤龍帝で白龍皇で人外のお義兄さん。不束者のお姉ちゃんのこと……宜しく願います」

「——ちよ、ちよつと白音！」

これには黒歌も俺もビックリだ。様になっている姿だが——でも、何時までもこのままでは可愛そうだった。

「良し、任された。……妹さん。俺がお姉さんの事、ちゃんと幸せにしてみせます」

言うとう白音ちゃんは体を起こしてくれた。……まあ、言われなくてもだけれど……コレで妹公認にして貰えたわけだ。

ふと黒歌の方を見ると目が合って、顔が紅くなっていた。次第にわなわなと震えはじめて、

「わああああん！ リクトのバカああああ！」

叫んで逃げて行った。

体を起こした白音ちゃんは、自室へと逃げていく姉の姿を見てクスクスと笑っていた。

——この後機嫌を損ねた黒歌が、白音ちゃんの恥ずかしい話、俺の黒歴史的な妖怪変化の姿を話して一騒動あり。

俺が澁々ながら妖怪変化する事になったり、白音ちゃんがガチで黒歌に殴りに掛かろうとした事が有った為、時間が過ぎ。

少々慌ただしかった一日が終わった。終わった。

——さて此処で問題です。

Q. 今日は何の日でしたか。

A. 黒歌とデートの日。

……デート……。

白音が家にやってきた日の夜。

あの子がお腹が膨れるまで私の作った料理を食べてくれた後。

私は、彼が「さあ、寝よう」とした所で、もぞもぞとベッドの中に入り込む。

「んん？」

「えへへ」

寝室は暗い。

でも私にはリクトの顔がしっかりと目の前に見えていた。

猫で悪魔の私にはしっかりと見えている。

「黒歌さん何してらっしゃるんですか。此処俺のベッドナンデスケド？」

語調が段々と片言に。

……私の格好をみてトギマガシしてるのだろうけど。  
言ってもちよろつとだけ寝間着の胸元を肌蹴させてるだけなんだ  
けどな。

こういうリクトの初心な所も私は好きだ。

「うん知ってるよ——でも今日一日は恋人なんでしょ？ ……だった  
ら恋人らしいことしても良いんだにやん……にやあ」

「うっ……確かに言っただけどさ……」

もう私は素直になるって決めたんだ。

——それに彼は今日、正真正銘私の恋人だ。

私は我が侘な猫だもの。……このヒトは私のだ、って匂いを付けて  
もいじやにやいか。

「……えつと黒歌さんにするおつもりで？」

「何って……」

少し彼の顔に近づけて言う。

……猫って発情期があるんだよ、って。

私はそれをずつとずつと仙術で気を散らして我慢してきた。

今日リクトを好きになった時の事を思い出して……ちよつとタガ  
が外れちゃったんだもん。

「……だめかにや」

「うう……嬉しいけどやっぱり駄目。……一回許したら溺れちやいそ  
うだから……」

……反則だ。それを言われちゃったら私が悪いみたい。

仙術でその気を散らして、自分の少し荒い呼吸を落ち着かせる。

ああ、なんだか冴えてきた。……コレが俗に言う賢者モードという  
奴だろう。

なんでこんな気持ちにさせるかな。

……まったくこの馬鹿リクトは。

「へタレ」

「くう……襲いたいけどそれをやったら負けた気がするんだから仕方  
ないじゃん！ でも襲われるのも負けた気がする……っ！」

負けてしまえば良いのに。負けちゃえよー。

あ、でも嫌がるリクトを無理矢理するのも趣が……って駄目駄目。また発情してどうする私。

うーむ。……妥協案とするなら……そうだ。

「じゃあ一緒に寝ていい？ 明日からも好きな時に一緒に寝てくれる？ ……ぎゅっとして一緒に寝るだけでもいいから、一緒に寝ちゃ駄目かやあ……」

じつと、彼が目を背けるまで私は彼の目を見続ける。

彼も夜だから妖怪の血のせいで夜目が効く。だから私がこうして見ているのも分かってるはず。

「………うん。でもちよつとでも襲ってくるようなら妖怪変化するからね？」

「げ……」

「……黒歌？ げ、ってなに？ 何でいったの？」

だ、だってあの姿って……。

「……リクトが女になる……」

「………俺もなりたくないけどさ。……入れる棒が無いと、ほら………そこまでしてならもう仕方がない。

1 / 4が雪女1 / 16がぬらりひよん。

妖怪の雪女の血が強いから、必然的に妖怪変化はそれ相応になる。

——ちなみに雪女は妖怪の雪女と魔獣の雪女で二種類いる。

妖怪の方が人形で伝承に残る美しい女性。

魔獣の方が……ヒマラヤ山脈で見つかるソレの類。

リクトのお婆ちゃんも本当は可愛らしい美少女の雪女だった。

あんな感じになるかと思いきやリクトの場合はアレだ。……ヤバ

イくらい色っぽい。

妖艶とはまさにあの事かと思う。

波打つような黒い髪の毛で中性的な顔立ち。

切れ長の色っぽい目つきと金のぐるぐるの瞳。

それでいて私くらいかそれ以上に出る所も出て引っ込んでる所も引っ込んでるから冷たい雰囲気も少し柔らかく感じる。

あの姿はホントに駄目だ。

今日改めて見て……私も白音も新しい扉を開きそうになっちゃったくらいだもん。

「わかったにやあ……隙について襲うのは諦めるにやあ……」

「この猫はやっぱりそのつもりだったか……!」

……でも最近はそのような人用にあるんだよ？　なんかそれっぽい装備が。

ちよつとだけだけど……女のリクトでもいいかなって思う私はどうかしてるのかにやあ？

「……なんか寒気が。風邪か？　……もういいや、寝よう。白音ちゃん来たから明日も色々買いに行かないとだし」

「……あ、リクト」

「うん、な——」

——愛しい彼に口付けを。

私の初めてのキス。

軽くて触れるだけの子供っぽいキス。

……これくらいなら許して。私の未来の旦那さま。

「……おやすみ、リクト」

「…………おやすみ」

私は彼の鼓動を聞きながら。

ヒトである彼の温かさに包まれて眠った。

——早く私を助けてね。

——愛しい愛しいマイダーリン。

起きたら白音に怒られた。

……私と一緒に寝たかつたらしくて、拗ねてた。

ごめんね白音。……でもずっと我慢してたんだから許して欲しいにゃん♪

# 月光校庭のExtraCalliburne やつちやつた日

今日も今日とて悪魔稼業。もとい部活動。

全ては黒歌の罪を失くすため。全ては自らの想いを遂げるため。

俺、『どつちつかずの人外』こと奴良陸人は、今日も今日とて愛猫と共にオカルト研究部に来ていた。

黒猫を膝の上に置いて小猫ちゃんの隣に座って。

そんな具合で自分で作った菓子の出来を確かめている。

まあ、納得できる出来だったけど。

「ねえ、リクト。……ちよつと聞きたい事があるのだけど……」

「はいはい、何でございましょうか？」

我が部の部長さん、リアス・グレモリーは気まずそうな顔をして言う。

はて、何事であろうか。

ライザーでの一戦について？ それともイツセーに発破掛けたのが自分って事が伝わった？

まあ何でも良いけれど……ちよつと後者なら困る。

「えつとね。ちよつと野暮な事を聞くのかもしれないけど……」

部長はちらり、と隣でもきゅもきゅとケーキを頬張る小猫ちゃんを見る。

ああ、なんだろう。其処はかたく嫌あな予感がするのだが……。

……朱乃さんにいれて貰ったお茶で喉を潤しながら、俺は部長さんが口を開くのを待っていた。

「——小猫とアナタってデキてるの？」

「ブツ——！」「——ンーンツツ!!」

俺は茶を嘔き、小猫ちゃんはケーキを喉に詰まらせた。

……鼻にお茶が入って痛いです。……というか部長さんそれはイケない。

あと御免なさい。

綺麗なお顔がお茶まみれで素敵です——ぎにゃあああ！

膝の上に居た黒猫も被害を被ったようで、俺は思いつきリツメで太腿の内側をぶっ刺された——というか痛い！

「ま、まあ仕方ないわよね、私に変なこと聞いたのだし……主に向かってお茶を噴いた事は、うん。一応不問にして上げるわ……」

まさか顔に掛けられると思っていなかった、と漏らす部長さん。

お茶の滴る良い女、な訳が無く、面白そうに笑っている副部長からタオルを貰って顔を拭いていた。

「で、どうしてそんな事を聞くのさ。……部長」

「……何故ですか」

もう一度お茶を朱乃さんから貰い、三人とも一息。

俺と小猫ちゃんは魔力で服を再構成した部長さんに改めて聞いた。

え、何を言っているの、と部長さんは驚きに目を丸くして言う。

「……まさか無自覚だったの？ 二人とも……」

うんうん、と小猫ちゃんと顔を見合わせてから頷く。

「はあ……違うなら違うで良いのだけど。……リクトはこの部に入る前からお菓子作って上げてたみたいだし、小猫も甘んじて受け取った。……それにリクトが説得したから小猫は仙術を使うようになったみたいだし……何よりも小猫がリクトの家で暮らしたい、って私に直接言ってきたのよ？ そういう関係だと思っても仕方ないじゃない。……現に皆思ってるのよ？」

つうーつと背筋を何かが這うような感覚がした。

それから木場と朱乃さんに途中で入ってきたイツセーとアーシアに天野。

皆がみな、顔を見るとソレらしい反応をしてくれる。

あふん……それ、マジですか。

……ちよつと整理しようか。

お菓子を上げていた↓未来の義妹と仲良くするため&食べれるものは貰っておく小猫ちゃん（餌付け？）

仙術が使えるようになった↓お姉ちゃんの説得及びなんやかんやあった（俺のおかげで小猫ちゃんの心境が変わるものがあった）



小猫ちゃんが家に来る↓姉と一緒に暮らすため（小猫ちゃんから言いだすくらい同棲しちやいたいたいような仲）

ああ、コレは駄目だ。

妙に納得できた。

……ちよつと黒猫さんの反応を見るのがコワイ。

「えつと……違いますからね？ いや、ホントに。……ほら、小猫ちゃんも何か言ってる」

「え、ええ。……私とリクト先輩には何もありません」

アレ。

なんで皆そんな「照れ隠しだな、コイツら」みたいな顔してるんですか。

……やだ、何でこんな空気なの。

「よしんば。仮に違うとしましょう……だから教えて頂戴。——リクトの好きな人って誰？」

ちよつと待って——それは言えない！

確かに居るって何時か前に言った気がするけど……！

……小猫ちゃんの方を見ると、ヤバイって顔してた。

「言えるわけない。……といふかなんで皆そんな納得したような顔してんのかな……ッ？」

もういいよ的な顔に、面白そうに笑ってやがる。

後はアーシアとかが赤面してる。

「いや、大丈夫ですから。俺、ちゃんとわかってますって」

「僕も応援してますよ、先輩」

と、イツセーと木場。

「まあ、いいんじゃないの？ ……ちよつとそういう趣味が有るとは思ってたなかったけどねえ」

「こ、小猫ちゃん！ 頑張ってください」

天野にアーシア。

「……どうします、部長。アレ、本物みたいですよ……」

「……そうね。私もイツセーに……小猫みたいに負けてられないわね……」

そして部長の副部長の二人。

……小猫ちゃんの方を見ると、プルプルと何かに堪えながら顔を真っ赤にしていた。

ああ、なんでこんな事になったのか。

「だから違うってのー!」……違います!」

とりあえず否定。

ただ理由は話せない。

……違うとしか言わなかったから、誤解を解くのに暫くかかりそうだった。

この日家に帰ると黒歌がプンスカと怒っていたり、小猫ちゃんがスライディング土下座で謝っていたり。

なんだか小猫ちゃんらしくない姿を見たりとかで、精神的な疲れを慰めて貰うように、黒歌を抱き占めてこの日は寝た。

……白音ちゃんが謝る姿（綺麗なスライディング土下座）が、妙に脳裏に残っていた。

翌日。

朝起きたらちよつとした一騒動があったが……そんな事はさておき。

先に起きて一時間近く待っていたらしい、白音ちゃんの腹の虫を抑える為、朝食を作り、ゆつたりとした朝食を取る。

「……で、なんで起きて来てくれなかったんですか」

「いやあ……あはは」「にやはは……」

顔の赤い黒歌と顔をあわせて苦笑い。

「なんで笑って——ってまさか朝から!」

「……し、してないしてない! というか初体験もまだだつて!」

「うん……まだしてないよ。リクトがヘタレだから……」

ぼそぼそと目玉焼きの黄身をつつく黒歌さん。

語気は弱く、ちよつと保護欲が湧きそうな反応で抱きしめたくなる衝動にかられる。

……いまそんな事したら嫌われる確信があるから止めておく。

「え……じゃあ何があつたんですか？」

「……………揉まれた」

「はいっ」

黒歌がポツリと洩らす。

……………はい、ごめんなさい。

「……………俺が寝ぼけて……………黒歌の胸を」もう、言わないでよ……………恥ずかしいんだから」……………ごめん」

「……………」

小猫ちゃんは二度瞬き。

そして呆れたように吐き捨てる。

「とりあえず……………馬鹿ですね、二人とも」

「うっ……………」

……………そりや、何時かするだろうなあ、と思っていたけれども。

なんだかちよつと不完全燃焼と言うかなんというか……………最後に食べようとしていたおかずをついっかかり途中で食べちゃったような、そんな感じ。

黒歌も黒歌で起きたらちよつと危ないレベルで発情してたし……………って何を言ってるんだか。

結局へタレな俺が悪いねん。……………少し身がお堅い俺が悪いねん。

ハア、と小猫ちゃんは頭を抑えて溜め息をついた。

「もう、早く本調子に戻って下さい。……………今日中にです。今日中に」  
「……………はい」

「……………あ、そういえば今日は使い魔を契約しに行くとかなんとかか。ちよつと考えておいて下さいね、お義兄さん」

「了解です……………」

今日のオカルト研究部の活動は使い魔契約。

……………必然的に飼ひ猫扱ひの黒歌は部室に残る事になり。

俺も黒歌も妙にダウナーな精神状態だった。

小猫ちゃんも昨日の事があつてか、登校中溜め息が多かった。

——使い魔ゲットだぜ！——

……この言葉が頭に残る。

あのパチモンマスターめ……永年の少年があんなオツサンになつてしまうのか、とかちよつと思つてしまったじゃないか。

——此処は冥界某所にある使い魔の森。……トキワ○森とか言つちやだめ。

俺はこつそりオカ研のメンバーと別れ、強そうな気配のする方へする方へと歩いていった。

『あ、相棒？　ちよ、ちよつとこの先には行かない方がいいんじゃないかなあ……』

『……ドライグ？』

『……や、なんでもない……』

久しぶりな気がする頭に響く二天龍の声。

ドライグの慌てる声に、アルビオンの訝しむ声。

ははあん——なるほど。やっぱりこの先にいるのか。

まあ、これから其処へ行くから楽しみのためにも聞かないでおこう。

……しばらく暗い森の中を進んで行く。

黒い幹の樹林がずっと続き、もうしばらく歩いているとそれが途絶えた。

着いたのは切り立った崖の上。

目指すのは此処の下にあるそれなりに規模の大きい洞窟だ。

『あ、相棒！　よせ、止めてくれ！』

『なるほどそういう……。よし、薄汚い雌狐……じゃない雌龍に会いに行きましょうか。……フフフ』

『——ぜ、絶対この世界のオレと奴も何かしらやってるから！　後生だリクトツ！』

白いのには全面賛成。赤いのには無視。

ずっとアルビオンは言っていたんだ……雌狐ならぬ雌龍に会いに行く。

ついでに俺も気になってたし……野次馬根性丸出しで。

……さてと。

『お、おいリクト？ 嘘だよな、嘘に決まってるよな！ な?!』

『……フフフ……これで積年の恨みが……!』

まあ、俺は礼儀正しいのだ。

だからお宅にお邪魔する時は……ちゃんと尋ねてから入る。

「ノックしてもしーし」

——地盤をずらして俺は大きめの在宅確認を行った。

「あ、リクト！ 何処行つてたの！ 皆探したのよ！」

「ちよつと気になった奴がいたんで追っかけてました……無事契約したんで、もう俺の使い魔は大丈夫です」

「そう。つまりイツセーだけが手に入れられなかった……つて天野さんも一応使い魔だからこれで全員ね」

「……何を使い魔にしたか聞かないんですか？」

「嫌よ。なんだか聞いたら卒倒しそうな気がするから。……お願い言わないで」

「全員ゲットだぜ！ ——つてあら？ ティアマットの反応が……消えた？ いや、また暴れに行ったのか……」

『……』

## 怒られる日

イツセー以外が使い魔を手に入れた——いや、イツセーの場合は天野と使い魔の契約してたからこれで全員使い魔が手に入った事になるか。

まあ、そんな事はともかく使い魔の森から帰ってきて二日後の今日。

俺はオカルト研究部……ではなく兵藤一誠後輩のお宅にお邪魔していた。

「どうもこんにちわ、イツセー君のお母さん。しょうもない部活で先輩やらせて貰ってます奴良陸人です」

「ちよつとリクト！　しょうもないだなんて言わないで！」

「まあまあリアスさん。怒ったら皺が増えるわよ？　——どうもウチの馬鹿息子がお世話になっていきます。今日はゆっくりしていつて下さいな」

「後で覚えてなさい……」

イツセーのお母さんに挨拶を済ませて彼の部屋に上がる。

おおこわいこわい、と駒王学園の紅い悪魔に戦々恐々としながら中に入ると、なんかちよつとイカ臭かった。

腕の中の黒猫さんが顔を顰めさせていたので、結構きついんだろう。……小猫ちゃんも鼻を押さえていた。

臭いと臭い分子をずらして換気。……うんすつきり。

イツセー君ちよつと自重しようね、と切実に思った。

「さて、今日は部室……というか旧校舎が一斉清掃の日だからイツセーの家でこの前のレーディングゲームの反省会よ」

「……とかいいつつ手元に見えるイツセーのアルバムが違うって仰ってますよ」

「茶化さないでくれるかしら、リクト。……これは、ほら。イツセーの腕が龍の手になったからね？　……そういうわけよ」

「あらあら。どういうわけなんでしようか、部長」

「だから……そういうわけよ。……つてもう！　朱乃は茶化さないで

！」

一通り部長を弄ると、アーシアと天野を引き連れて部長さんはイツセー君の赤裸々な過去を見始めたので、イツセーが泣き叫ぶのを無視して自分達も赤龍帝の普通な経歴を見させて貰った。

自分が言うのもなんだが、イツセー憐れなり。

「ちっちゃい頃のイツセーちっちゃい頃のイツセー……」

「はわわ……」

「……ごくり」

ちよつと危ない人たちが三人ほど見えたけど気にしない。

でも特に天野がヤバイ。……危ない怪しすぎる生唾を飲むな。

「……勘弁してくれ……」

「良いではないか良いではないか！」

「やめてーお代官様ー！　ってなにやらすんですか！　ホントマジで先輩止めて下さいー！」

「うん、それ無理♪」

某サバイバルナイフな宇宙人の真似をするとイツセーは崩れ落ちて嘆く。

そんな様子を木場が見て笑っていて、彼は開いていたページに目を落として固まった。

「……イツセー君。この子は誰かな」

「あ、ああ……確か前近所に住んでいた子。よく遊んだ覚えがあるよ。……それがどうかしたか？」

憎々しげに、木場は顔を少し歪めて、写真の中。二人の子供が並んで写っている後ろ……親御さんらしき人を指をさして言った。

「……これは聖剣だよ、イツセー君」

「せい、けん？」

それ以上は木場は何も言わない。

……ただ一つ、写真に写りこんでいるソレを——その手にある西洋剣を見つめていた。

——木場の様子が変わり始めたイツセー宅訪問から後日。

きたる球技大会の日のために、オカルト研究部は学生らしく部対抗の競技種目の練習に励んできた。

そして球技大会の日。

ドッジボールでは、イツセー君と俺が狙われそうになるも、俺は何故か当てられずイツセー君が集中リンチになるといつた事があつたり。

また、木場の学園でのモテ具合を嫉む男子が決死の覚悟で、ボーっとしていた彼に向かって投げたボールをイツセーが庇い……観客の腐女子が歓喜したり。

庇つたら庇つたで当たり所が悪く、球がたまに偶々当たったり。

それから……

「……コレで少しは目が覚めたかしら」

「すみません部長。もう球技大会も終わったので帰らせて貰います。失礼します」

「祐斗ー」

……木場祐斗が部長にらしくない事で怒られて、頬を打たれたりなんて事があつた。

イツセーが聞く。どうしちまったのか、と。

木場は何か決意した顔で答える。

「僕は聖剣を破壊するために生きている——聖剣エクスカリバー……憎々しいあの聖剣を破壊するために……」

そのまま木場は去っていった。

『エクスカリバー』

——木場祐斗が憎み、恨み……そして憧れていた聖剣。

彼の剣はブリテンの王——アーサー王が持っていたと伝承では残っているが、世界の裏の歴史でそれは七つに別れた。

『破壊』『擬態』『天閃』『夢幻』『透明』『祝福』『支配』

……七つの特性、七つの聖剣となって、内訳四本を神の陣営……教会の武器として、対悪魔用の究極兵器として今現在使われている。

「……ただ、少し前その聖剣を扱うため、扱おうとするために各地から



素質のある子供たちが集められた。……ただその計画で集められた子供達は全員に素質は無く不良品とされ——処分された」

「……。……それが ” 聖剣計画 ” ……」

「祐斗はその被害者の一人最後の生き残りなの。……私はあの子を助けた時、聖剣に振り回されない生き方を望んだのだけど……やっぱり難しいものね」

「……そっかそれでアイツ……」

球技大会が終わってそれとなく、イツセーと俺とで聞いた。

……まあ、木場が聖剣に恨みを抱えていたのは俺もイツセーも修行の時から知ってたけれども。

「さて、帰りましょうか。……今日はもう皆疲れているようだから幾ら悪魔とはいえ、明日のために夜はぐっすり眠るのよ?」

そうして眷属を思うリアス部長の言葉で短い部活動は散会となった。

「……さて、白音ちゃん。明日辺りちよつとした事が起こるよ」

「……唐突になんですかお義兄さん?」

家に帰ってすぐ、テレビをつけた白音ちゃんに俺は声を掛けた。

それともいうのも……まあ、思惑通りに来てくれたのと、少しすることが出来たからだ。

……まあ、認識させる方が先だろう。

「あ、なるほど。……白音、エロ兵藤の家辺りまで ” 円 ” してみたらかわかるにゃん」

「……。……物凄く嫌な気配がしますね。……身体が焼けるような嫌な気配……」

「何かわかる?」

「ちよつと待って下さい。……これは……聖剣ですか?」

「正解。……それもとびきりヤバイ聖剣。……なんでグレモリーの領地にそんな戦略兵器を持つてくるかな、ってね」

……原作で知っているとはいえ、不確定要素の自分がいる事で来ないかも、と思っていたんだけど。

「……何かしらこの近くであった。もしくは何か教会側で起こった、ということですか」

「イグザクトリ——いてー！」

「指パッチンしてないで手を洗ってくるにゃん」

黒歌さんに頭を叩かれたので手を洗いにいくとしよう。

洗面所から帰ってみれば二人とも難しい顔をしていた。

「はい、二人とも。判断材料も少ないし、俺が話を振ったとはいえもうこの話は止めましょう」

「……うん、そうしよっか」

「……はい」

不意に、ぐう、と白音ちゃんのお腹が鳴る。

ちよつと顔を赤くさせてそつぽをむいた。

……フォローしてあげよう、白音さん。

「あー、お腹空いたなー黒歌さんの料理が食べたいなー」

「……うにゃあ……」

「ふふつ……白音のお腹の虫にご飯をあげないとにゃー」

お姉ちゃんのアホ、バカ、と呟く白音ちゃんの隣でちよつと一眠り。

……黒歌に、ご飯が出来た、と言われて起こされるまで惰眠を貪った。

目の前にあるのは布で巻かれた十字架のような大剣。

悪魔の自分がアレは脅威だと告げるが、俺自身にはさほど害にはならないというのが分かっている。

——球技大会の翌日の事だ。

急に部室に集まれとお達しがあり、集まった次第である。

……大体わかっていただけではあるが、どうやら聖剣エクスカリバーに関しての事らしい。

「ふふふ……甘く見られたものね。——誇り高きグレモリーが墮天使に与くみしていると、そう教会は仰りたい訳ね」

「可能性は無い、というのがお偉い方の意見だ。……私個人としての意見ではない、と理解していただきたい。……それではそのよう

に頼む」

「ええ。判ったわ」

私達に関わるな、と念を押し、メツシユの入った大剣を背負う彼女、ゼノヴィアは席を立ち、同じくイツセーの幼馴染の紫藤イリナも続く。

そのまま部屋を出て行くのかと思いきや、二人はアーシアの目の前で立ち止まって口を開いた。

「……やはり元聖女のアーシア・アルジェントか。まさか悪魔になっていたとはな。……しかし未だに主を信仰しているようだ」

「え、悪魔になったのに信仰してるわけ無いでしょう？」

「いや、私はそういう ” 臭い ” に敏感でな。——どうなんだ」

ゼノヴィアの問いにアーシアはビクリと体を振るわせて答える。

「私は……捨てられないだけです。ずっと信じてきたものですから……」

「……そうか。ならば今すぐ私達に斬られるといい。堕ちる所まで堕ち、例え罪深い存在になろうとも主ならば許してくれるだろう」

柄に手を掛けた。

小さくアーシアからは悲鳴が漏れる。

「いい加減にしろよ……ッ！ さつきから聞いていれば勝手なことばっかり言いやがってッ！ アーシアは——」

「イツセー君、ちよつとゴメンよ」

立ち上がったイツセーの首筋に木場は、自分が創り出したらしい短剣を押し当てると、イツセーが崩れる。

木場はイツセーを支えて、ソファーに座らせた。

皆が彼の急な行動に驚く。

それは俺もだ。

俺の知る知識では起こらなかった事。

何が彼をそうさせたのかは分からない。

……ただ、木場は静かにその目に怒りを携えていた。

全員が彼の行動に驚く中、当の本人はさも平然そうに口を開いた。

「イツセー君には少し眠ってもらいました。……部長、少しご提案が

あるんですがよろしいですか？」

「……祐斗、後で色々聞かせてもらおうわ。……それで、なにかしら」

その問いに驚き固まっていた部長は一度目をつむり、表情を取り戻し聞きかえすと、剣を消して答えた。

「……二人と決闘、いや手合せさせて貰いたいんです。……僕たちに勝てないようじゃ、”神の子を見張るもの”のココビエルから、エクスカリバーの破壊も奪取することも出来ないと思うので。——教会の戦士。君達はどうかかな？ 僕たちと手合せしてくれないか」

「遠慮をさせて——ッ!？」

「!？」

いつの間にか彼女ら教会の戦士二人の首元には四方の床から生えた剣が突きつけられていた。

……剣の生成の早さが前の比じゃない。

それにどの剣も練度が鍛造ではなく鍛造レベルでの業物だ。

触れているだけでも当てられている首筋からはつう、と血の筋が流れていた。

「……今のに反応出来ないようでは、二人だけで墮天使の幹部を倒そうだなんて夢物語だよ。……それでよく聖剣使いを名乗っていられるね」

「っ！ 貴様ア——ッ!？」

「ゼノヴィア！ ……お願いやめて！」

ゼノヴィアが叫び少し動いた。

ぐい、とさらに剣先が喉に押し付けられ、血が先ほどと比べ物にならないくらい流れ出る。

「——祐斗！ それ以上はやめなさい！」

部長が待ったを掛けて、ゼノヴィアとイリナに向けられていた剣群は木場の手によって消えさり、イリナはゼノヴィアの元に掛けよつた。

「……ごめんアシアさん。そいつらを治すのは不本意だろうけど、彼女達を治して上げてくれないかな」

「い、いえ……とんでもないです」

アーシアは戸惑いながらもゼノヴィアに駆け寄り、傷口にトワイライト・ヒーリングを掛けていく。

「――部長すみません。でも今のは不本意です。……それで、紫藤さん？ 手合せ受けてくれないかな……？」

「何を言ってる――わ、わかったわ……引き受ける」

「ま、待てイリナ！」

治療を受けているゼノヴィアは傷口にアーシアの回復の緑光を当てられながらも、自分の相方に待ったを掛ける。

「ありがとう。……これでようやく一つ目的が果たせるよ」

「祐斗……もしかしてあなた」

その返事を聞いて木場はゆったりと、微笑み呟く。

呟いた言葉の意味を推し量ることが出来るのは事情を知るオカルト研究部の部員だけだった。

## 手合せする日

会談の後、オカ研と教会の二人は場所を移した。

目を覚ましたイツセーには部屋を出る時に何が起こったのかを話し、今はローブを脱いだゼノヴィアに対して鋭い目つきを向けている。

ただ、あの顔は「ああ、あの戦闘服……イイな」とか怒りながら考えている顔だ。

これから手合わせをする、という所でそんな事を考えていたイツセーはぶれない。

俺は小猫ちゃん「アイツぶれないね」的な話をしていた。

「さあ、手合せ願うよ。……エクスカリバー壊しちゃったらゴメンね」「フン……貴様に出来るものならな。だが、手合せをするからには名を名乗り合うか。私はゼノヴィア……悪魔よ、名は何と言う」

木場とゼノヴィアが双方共に剣を構える。

「……木場祐斗。聖剣計画の生き残り。——君達の先輩だよ」

「……なるほどな。君から感じられるその殺気の原因が分かったよ……じゃ、始めようか」

木場の剣は無骨で飾り気の無いブロードソードだ。

強度だけは相当なものに見える。

……何をするのは皆目見当つかないが、破壊の名を冠する聖剣相手にそれで大丈夫なのか、と味方ながら思ってしまう。

そして二人は交差した。

接触した剣同士が火花を散らす。

弾き合い、押し合い、なぎ払う。

……破壊の聖剣と名乗るだけあって少し、少しづつブロードソードの方が耐え切れなくなり罅が入っていく。

が、寸分変わらないブロードソードを同化させるように補強・強化している。

それに加え今度は刀身に魔力を倍込めていたようだ。

……それから打ち合いは続く。

今度は木場がエクスカリバーの全体に高速で打ち込み始める。火花が散りすぎるあまりに火花が炸裂しているようにも見えた。するとゼノヴィアが突如として大振りに聖剣を振り、木場の攻勢を殺ぎ——そして剣先を地面に突き刺し『破壊』する。

「くっ——！」

「フン——」

ゼノヴィアを中心にクレーターが生まれ、二人は離れた。

見ていて少しハラハラしたけど……怒りに身を任せず、本来の戦闘スタイルで戦ってる。

……ただ、すこし動きがぎこちなかったのと、沢山の剣で翻弄するという事はしなかったが……それくらいだろう。

——もつとも、木場の狙いは大まかにだが判ったから、それも納得できたけど。

「中々、やるよう、だが……ふう。……疲れてきたんじゃないか」

「まだまだ、……と言いたい所だけど、これから紫藤さんともやりたいからね。この辺りで幕引きさせてもらうよ。……ただ一つ、手合せした仲としていいかな」

「……なんだ」

木場が剣を虚空へと消し、聖剣に聖骸布を巻くゼノヴィアに声を掛けた。

「——アシアさんは僕の仲間だ。例えば教会が彼女の事を魔女だ、悪魔だと言っていたとしても……君達が彼女に、僕の仲間被害を為そうとするならば僕は命を賭しても君達を殺す」

「……宣戦布告ととつてもいいのか、それは」

「いや、何時か君とは決着を付けたいと思っっているけどね。……とりあえず謝ってくれないかな。アシアさんは例え殺そうとしてきた人間でも、目の前で傷つく人を見て救いたいと願う、願える事が出来る——君達の言う都合に合う様な紛い物の聖女なんかじゃなく、彼女は本当に『聖女』だ」

イツセーとアシア、そして天野が息を呑む。

二人は木場の行動に対して。一名は何時かアシアの尊さを理解

していたモノ。

……ついさつきまで、アレだけ身の回りを省みない行動をしていた木場にどんな心情的な変化があったのかはわからないが、木場は仲間想いな奴に戻っていた。

「……一応、礼と謝罪は言わせてもらおうとするよ。……だが、聖女という言葉は残念ながら素直に認める事は出来ないなのでな。すまない」「そうか。やはりそれが教会のやり方……いや、それでいいよ。——イツセーくんもそれでさっきの僕の事は許してくれないかなっ！」

一瞬間を歪めたが再度普通の表情に戻り、イツセーに対して木場は問う。

「ああ、いいぜ木場！俺が言いたい事は全部言ってくれたからな！

……後で何があつたか聞かせろよ！」

対するイツセーは、キザな野郎だ、と呟きながらも満更嫌そうではなかった。

そして木場も、いつものイケメンスマイルを浮かべて返事とした。……部長も少し胸に痞つかえていたものが取れたようで、安堵の息を吐いている。

俺も、復讐に捕らわれすぎた木場の姿を見て居たくはなかった。

復讐をするのは構わないと言ったが、やはり見ているとどうしても止めたくなるのが俺の性だ。

……いや、人外でどつちつかずである自分に性さがなんて有って無いようなものだけだ。

復讐はやり終えた後、どうしようもない喪失感が残る。

復讐を支えに生きては駄目だ……と思う。

……果たせばきつと己の死を望んでしまうから。

そんな心情である俺は、木場に近づくイツセーとアジアを見る。

笑って近づいてくる木場は——その場で倒れた。

木場のことを呼ぶ声が旧校舎近くの広場で響く。

「——なに、心配することはないさ。ちよつとした魔力の使いすぎと疲労だよ」



「……よかったです……」

俺の診断結果に安堵するのはアーシア。

同じく続くようにオカ研の皆が安堵した。

——にしても本当に『理解』してしまうとは思っていなかった。

起きればきつと使えるようになっていいるだろう。……復讐を違う

アプローチで果たすつもりか。

……いや、彼等の願いを叶えるため。俺があこの合宿で言ったように

『仲間を守るため』なのか。

まあ詳しい事は本人が起きてから聞く事にしよう。

まずは側に立っている人間への用事を済ませよう。

「で、イツセーの幼馴染さん。木場が倒れたし、俺と試合うか？」

「げ……」

なんでイツセー「げ」って言った？ ああん？

……後であこの合宿でやった奴をやってやろう。

いや、なんで皆そんな可哀想な顔でイリナさん見てんのか。

俺ってそんなに皆にとって悪魔か何かか……って悪魔だわな、う

ん。

「ハア……で、紫藤さんであってるよな？ どうする？」

「私としては、その……イツセー君とやりたいかなーって」

「えっと、マジですか？」

モジモジと答える紫藤イリナ。

……大概乙女チックな奴だな、と思いきや所がどっこい。

「ええ！ だって久しぶりにあつた幼馴染が悪魔になつていいるだなん

て！ これはもう私が救<sup>殺</sup>つて上げないとダメよね！」

「……」

イツセーは啞然。

空気が一気に残念になった。

……なんだかんだと言いつつ、結局手合わせをやり始めるイツセー

は良い奴だと思う。

いつの間にかドレス・ブレイク覚えてやがって一騒動あつたが、聖

剣に少し斬られたイツセーの負けで終わった。

木場が目を覚ました頃には既にイツセーの試合は終わって、二人は帰っていた。

まあ教会の上の連中に今回の試合の事は一切伝えてもらわないようお願いし、今日の所は手打ちにしてもらえたので大きな問題にはならないだろう。

場所は移って再度オカルト研究部の部室。

木場が部長の前に立ち、黒猫を抱いた俺と小猫ちゃん、アーシアと天野に挟まれたイツセーがソファアに座っている。

副部長の朱乃さんはお茶を用意しに行っていた。

「それで祐斗。話、聞かせて貰える？」

「はい、部長。……自分は何のために生きているのかを此処の所ずつと考えてました。そのせいで少しボーっとしたりしてましたし、少し皆にキツイ事を言っていたような気がします」

「そうね。……おかげで球技大会ではイツセーのこか……にドツジボールの球が当たって惨事になってたものね」

「……ごめん、イツセー君」

「あー……いいって。アーシアに治して貰ったから」

少し、イツセーは腰が引けていた。

……相当痛かったらしいことが伺える。

その後体育館裏でアーシアに下腹部に回復かけてもらったらしいから、イツセーにとつて良かったのか悪かったのか見ていたこちらとしてはさっぱりだけでも。

木場も少し想像したのか顔を顰めていた。

あの痛みは男にしかわかんないもんね。

俺は男だから分かるよ。

俺は女じゃないからね。……フフフ。

——おっとダークサイドに堕ちかけていた。

「……で、それがどうして今日あんな事になったの？」

「ええ。丁度あの会談の時あの合宿のことを思い出していました。……リクト先輩が僕に言ってくれたことなんです、それについても

少し考えてたんです。……それであの二人がアーシアさんを殺そうとしていたのを見たら——……なんだか考えてたこと全部吹っ切れて、イツセー君の代わりにあの二人を止めてました」

木場は自分でも分からない、といった顔で苦笑していた。

「……そう。それで……——祐斗はまだあの剣に復讐をしたいのかしら」

「それは思ってます。——でもそれはただ破壊する事ではないです。まず今は……」

そこまで言って口を噤んだ。

「どうしたの？」

「えっ……はい。……その、皆を守れるようにと。それにあの子達の願いを叶えてあげたくて——これを」

そういつて少し恥ずかしげに照れる木場が創る——いや造るのは一本の魔剣。

……それを見て俺もだが、皆が目を丸くする。

「——これって」

「エクスカリバー……の魔剣の姿。破壊の聖剣を『理解』して創った魔剣。——名付けるなら ”破壊の魔剣”」

その強度・性能と言った出来栄えは見る限り本物、いやそれ以上。感じられるオーラは赤黒く禍々しい。

木場が言う。

——自分と聖剣計画の犠牲になった子供たちの始めの願いはエクスカリバーの使い手になる事。

……その願いを叶えたいと木場は言った。

その創られた魔剣は……『聖剣計画の被害者の子供たち』にしか使えないよう、想いを込めて創造された神秘性を高められた剣で。

木場の想いを乗せてその魔剣——『エクスカリバーン・ディストラクション』は創られた。

ただ、問題が一つ二つ。

簡単な能力なら付与して『破壊の魔剣』をベースに魔剣を作れると

言うのだから——これはもうコカビエルだなんだと言っている場合ではない。

……俺もあのレベルの聖剣・魔剣は創れるけども。

……いや、俺は知らないんだ。

木場がこんな赤い弓兵の真似事をするようになった理由を俺は知らない。

「……お義兄さん」

「……ハハハ……どうしたんだい小猫ちゃん」

だから小猫ちゃん……お願いだからそんなジト目で見るのは止めて。

朱乃さんの入れてくれたお茶で一息つき、驚愕を収める。

瞑目していた部長は口を開いた。

「少し驚かされたけど、とりあえず良いわ。……祐斗はこれからどうするつもり？」

「僕は……あの二人の手伝いをさせて貰いたいと思います。そのためにも——部の皆には手伝って貰いたいんです」

「……でもグレモリーの名を出したから……私は大きく動く事は出来ないわ」

「はい。……できれば転生悪魔の小猫ちゃん、イツセー君とその使い魔である天野さん——それから良ければリクト先輩に手伝ってもらいたいんです」

「……なるほどね。ドラゴンが協力し、そのドラゴンが自分の使い魔と仲間に力を貸してもらおう事で関わると。……それなら問題はないものね」

部長にそう言って、木場はこちらに向き直り頭を下げる。

「四人にお願いします。……僕と、僕のために犠牲になってくれたあの子たちのために……力を貸して下さい」

ほぼ直角なまでに腰を折り、頭を下げる我が部の貴公子。

それに対してイツセーがまず了承し、天野もそれに連れて了解。

小猫ちゃんは俺の方を見て、俺の返事を待っていたようだった。

今木場の思う復讐は、単純に破壊する事ではなく『エクスカリバーを魔剣に変える事』だと彼は言った。

その過程でエクスカリバーの破壊を行うが、前の破壊だけを目的とする復讐より何倍か良い。

……その復讐はカタチとして残る。破壊での復讐は終わった後空しいばかりだ。

まあ、その復讐の手伝いなら俺も良いと思う。

自分も了承し小猫ちゃんも頷く。

そうして俺含めた四人は木場に力を貸す事となった。

「……朱乃……私たち除け者にされてる」

「……そうですわね……」

部長と副部長は皆に聞こえないようぼやいていた。

## チャックボーンした日

……木場が吹っ切れて、周りを頼るようになった。まあ、みんなの良く知るイケメン貴公子に戻ったというべきだろう。——で、そんな木場の成長と復帰を祝って……まあ、緊急時だとはいえ小規模なパーティを開こうということに。

俺としては大いに賛成したいところだが……問題が一つ二つ。

「ねえ、部長さん？　なんたつて俺の家でやるんでしようか？」

「その、ちよつと気になることがあつて……」

「……どうせ碌でもないんでしようけど聞いてあげます」

「小猫がどんな家で生活してるのか……気になるじゃない……？」

首をかしげて可愛らしく訪ねてくる赤髪を持ち主に一言。

「はあ……バカか、アンタは」

「……え、酷くない?!」

時すでに遅し。既に俺の家の前——玄関先である。部長を筆頭に副部長、二年生組が後ろから顔をのぞかせているのだ。

あー！　もー！　家の中では基本的に人型で過ごしてる黒歌がいるっていうのに！

一応猫に戻つてもらつてるけど困るんだよ！　こつちとしては！

……とまあ、そんな心境の俺。ただしそれを顔に出すわけにもいかないのです、あくまで表情は平常に。

「……普通に考えて、だ。主だの、王と下僕のスキンシップだとか言う建前は抜きにして。小猫ちゃんと俺をストーキングしてくる必要はなかった。これが一つ。……二つ目。既にオフに切り替えてた俺もだし、小猫ちゃんもラフな格好に着替えている。……連絡の一つでも入れてくれれば良かったんじゃ御座いませんか、部長殿？」

「……ごめんなさい」

「素直でよろしい。……後ろの連中もだからな」

後で朱乃さんに聞いた話によると、説教してた俺の目から光が消えて非常に怖かったらしい。怒られてた本人によれば義姉さんに怒られているときの気分になったとか。

……これに懲りたら突撃隣の晩御飯は控えていただきたいところだ。

——……で。

『……』

「……わかったから。お前らそんな目で見るなよ……食材があるんだったら作ってやるから」

結局上げてしまうことになりました、まる

ガッツポーズした部長のおでこにチョップした俺は悪くない。

リビングに皆を上げて座らせておく。

来い、と尻尾を振っていた黒猫についていけば黒歌に怒られる。ただ理由は教えてくれなかったのだけど……まあ、なんとなく察しはついたのでほっこり。大方テリトリーのな物を侵されたとかなんとかで怒ってるのだろう。……ニヤニヤしたら頬を染めて軽く殴られて抱き付かれた。

「リクトのバカ……じゃあ私は今日出て行っちゃだめなの？」

「うーん……顔を隠してなら大丈夫だとは思うけど……とりあえず人間って認識にずらしとこうか？」

「うん、お願い。……ちよつと顔隠せるもの取ってくるね」

黒猫の姿になって黒歌が去っていく。

「……お義兄さん」

「!？」

「こんな時にイチャつく人がいますか……」

……白音ちゃん。そんな家政婦じゃあるまいし廊下の角から覗かないで。心臓に悪い……。

「どうも。……この家に同居させてもらってる……えっと、リクトの

親戚の——猫俣ねこまた 奏音かのんです」

兵頭一誠は驚愕した。それは顔に猫のお面をつけていることに対してではない。

何故驚愕したのか、何故彼だけが驚いたのかは簡単な話。

——そこにB a s tがあつたからだ。胸があつたからだ。谷間があつたからだ。

「……あの」

「ああ、このお面については触れないでください……ちよつと昔にやけどしちやつてて見せられるものじゃないので」

「そ、そう……」

部のみんなが彼女の付けているお面について聞いているがそんなことは知らない。……それよりも一誠は別の物を見ていた。

——胸の大きさ故に上がりきらないジャージのチャックがあつた。きつとあれを上げればあのたわわな胸が強調されるのだろう。

全部あげてしまうものならきつと「チャックボーン」を起こすのだろう。

そんな『きつと』を夢想し、思わず生唾を飲む。……隣でチラチラと一誠の様子を見る天野夕麻が気づいて自分の胸を強調し始めたのだが一誠は気づいていない。

「えー、あの、今日は宴会？ パーティ？ だとリクトが言うので手伝おうかと。……あの、ちよつと……」

「イツセー！ 何やって——」

我らが部長リアス・グレモリーに声をかけられて正気に戻る。

そしてズアッ！ という音と共に気づいた。……俺はやったのだ、と。チャックを上まで上げたのだ、と。

——そして弾けるジャージ。飛来する留め具——。

そこからしばらく、兵頭一誠という男に記憶はない。

顔を見せる時用の偽名である、奏音を名乗る黒歌のジャージを一つ駄目にした犯人。彼は現在、眉間に受けたダメージをアジアによって回復され、ソファアールの上に横になっている。

人が料理を作っていた時に何をやっているのか。明日はもっとハードな特訓をつけてやろうと決意をしつつ、洗い物をしていく。

「……ねえ、リクト？ なんで治してあげないの？」

「治してますよ、そりゃあ。——でも頑なに面は取りたがらないんで



す。……美人さんなんですけど、長い間ただれた顔だったもので現実感がわかないんだとか。……俺にはどうしようもないんですわ」

「へえ……」

急に押しかけてきたのだから洗い物はくらい手伝う、と部長さんが言うので手伝ってもらうことに。案の定、猫俣さんについて治していかないのかを聞かれたので、不備がないよう取り繕う。

「あ、もしかしてあの人がリクトの好きな人？」

「そうですが何か？　だから小猫ちゃんじゃないって何度も言ったじゃないですか」

「……そんな堂々と言われたらからかう気がなくなっちゃうわね……」

ドヤ顔で返すと肩を竦められた。

「……ねえ。リクトは小猫の事、知ってるのよね」

しばらく無言で洗い物をしていたら部長さんが話しかけてきた。

「勿論。……小猫ちゃん、いや白音ちゃんからはぐれ悪魔になって逃げた姉についても聞きましたし、彼女の出生まで聞きましたよ。それが何か？」

「っ……そう……」

「……ええ」

苦虫をつぶしたような顔をしている。

きつと部長にとって妹のような存在になっている白音ちゃん。

彼女を捨てた黒歌が恨めしいとも思っているのだろうか。

「……部長、はぐれ悪魔を嫌うのはわかりますけど、……でも彼らには彼らなりに『はぐれ』になった理由があると俺、思うんですよ」

「……別に私は」

「ならそれでいいんですけど……でも一つだけ聞いてください。優しくかった彼女の姉が、仙術の力に溺れたからといって主人殺しを行って白音ちゃんを置いて逃げた。……本当にそれだけだと思いますか？」

「え……」

「悪魔である前に一体の知性ある生き物として……それこそ情愛の深

いグレモリーである貴女なら分かる筈です。……誰かを愛する心は、時として害を為す誰かを殺すことすら是とするんですよ」

「ちよ、ちよつとまって！ ……リクト、貴方は何を知っているの？」  
ガタン、と部長がシンクの中に洗い物を落とした。

「何をつて……—そりや全てですよ。彼女の姉の黒歌がどうして主殺しをしたか、なぜ白音ちゃんを置いて一人ではぐれ悪魔になったか。知りたいですか？ 知らない方が良かったって思えること、その全てを……知りたいですか？」

「……っ……」

「もう、白音ちゃんの姉が殺した悪魔について調べてないんでしょう？ もう一度、ちゃんと調べた方がいいんじゃないですか？ 例えその悪魔の他の眷属が別の物の所で上級悪魔になり、彼女の姉に恨みを持って殺すよう願っていたとしても……」

「……わかったわ」

幸いなことに割れていなかった皿を拾い上げ、部長は皿の洗剤を流す。

部長の表情は暗かった。……ちよつと言い過ぎたか。

「ごめんなさい、言い過ぎました。ちよつと頭に血が上ってました」

「……いえ、いいの。……私がこの話題を出したのが悪かったのだから……ごめんなさい。……貴方は本当に優しいのね」

「さあ、どうなんでしょう。……自覚は無いんですがね」

「……きつとそうよ」

カウンターから覗けるリビングを見る。

見えるのは——オカルト研究部の面々に交じって楽しそうにトランプをする姉妹の姿。

そうして片づけが終わり、オカルト研究部の皆様は帰って行った。

「お義兄さん」

「……ん？ 何、小猫ちゃん。あ、いや、白音ちゃん」

入浴も全員終わり、これから寝ようかという時。

「……お義兄さんは、……これから何をしようというのですか？」

「何って……べ、別に疚しいことなんて、ただ一緒に添い寝して「いえ、そうではなくて」……んん？」

黒歌が先に寝室に入って行くのと同時に白音ちゃんに呼び止められた。

今抱えている問題がなくなるまでは黒歌とは致さないつもりですけども……はて？

「んー…白音ちゃんは何が知りたいの？」

「お義兄さんがしようとしている事です。お姉ちゃんのことですか？」

「……ああ、なるほどね。把握。——絶対に言わない？」

「それは姉にですか？ ……それともオカルト研究部の」

「オカルト研究部。……あの人たちに言わない？」

「つ……言えば……」

「言っても何にもならないよ。……ただ、みんなはそんな事が無かったかのように振る舞うだけ」

ただ、皆の記憶から『ずらして』抹消するだけの事。

……そして二度と白音ちゃんは部の皆に言おうとは思わなくなる。

それが分かったのかジツと考え込み、白音ちゃんは顔を上げた。

「……言いません。だから教えてください」

「うん。じゃあ白音ちゃんには言つとこうか。小猫ちゃんには言つてないからそこんとこ留意すること。……コカビエルは天使側からエクスカリバーを盗み出し、それを持って悪魔側の魔王の妹……グレモリーとシトリーの領地に侵入してきた」

「……はい」

「つまりコカビエルという『墮天使』が『天使』の物を盗み出し、『悪魔』の住処に持ってきた訳だ。……大局的に見れば墮天使が天使と悪魔に喧嘩を売ったように見える」

うん、と白音ちゃんは頷く。

「此処でだ。……まず有りえないけれど、リアス・グレモリーかソーナ・シトリーの両名のどちらか、若しくは二人が殺されるとしよう。……それがエクスカリバーのような悪魔に対する劇物で殺されたの

ならば……おそらく、魔王の二人が黙っちゃあいない——戦争でも起こす勢いで墮天使と天使に宣戦布告でもするだろうさ。聞けばあの二人の兄と姉はシスコンらしいから」

一呼吸おいて。

「……さて、これを未然に防いだとする。それが其処に有るだけで影響力を及ぼすような神器持ち。若しくは二天龍の片割れであったのなら……それ相応に戦争を未然に防いだことに対する礼を考えなければならぬ」

「……それじゃお義兄さんは……」

得心がいったようで何より。

「わかったならもういいかな。——盗み聞きしてるわーい猫がいるから」

「……姉さま」

後ろのドアの隙間から覗く黒い猫耳。それがピクリと動いて部屋の奥に消えていく。

白音ちゃんはハア、とため息を漏らした。

この後滅茶苦茶モフモフした。

## 思い出した日

忘れている。

繰り返したことを。

忘れていた。

繰り返していることを。

何度廻っただろうか。

何度繰り返しただろうか。

過ちの度にやり直し、いつもどこかで失敗していた。

始めは無かったことにした。——好意を己に向けさせ、好きあう仲になった。虚しいだけだった。彼女の瞳に輝きを感じられなかった。次は止めようと決意した。

次は原因を根絶やしにした。——人外という人外を殺し尽くし、追手を消した。勢い余り、彼女の妹を手にかけた。……怒りに染まった顔でこちらを見ていた。次からは救える限り救おうと決意した。

次は彼女のみならず、他も救った。——救ったのはいいが、彼女を一番に大切にできなかった。——私は必要ないでしょう——と振られてしまった。次は取捨選択をするよう決意した。

次は悲しくなった。此方を警戒する彼女の瞳が。前の彼女の瞳が自分の存在を否定しているようで。自暴自棄となり、世界を一つ無かったことにした。……次は覚えていない。

争いを消せば、世界は停滞する。

発展させれば、世界は崩れていく。

ずらせば一つは解決する。ずらせば何処かで破綻が起きる。

——……今は手の届く範囲を救っている。後輩を導き、同輩を諫め。彼女と彼女の妹を救う。出来る限りずらさずに。人間として、妖怪として。ただの『揺らぎ』に変質してしまったなら猶の事。……らしくありたかった。人間らしく、妖怪らしく。父と母の子供として。だから。

故に。

……一番近い、上の世界の自分にずらした。ずらしたから忘れてし

まった。過去の過ちを。

——どうか忘れるな。過去未来現在、三千世界の全ての己が犯した過ちを。

「……………あれ……………」

目が覚めると泣いていた。米神に向かって目から生暖かい液体が伝っている。……………自分が悪魔天使墮天使を殺しまわっていたり、ハーレムを無自覚に作っていたりする夢を見ていたような気がする。まづ有りえない話だが、しかし現実起きたことのように鮮明に記憶に残っていた。

「うーん……………おはよう……………うーん？ リクトなんで泣いてるの？」

「ああ、うん。おはよう。……………自分でもわからない——」

俺の上で寝ていた黒歌が涙を拭ってくれる。

「嫌な夢でも見たの？」

「……………良い夢ではなかったかな」

「そっか……………どんな夢？」

拭った涙をぺろりと黒歌は舐めた。

「……………黒歌が傍に居なくて、自分が失敗を繰り返している夢。黒歌を助けて好きになって貰おうって打算で動いて……………それで、失敗して……………。ごめん、変な事聞かせた」

「……………打算かあ……………」

「今も少し心当たりがあるから辛い。……………初めて会った時もちよつと打算で動いてたから……………どうしたら家に留まってくれるかな、って」  
「……………その割には結構強引だったけど？ 態々隠してる能力までばらして。お風呂にまで入れさせてくれて」

「それは……………反省してます」

小さく黒歌は笑う。

「いいよ。今はよかったって思ってるし。……………リクトに感情まで弄られてたらなんにも言えないけど」

「っ！ それはしてない！」

「うん、リクトはそんな事しない……白音の好意を友愛にずらしてるのは些か言いたいことがありますけど!」

「……。受け止められそうにないんだ。他に好きな人が出来たら、そっちの方が白音ちゃんにはいいかなってさ」

「……私が居るから?」

「どうしても2番目になってしまいそうだから。……そんなの、駄目だ」

「……分からないでもないけど」

黒歌は納得できない様子。妹のために犯罪者になったのだから、納得できないのも仕方ない。

「……物語のハーレム系主人公じゃないからさ。中世の王族みたいに自分を殺して後宮を作ることも出来ない。大切な人を増やして、一番大事な人を失くすくらいなら……ハーレムなんてしたくない」

「そっか。リクトの言い分もわかったにやん。……白音の事はもう言わないけど……今度、ちゃんと白音と話して」

「わかった」

もぞもぞと黒歌が動き出す。

「……昨日はホント好き勝手してくれて……髪ボサボサになっちゃった」

「ごめん。……つい出来心で」

「……このスケベ。おっぱい星人。生殺しにしてくれちゃって……」

「いや、黒歌も濡らしてるなら人の事言えな——」

「——うにゃああああ!!」

お仕置きと称して髪の毛をモフってモフった。そのあとの事は黙秘させてもらおう。ただ、自分の信念のためにも、本番はしてないただけ起こしに来てくれた白音ちゃんには言っておく。

——目を覚ました時の陰鬱な空気は、既に無かった。

小猫ちゃんと駄弁りながら登校し、いつものように時間割をこなしていく。

教室に来た木場に昼食に誘われ、いつものメンツに断りを入れて、

今時珍しく解放されている屋上に向かった。

「……それじゃ、もう木場の復讐というか、目的？　は果たされたわけか」

「ええ、まあ……」

「……これからどうすんのさっ」

紙パックのジュースを飲みながら、切って小さくした唐揚げを黒猫の口に運ぶ。

昨日家に来た後、行き倒れていた教会の二人を見つけたらしい。みすみす見殺しにするわけにいかないの、イツセーの家に皆で寄り、食事を与えて体力を回復させた。二人は一応遠慮はしたらしい。

食事の後、エクスカリバーの破壊および回収の手伝いを持ち掛け、俺は赤龍帝だという屁理屈のような話で納得させた。……いやいや。赤龍帝は神殺し<sup>ロンギヌス</sup>。しかも神敵である紛いなりにも赤い竜だが……背信行為じゃないのか、という無粋な疑問はあえてしなかった。

成り行きで昨日の夕方出来なかった木場と紫藤イリナの模擬戦をすることになり、『擬態の聖剣』のコピーもできたらしく。加えて、その途中で乱入してきたフリード・セルゼンが持っていた聖剣のコピーもできたらしい。……それで現在木場が造れるエクスカリバーの種類は6本ということになった。

フリードは撃退、盗まれた四本の聖剣は重要な部分を残して破壊され、重要な部分である聖剣の核は昨日の内に二人に返還されたらしい。

「……どうしましょうか……」

「どうしましょうかって……うーん、俺には何とも言えそうにねーな」  
「……そうですよね」

期待した答えが無かったかのように、木場は備え付けのベンチから立ち上がった。

「……。まあ、一つ言えるのはまだ出来ることがあるんじゃないか、つてことぐらいかな。聞いた話だと魔剣の特性を一つに纏め上げられるんだろ？」

「あ、なるほど……」



「支配が無いから完璧には出来ないけどさ、完璧には近づけるんじゃない？」

「……そうですね。それに無ければ創ればいい」

「お、おう……」

6本纏めればいいって話からずれてきたような……いやいや、俺じゃないんだし。

「有難う御座います。今日、放課後やってみます。……では、僕は先に行きますね」

「暴走だけはするなよー」

ちよつと危うい雰囲気を纏わせて木場が屋上から出ていく。

やばいかな？ と黒猫に話しかけて撫でる。みゃー、とよくわからない鳴き声が返ってきた。

午後の授業を更けて昼寝をした後。目を覚ましたのは放課後で、太陽はすでに傾いており、部活の始まる時間だった。

急いで部室に行ってみれば、皆深刻そうな顔で座っていた。……教会の二人、紫藤イリナとゼノヴィアがアジアに治療され、生徒会会長職の二人も壁際に立っていた。

「回復系の神器が無ければ危なかったですね」

「ええ、本当に。……リクト、遅かったわね。携帯にあれだけ連絡入れたのに」

「すみません。寝てました……小猫ちゃん、何があつたんだ？」

「はい……」

小猫ちゃんからの情報によると、生徒会室にボロボロに叩きのめされた二人が投げ込まれたらしい。背中には宣戦布告と思われる文句の書かれた紙が貼られており、内容によると今日学校に襲いにくるといふ。当然のように聖剣の核は奪われた。

「……それで、これから生徒会の皆様に結界を張ってもらい、今夜の襲撃に備えることに。……私たちが魔王様たちが来るまでの時間稼ぎを行うことになりました」

「ずいぶんと早いんだな」

「……早いです。ただ、まあ……」

「別に倒してしまっても構わんのだろう？」……ですか？」

言おうと思っていたことを木場と小猫ちゃんに被せられた。ついでいけなかったイツセーは悔しそうにしているが、まあ知ったこっちゃやない。

「あ、貴方たち！ ふざけてるんですか!？」

「会長！ 落ち着いて！」

「そうよ、ソーナ。落ち着いて。……今回はレーディングゲームじゃない。リクト、手加減はしなくていい。皆も慢心は捨てて、全力で今夜の戦闘に臨みなさい」

「了解です。——禁手してもいいですかね？」

「勿論。さ、作戦会議は終了ね。……各自夜に向けて体制を整えておくことそれじゃ、今日は一旦解散」

丁度アーシアの治療が終わる。部長の了解を得たことを再確認し、未だ話があるだろう二人と側近である二名を置いてオカ研メンバーは外に出た。

「ちよつと！ リアスッ！ ……慢心にしても度が過ぎるんじゃないの」

「いいえ、慢心なんてしてないわよ」

ソファアーに座ったソーナが声を荒げるも、熱くなっていた自分に気づき、冷静になる。

対して部長はとして澄ました顔でカップを手取る。

「正直に言うとな神話の時代から生きる堕天使に勝てるだなんて思っていない」

「だったら何故っ！ ……いえ、その根拠は何かあるの？」

気づけばまた冷静さを欠いていたことに気づき、再度落ち着かせた。

「私は知ってるの。イツセーが毎日部活が終わってからリクトと修行をしていることを。祐斗がどれだけ自分の神器と見つめあい、どうすれば全力で力を発揮できるかを。小猫にしろ、アーシアにしろそれぞ

れの得意なことを伸ばしてきてる。天野さんも上級悪魔に匹敵する魔力と、上級墮天使の光力を持つてるし、それに莫塵をかいて何もしていないというわけでもない。……無論、私たちもね」

「うふふ……私も自分と、自分に宿る忌々しい力と向き合ってます。ですから倒すことはできないにしろ、時間稼ぎは出来ると確信はしています」

朱乃が笑みを浮かべながら中身の無いカップに紅茶を注いでいく。「ありがとう、朱乃。……加えてイツセーとリクトは禁手が使える。神滅具を3つ持っているの。負けることはまずない。主だからという主観を抜きにしてね。勝てる、とリクトが言うのだから負けることはないわ」

「……でも、リアス……彼は怪しいわ。未だ明かしていない神器が彼にはあるのでしょうか？」

「それはそうね。何せ一度私たち三大勢力にそれが原因で襲われてるらしいから。……だから私の事をまだ信じて話してくれていないのは悲しいことだけれど……でも、彼にも色々と事情があると思うのよ。話したくない気持ちもわかる」

「……貴女らしいといえれば貴女らしいけども……悪魔が騙されているだなんて洒落にならないわよ？」

「まあ、そうね。でも、悪魔ほど契約に忠実な存在は居ないと思うのだけれど」

「……。……彼が悪魔であるとは限らないのよ？」

「私はリクトは裏切らない、もし裏切るとしても……それは何か理由あつての事。そう信じてる。……小猫のお姉さんみたいだね」

「……SSランクのはぐれ悪魔の黒歌ですか……一時期話題になりましたね」

「ええ。同じ猫？である小猫をグレモリーが匿ったことで、その残された下僕を引き取った悪魔達にも非難されたわ」

「ですが、なぜ今その話を……？」

答える前に、副部長に向かって机の上の資料を取るように指示した。朱乃はファイルに纏められた資料を会長の前に置く。

「……これは、あの時グレモリーを非難した者たちの資料ですか。あ、そういうえば昔リアスが怒ってましたね。『小猫は悪くないのに！ 失礼な方たちだわ！ 絶対に許してやらないんだから！』……とか何とか。まさか記録に残すくらい怒ってたなんて」

「んん！……そんな大昔の事を言わなくてもいいの。それよりもその悪魔たちを引き取ったのはどんな奴らかわかる？」

「どんな奴等とは……ああ、なるほど。流し見ですが、グレモリーから魔王が出たことを不満に思う旧魔王派の悪魔と」

「その他旧魔王派に密接に関わっている者達ね。……ソーナ、なぜ黒歌が主殺しをしたか知ってる？」

「仙術に呑まれた、と聞いてるけれど……」

「引き取った上級悪魔達が報告してきた情報ではね。殺された主の下僕たち本人からは聞いていないのよ。聞いたとしても改ざんされた情報を流された可能性が高い。——グレモリーを陥れるために」

「会話が途切れ、紙が擦れる音だけが部屋にこだまする。ソーナは読み終えたように書類をファイルに最初の状態にして仕舞った。」

「……事実ですか？」

「ええ、事実よ。といってもリクトから聞いたことの裏付けに調べただけだね。……聞かされてから徹夜で調べたけど……矛盾は一切なかった」

リアスの目元には普段しない化粧で隈が隠されていた。

「……犯罪は、犯罪です。……殺したことは……」

「変わりない？……本当に、ソーナはそう思ってるの？」

「でも！——……どうしようもないじゃないですか。はぐれ悪魔は存在するだけでも危ないんですよ？ 大半が力に溺れ、暴走した者達です。……例えば、未熟な子供に危険な仙術を強要したとしても……証拠がない以上、弁護しようがない……！」

悲痛な声を上げた会長に副会長が驚く。原因であろう、ソーナの前にあるファイルを見て目を丸くさせた。

「私ね、ソーナ。昨日リクトの家で、黒髪の女性を見たの。リクトの親戚らしく、人間以外の気配はしなかった。昔負ったやけどのせいで仮

面をして顔はわからなかったわ」

「……。それは、そういうことなのでしょうか」

「仙術には詳しくないけどね。……人を操る術は無かった、と思う。それに明らかに人間であったとしてもリクトの方がSS級はぐれ悪魔より強いことは確か。みすみす操られる事は無いはずよ」

「では彼は——……。奴良君は……。自分から」

沈黙。

しばらくしてから口を開いたのは副会長の椿姫だった。

「……一介の兵士が、そんな大それたことを企てますか？ そちらの兵藤君には失礼にあたると思いますが……」

「ふふふ、そうね。でもきつとりクトならする。イツセーよりも情熱的だと思うわ。彼女のためなら三大勢力を敵に回すぐらいするかも」

「……それは、ちよつと洒落になりませんね」

「そうね。……でもそっちの匙君もそれくらいのことしかしそうな気はするけど？」

「……そうでしょうか。してくれたら嬉しいですけど」

いつの間にか主二人は恋バナに。イツセーの自慢をしたり、対抗して弟の自慢をするように匙の事を褒めたり。いつの間にかキングたちの会話が友人の会話になっていた事……このままいけばキャットファイトになるだろう、予知に近い予想にクイーンの二人は苦笑した。

——そして夜が来る。

## 突入する日

——夜中、午後十時。

「いよいよです。……準備はいいですか、オカ研の皆さん」

「大丈夫よ、ソーナ。……一応聞くけど帰りたいヒトは居る?」

誰もいない。居るわけがない。

「じゃ、行くわよ皆!」

リアスを筆頭に生徒会の敷いた結界の中へと突入した。

「コカビエルツ!」

「ようこそ、紅髪の姫。ご壮健のようで何より。……どうだったかな、俺様が差し上げたプレゼントは」

「——っ! ……グレモリーを代表して、私たちが相手をさせてもらうわ!」

「この俺様を倒せるとでも? 魔王の妹君は冗談がお上手だ。だがその前にちよつとしたショーをお見せしようか」

「ツ! ケルベロス——!!」

「その通り。冥界から連れてきた。……さて、出来たかバルパー」

コカビエルが指を鳴らし、彼が冥界から連れてきたケルベロスがグランドに5匹現れた。

続くようにしてバルパー・ガリレイが敷いていた魔方陣が輝く。原型を留めていた『破壊』と『擬態』の聖剣をベースに鉄片と化していた四つの聖剣の核が吸収されていく。オカルト研究部のメンバーも目を見開き、現状をただ眺めていた。

「——ふはははははッ! ああ、コカビエル。できた! 完成したぞ! 聖剣エクスカリバーを私が完成させたッ!」

「おいおいおい! 俺つちの聖剣ちゃんチョー輝いてやがんぜ! え、何? ほとんど昔のエクスカリバーに近い? バルパーのおっさん、あんたホントにいかれてるう!」

「褒め言葉だ。……さあ、この聖剣で悪魔どもを——ぐっふう!」  
バルパーが呻いたことでリアス率いるイツセーたちは正気に戻る。

赤い籠手を身に着けたリクトの拳がバルパーの腹に入っていた。首からは『聖母の抱擁』掛かっており、発光している。殴ったと同時に治癒したのだ。とはいえ痛みはある。殴られ即座に回復されたバルパー・ガリレイは気絶し、無傷でグラウンドに横たわることになった。気絶した彼をリクトは結界の外へと投げ飛ばす。

「テメエは……ああ！　ああッ！　てめーはッ!!　俺様を虚仮にしてくれた……!」

「……誰だっけ？　ああ、このおっさん用無しだろうからこっちで貰うな。白髪神父」

「オボエテねえだとお……!　エクスカリバアアアア!!」

エクスカリバーが発光する。目にもとまらぬ速さに加え、実際に剣の姿が見えなくなった。だどいうのに対するリクトは避ける気がないといわんばかりに一步下がっただけ。――剣と剣がぶつかり合った金属音が鳴り響く。

「君の相手は僕だよ！　リクト先輩、ここは任せてください！　――出来たんです。試させてください」

「それじゃ任せた。後でこれを……いや、今渡しとこう」

割り込んできた木場が振るった剣はエクスカリバーに打ち負かされることは無く、逆に白髪の神父、フリード・セルゼンを仰け反らせた。そこへ思い直したリクトが跳び蹴りで追撃し、フリードは跳んで行く。リクトが握っていた物を木場に手渡す。

「これは？」

「聖剣の因子。木場の仲間たちが集められたのは、少ないながらも聖剣への適性を持つ子供たちから、その適性を因子として集め、一つの聖剣の因子の質を高めるため。――つまり人造の聖剣使いを作るため、因子を集め……無用になった子供たちを処分したんだよ、あのバルパーは」

「――ッ！　バルパーッ！　お前というやつはッ!」

「今言っても仕方ない。……ただ、この因子は受け取ってあげてくれ。きつと奴に殺された子供たちも少しは報われるんじゃないかな」

「っじゃあ……もしかしてこれは」

「木場の仲間たちから取られた物。見たところだと木場に対する想念が残ってるよ。……こんな時だけど、最後のメッセージを聞いてあげたらどうだ？ 聞けるようにしておいたから」

木場の歌う聖歌が聞こえてきた。不思議と悪魔には被害はない。

リクトは木場から離れ、一瞥してコカビエルに向き合う。箠手だけでなく、光翼を出現させていた。

「な、何故だ！ 何故！ 悪魔のお前がそれを持っているのだツ!! 奴と同じ神滅具が——同時期に同じ神滅具が存在するなどツ！」

——『Welsh & Vanishing Double Balance Breaker!!!』

背中にある宝玉と箠手の宝玉から禁手化を告げる音声が流れた。

——箠手と翼を起点に赤い銀の鎧が展開されていく。赤銀の鎧、

セレストイアル・ドラゴニアカイザー・スケイルメイル

『天 龍 皇 帝 の 鎧』を身にまとったリクトが飛び、コカビエルと並んだ位置に滞空した。

「……堕天使とは高いところから誰かを見下ろすのが好きなのか？

神に墮とされたことを気にしてるのか？ 生憎と、俺は堕天使じゃないからわからないんだが」

「ツ……それに何故相反する神滅具が——まあ、いい。……何者だ貴様」

「ただの人外だよ、堕天使。血沸くような、飽くなき戦闘をしたかったのだろう？ 俺が相手してやる。……下の事は気にしないでいいようにしよう」

結界を張り、結界内の時間の流れと外の時間の流れをずらした。

「……ふん。分かる、分かるぞ。貴様は俺様よりも強い。何故あんな悪魔どもと一緒にいる。お前なら一人でも十分やっていけるのではないか？」

「それでもない。所詮個人は個人。集団に勝てると思ったらそれは英雄的人物くらいだ。——その英雄も最後は集団に殺されるんだがな。

……あの連中とでないとできないこともある。だから俺は『はぐれ』になつたりしないんだよ。……ああ、それと提案なんだが——」

提案を聞いたコカビエルが狂ったように笑う。



「大概貴様も狂ってるなッ！ いいだろう。その賭け、乗ろうッ！」  
「いい返事を聞けて何より。——では、行くぞ？」

——『Boost! Boost! Boost! Boost! Boost! Boost! Boost! Boost! Boost! Boost!……』

計50回の倍加。瞬間、リクトの背後の空間が爆ぜた。時間が止まったような感覚を覚える中、コカビエルに近寄り軽く身体を押しした。それだけでコカビエルは吹き飛び、リクトの張った結界の壁に叩きつけられる。意識はあるが、朦朧としており、飛ぶことすら儘ならなかった。……しかし、それで終わるのは許されない。首にぶら下げた『トワイライトマザー・リバース聖母の抱擁』でコカビエルを全開に回復させる。

「……まだ終わりたくはないだろう？ 今まで力を振るえず、燻っていたはずだからな。存分にかかってこい」

「屈辱的だがその通りだ。——だが、まだ負けは認めん！ 一撃でも入れねば、あの戦争で先に逝った部下にも示しがつかんッ！ 二天龍に巻き込まれ、殺されたアイツらのためにも一撃はッ！」

復帰したコカビエルが光の槍を生み出す。槍は止まる事を知らないように大きくなっていく。

「ふう……いつ以来だったか。各上相手に挑むのは。……やはり、あの戦争の時以来だろうな。——喰らうがいい、下級悪魔よッ！」

「動きを止められた……っ!？」

光の槍は投げられた。その大きさに比例せず、閃光の如く鎧姿へと接近する。避けようとするも体はその場から動かない。ならば、思いリクトは甘んじて攻撃を受ける。直撃と同時に起きる衝撃と光の奔流。少し鎧に罅が入った。

「……やはり駄目か。だが一撃は入れた。油断したな、悪魔。俺は星と星座の運行を司る墮天使だぞ」

「なるほど。納得した。……だがそんな簡単に手の内を明かしているのか？」

——コカビエルは天界にいた時、星と星座の運行を司る天使だった。星の運行とはつまり、重力を自在に操ること。重力を操り、星座を動かす。——神が死んだ今、遠く離れた宙に浮かぶ星を操れること

はできない。しかし、今でも地球の人ひとり程度は重力で足止めすることが出来るだろう。

——だがそれでも力の差は埋まらない。神に従属していた天使であった墮天使と、三大勢力が力を合わせて神器に封印した、神を殺した龍の二匹。勝負は始まる前からついていた。

「もう打つ手はない。——あれで駄目だったのだ。もう勝てるわけがないだろう。潔く負けを認めよう」

「そうか……もういいんだな？」

「ああ。だが、——約束は違えるなよ、悪魔」

「……勿論だとも。契約を守るのが悪魔だからな」

——……では、一度気絶して貰うぞ。

リクトが接近し、コカビエルの首に一撃入れる。

コカビエルが意識を失う前に感じていたのは久しぶりに感じた、戦いの後の高揚感だけだった。

祐斗先輩がリクト先輩に渡されたもの握りしめた後、周りに現れた幽霊の子供たちと色々な感情をこめて聖歌を歌っていた。不思議と頭痛はしなかった。——イツセー先輩に後で聞いたところによると、聖歌を歌い終わった後で禁手化したらしい。それから駒王学園の上空が結界に覆われた。

あの神父を祐斗先輩が相手をしているのに対して私たちの前には五体のケルベロスがいる。昔の私なら一匹相手するのも難しかっただろう。

今の状態でも倒せるけど、慢心はしない。私は内気を高め、取り込んだ外気と合成する。合成した気の何割かを闘気に変えて、お姉ちゃんに教わった『猫？モード』を使った。

尻尾が増えて、ちよつと体が成長する。

初めて使ったとき、将来自分がべったんこじゃないって知ったときは嬉しかった——のは秘密。

イツセー先輩の視線が気持ち悪いので、気円斬の応用で作った火車の中に入れて締め付けておく。

「熱い！ 痛い！ 止めて小猫ちゃんッ！」

「そのいやらしい視線を止めてくれたらやめます」

「うん、それムリ！ あっぢいいいい！」

鎧着けててもわかるいやらしい視線をどうにかしてほしい。ホント切実に。

それをなくせばモテなくもない容姿と性格をしているというのに。ただ今は有事なため解放してあげた。

「一人につき一体相手すればいいですか、リアスお姉さま」

「え、ええ……小猫なの？」

「小猫です」

リアスお姉さまが驚くのも無理はない。私は今、部長二人と同レベルなのだから。峰不〇子に勝て……ないか。あとお姉ちゃんにも勝てないや。

「はあ……じゃあ先に倒してきます」

上には上がいるという非情な現実に対して一つため息。

——私は『戦車』だけど足にも自信はある。リクト先輩が言っていた。

『パワー×スピード＝最強』

なんでですかソレ、とツツコミを入れた私は悪くない。

曰く、「攻撃は最大の防御。当たらなければどうということはない。見敵必殺。サーチ&デストロイが出来る白音ちゃんは強い！」なのだそう。……お姉ちゃんも頷いていたから似た者同士のバカツプルめ、とつい思ってしまった。まだ恋人じゃないらしいけど。一緒に夜寝てるのに。

……でも二人の言う事は正しい。攻撃をされるまえに相手を倒すことが出来るのが一番良い。カウンターに引っかけたとしても避けることが出来たなら攻撃されることはない。

「「キャウン!?!」」

「ケルベロスにコレは似合わないか」

ケルベロスに近づいて気を乱し、周囲に待機させてた気円斬と火車で毛を刈り取った。ちよつとやりすぎちゃったかも。

……ケルベロスは殺さなくてもいいかな。お腹見せてきてるし。肌の色が見えて全身ピンク色だけ……可愛げがないこともない。うん。アーシア先輩にあげよう。

## 至る日

識別のため付けられていた名前を呼ぶ、僕を助けるために殺された仲間たち。彼らの意識は先輩の言う通り、聖剣の因子に宿っていた。自分だけが助かって良かったのか、生きて良かったんじゃないか。僕だけが逃げてても良かったのか——聖剣を憎んでいないか。……ずっと悔やんで、思っていたことを聞いた。

『君が笑っているなら生きてくれていているなら』

『僕たちも報われるよ』

答えてくれた彼らは笑っていた。——笑って生きてくれ、と僕に言った。

——好きなモノが出来たんだ。

『よかった』

——聖剣に対する思いは一緒だよ。

『そうなんだ』

——憎いけど、憧れてもいる。

『……うん』

幽体の彼らは頷き、優しさを感じる笑みを浮かべた。——そして一人が聖歌を歌い、続くように皆が歌い始める。

僕も彼らに併せて聖歌を口ずさむ。頭が不思議と痛くなく、僕は身体に宿る神器に語り掛ける。

——答えてくれ、僕の神器よ。

僕と皆の思い。エクスカリバーへの憧れと憎しみ。教会を信じていた彼らの、信じていたモノに裏切られた想い。悪魔となって教会だけが全てではない、本当の意味での正義を知った僕の想い。

神器は僕たちの相反の想いに神器は答えてくれた。手に持った魔剣のエクスカリバーが聖なる光を灯す。禁手化する、とエクスカリバーンが伝えるように熱を持った。

——I am the born of my sword.

創作、架空に妄想……どれでも良い、何でも良い。想い描くのは最強。故に自分は未熟。だからこそ最善をめざし、最善を尽くす。——

そんな僕のイメージを禁手化を始める神器に伝えた。自分の意思を貫く力が欲しいと。

『——禁手化』』

「ちい……クソ悪魔の分際で俺様を蹴り飛ばしてくれちゃったアイツはぶち殺さないと気がすみませんなあ?? ——んあ? なんぞ、このクソムカつく歌は……っておいおい、何発光してくれちゃってんの?

悪魔さん」

奴良リクトによつて蹴り飛ばされたフリード・セルゼンが目覚めた時、耳にしたのは自分が苛つきを覚える聖歌。次に目にしたのは禁手化した木場祐斗の姿だった。持っていた剣がうねり、形を変えて、禍々しさの中に厳粛さ漂う剣になっていた。

「あーあーちよーむかつくんですけどー、俺が眠ってた間に——なにがあつたんでございましょうーかツとー!」

「……っ! そういえば居たね、フリード・セルゼン」

「なーに勝手に忘れてくれちゃってんでしようーか、クソ悪魔の分際でえー……私、ムカつきますう!」

フリードはエクスカリバーを振る。残像を残しながら木場へと襲い掛かる。

「はいはいしつもん! ——なんでその剣折れないんですかー!」

「エクスカリバーだからさ」

「あーなるほどねエ……なるほどー……って納得するわきやねーだろーがクツソ悪魔さんよおおツ!!」

フリードの猛攻は彼の怒りに乗じてさらに苛烈になる。対する木場は先ほどと変わらず、自分から打って出ることはせず、ただひたすら攻撃をそらしていくばかりだ。

「あ? ——何舐め腐ってんの? ——俺さ、舐められるのって嫌いなんだよね。でもー君みたいないケメン悪魔だったら……——おえ、気色わるーい。変な想像と共に消えてくだちいー!!」

天閃の速度で木場の持つ剣にあたり、接触したところを始点にフリードのエクスカリバーの刀身が木場を襲うように曲がった。——

木場は避けない。

「おい、おiiiiiiii!!? なんでさ! なんでなわけよ! あたつてんじゃん!」

「僕の禁手は『魔剣創造』の亜種——『トゥルースセンス・ブレイドワークス真なる剣製』。聖と魔を融合させ、意味を持つ聖なる魔剣を造る事。概念付与と言つてもいいかもしれない。ちなみにこれは——本来あるべきエクスカリバーさッ!」

「ちよ!? ——ッ!?!」

『擬態』の力を使い剣を変形させて攻撃を防いでいた。木場が攻勢に出る。といつてもただ剣を一振りしただけ。しかしその一振りと同じ時に一瞬で発動されたエクスカリバーの効果。

『天閃』で振るわれた。『擬態』により刀身は長く伸び、しかし剣自体は『透明』で悟らせず、『夢幻』により、腕から刀身にかけて視覚出来る限り三つに分裂する。そして『祝福』により強化された『破壊』で、身の危険を感じたフリードが手放したエクスカリバーは破壊された。——一度にエクスカリバーの特性を行使するのは思考の分割でもないが無理だ。だから木場は合成した六つのエクスカリバーの特性に——新たに生み出し与えた『支配』の特性で、他六つを制御するのに使う。

「避けた!?! ……凄いな、君」

「くはああああ!! 死ぬかと思つたああ!! 何、それ。マジでエクスカリバーなわけ? でないと俺のエクスカリバーちゃんが負けるわけねーし?」

至近距离。真の姿は隠され、その真の姿さえ偽り。さらに幻影を見せられて尚獲物を手放すことで避けきつたフリードは天才、いや鬼才というべきだろう。敵だとはいえ賞賛に値した。

「そうだね。聖魔剣で作つてるから……。名づけるなら『聖魔剣エクスカリバー』かな。それが『真・エクスカリバー』でもいいかもしれないね。——とはいえ次は逃がさない……。『勝利導く——』」

「あのお……僕ちんのエクスカリバー壊れちゃつたんでえ……逃げます! 逃げますッ!」

魔力を吸い、光を纏う剣を木場は振り上げる。木場が創造したからこそある能力。

「栄光の剣」——!!」

名を叫んだのはそうしたかったから。ただそれだけ。しかし剣の先から飛ぶ光の斬撃は空間自体を切断するかのよう。

木場が付けた「込めた魔力を増幅させ、飛ぶ斬撃として放つ」能力。加えて発動させたエクスカリバーの『破壊』と『天閃』。触れたモノ全てを破壊する斬撃が、天閃の速さで飛んでいく。

——だが、運命のいたずらか。実際に神の祝福を受けているのか。「何処狙ってんだっつーの! またもや死ぬかと思いまちたー……ちゅーわけでアデュー悪魔さん☆」

……フリードには当たらなかった。逃げていく彼の横を掠りもせずに通り返る。加えて飛んで行った斬撃はフリードのはるか前方の駒王学園を覆っていた結界へ。まるでフリードに逃げろと言わんばかりに結界がその部分だけ裂けた。

逃げていくフリードの背中を見て追いかけようとするも、創造と能力の行使で力を使い果たした木場はその場に崩れる。それでも木場はやり遂げた表情をしていた。

「……やったよ、皆」

返事はない。周りにはもう木場の仲間たちは居ない。

空に昇るように消えていった仲間たちが最後に残っていた木場への感謝の言葉。

——……ありがとう。

「……僕の方こそ」

エクスカリバーを杖の代わりにして立ち上がる。

ケルベロスを倒した仲間たちの元へと木場は歩きはじめた。

——ケルベロスが哀れ。

ケルベロスを部長職の二人をサポートしながら倒して、帰ってきたイツセーの言葉がそれだった。確かになんだかちよつとパツとしな。もつと強いとばかり思っていたから。あのコカビエルさ——い



え、コカビエルがショーをすると行って連れてきたのだから。——いや、ケルベロスが弱いんじゃないのか。私が強くなつたんだろう。多分前の私——レイナーレのままだとこんなことはまず言えない。

——私がケルベロスを倒す前に遡る。

駒王学園の上を飛ぶ私。墮天しない天使(?)になつた私には翼が十二枚生えていた。こんな体にした張本人曰く、翼の数は天使、墮天使に相当するらしいけど……熾天使を気取るつもりはない。未だ私はおつちよこちよいのままだ。こんな私が熾天使を名乗るわけにはいかない。

おつちよこちよいは性格の問題らしい。頭の造りまで変えてしまふのはよくないと言われたので私は私のままだ。

未だによく失敗もするし、兵藤家のお母様に教わる料理もあの家に住むヒトたちの中では私が一番習得が遅い。

……こんなのでイツセーのハーレムの一人になれるんだろうか。——いや、こんな思考したらダメだ。また前の二の舞になる。疑心暗鬼に囚われてしまう。

イツセーを好きになつたのは私が一番目。——だけど私は一度裏切つた。裏切つたからこそ、私は彼から信頼を取り戻さないとけない。

イツセーはいやらしい目つきで私やグレモリーを見るけれども、ただそれだけ。何もしてこないし、仮に横に寝たとしても何もしない。私に殺されたことが若干トラウマになつているらしいのは、傍目から見ても十分わかる。

「……今はまず、目先の敵から」

光力と魔力を合わせた、何かわからない力を生み出す。何故かは不明だが、魔力単体よりもイメージ通りにこの何か分からない力は動いてくれる。例えば——熱いと感じるけど、外傷はない劫火だとか。

「——滅べ」

滅べとか物騒なこと言ってるけど違うから。ちよつと気分が乗つて言いたくなつただけだから。ホントに滅んでなんてないから。決

して隠してた中二とかじゃ——。

「……とか自分に言い訳してたらケルベロスがショック死してたわ」

「いや、やりすぎだろ！」

「生け捕りにできなかつた……。ごめんなさい、アジア。貴方に上げようと思ってたのに」

「い、いえ。小猫ちゃんに貰ったので大丈夫です。……お父さんたちが許してくれるかちよつと心配です」

「サイズ的に無理だからな、アジア！」

はあ。またドジした。鬱になりそう。

——私を変えた張本人。奴良リクトが戦っている上空を眺めて、私は深いため息を吐いた。

## 対峙する日

「つく……私は、一体……」

「あら、目を覚ましたようね」

「っ!? リアス、グレモリー！ そうだ、私は——!」

紅髪の悪魔。そしてその眷属。目を覚ましたバルパー・ガリレイが目にしたのはリアス・グレモリー以下眷属だった。

バルパーはリアスの『兵士』である奴良リクトに気絶させられ、境界の外に放り投げられた。彼は現在進行形でロープで縛られ、身動きが取れない状態で居る。隣にはぐったりとした様子で、同じく縛られているまだ目を覚ましていないコカビエルもいた。

「エクスカリバーっ！ 私のエクスカリバーは何処へ行っただッ！ 私が半生をかけて研究してきた聖剣は——」

「やあ、バルパー・ガリレイ。コレのことか？」

聖剣の残骸を持つてくるのは、気絶から復帰したゼノヴィアだった。

「——くっ！」

「貴方の最高傑作は私の『騎士』が壊させてもらったわ」

「悪魔どもめっ……こんなことが許されるとでも思っただッ——!」

「——黙れッ！」

「っ……!」

縛られ、激昂するバルパーの首元に剣先が添えられる。木場のエクスカリバーだ。

「……お前の半生を費やした研究なんて知らない。知りたくもない。

——ただお前には言いたいことがあるッ！」

「ふ、ふん……お前のような悪魔にわかるわけがない——私がどんな思いでエクスカリバーの研究をしてきたのか——」

「……覚えていないのか、僕の事を。いや、覚えていないのも当たり前か。……所詮僕たちはお前のモルモットだったからなッッ!!」

剣先が喉に喰い込み、木場の持つ剣に血が一筋流れる。バルパーの顔にそれに対する動揺の色はない。

「そうか、お前はあの時一人逃げ出した……」

「あの時の名は捨てた。僕は今、木場裕斗だ」

「ふ、ふはははは！　なんということだっ！　あの時子供たちを見殺しにして逃げたお前が仲間たちの敵討ちか！　そうかそうか！」

「黙れっつ……!!」

血の流れは勢いを失うことなく、決壊しかけのダムのように傷口から流れ出る。

「……それにしてもこの剣……聖なる力も、魔の力も感じる。それに——エクスカリバーだと……？」

「っああ、そうさ。……これは聖魔剣エクスカリバー！　お前の成し遂げなかった七本の聖剣を組み上げたあるべき姿のエクスカリバーさ……！」

「そうか、なるほど……魔王だけでなく神も……。聖と魔のバランスが崩れて——いや、今更これを言っても仕方ないな。……それにしてもエクスカリバーか、そうか」

「何を言っている……？」

「……いや、なんて皮肉だろうか、と思つてな」

止めどなく血は流れる。しかし剣先は首元から離れていた。

「——私が焦がれ、自らが振るいたいと思つていた聖剣が扱えないと知ったときの絶望。そして自らが扱える術を見つけ、行った聖剣の因子の蒐集。全て終わったときにはもう聖剣を振るって退魔を為す体力もなかった。……それがどうだ!?　因子のためだけに集めた子供たちの中にいたのだ！　始末し損ねた子供に因子が行き渡り、そして私の望む結果を為したお前という存在が！　そして私に恨みを持ち、エクスカリバーで一薙ぎにして私を殺そうとしている——ッ！」

「……っ」  
バルパーは半狂乱に笑う。自らを噛い、そして泣いていた。——始めは憧れだった。エクスカリバーには劣るものの、聖剣を振るって悪い存在を浄化するエクソシストの姿。自分もなりたいたいと思った。

——悪しき存在に、正義の鉄槌を。

正義という名実の元に殺すことが出来る存在がいるということ。

そして男子なら一度は抱くであろう、剣を振るい勸善懲悪を為すという夢。成長する過程で迫られる、一を殺し、その他大勢を救うという取捨選択。それが聖剣計画という人工の聖剣使いを生み出す研究だった。……バルパーもまた正義という名の悪魔にとりつかれただけなのかもしれないが、悪徳を働いたことに違いはない。

「さあ、殺すがいい。そうしたかったのではないか？　もう、私にはこの世に未練もなにもない……」

「そうか。なら僕が——ッ！」

「——いいえ、私が許さないわ」

木場が振り上げたエクスカリバーを下ろそうとしたとき、リアスが腕をつかみ、止めに入った。

「ただ殺すことなんて——なんて甘え」

「なに……？」

「部長何を言ってる……」

「貴方に出会わなければ祐斗はずっと人間でいられた。確かに私にとっては可愛い弟のような存在が出来たから良かったのかもしれない。……でも祐斗は違う！　貴方、一体何人の人生を無駄にしてきたと思ってるの？　『もう未練はない』『はいそうですか』それで殺されて……それで罪が拭えるとでも思っているのかしら？　——ふざけないでッツ!!」

「リアス！　落ち着いて！」

「そうです部長！」

一喝と共にリアスの体からドス黒い滅びの魔力が迸る。その迸る滅びの魔力は少しずつ地面を抉り、空気すらも消滅させて真空状態を生み、一種の引力の様な物が発生していた。副部長で『王』の側近ともいえる『女王』の朱乃は思わず立場を忘れてリアスを諫める。続いて『兵士』のイツセーも声を上げた。

「ごめんなさい、二人とも。……いいかしら。貴方は生きてその罪を背負い、一生悔やみながら生きていくの。即死罪なんて私が許さない。死罪にするとしても、その時は私自ら出向いて身体の端から少しずつ削って殺してあげる……」

「……ふふふ……悪魔が生きて罪を償えという。まるで優しく厳しい聖母マリアの様だな。益々この世界のバランスは崩れているようだ……」

「私は、ただ貴方がしたことを許せないだけよ……それにあなたの口から聖母だなんて反吐が出るわね」

「——神は死んだ」

その一言で場が凍った。教会の戦士であるゼノヴィアと、今尚信心深い元シスターであるアーシア。そして一応は信徒であった木場が凍り付く。

バルパーの言葉は奴良リクトの居た世界ではニーチェが言った言葉だ。無論それは信仰的な意味で。だが、この場では違う。この世界では意味が違う。神は実在していた——神話が世界の裏の歴史でもあり、聖書はその歴史書なのだ。その神が死んだ。

「もう一度言うぞ。神は死んでいる。気づかないのか？ 相反する聖と魔が一つの剣に宿り、それを世界が受容する事が。魔王と神が生きていなければ有りえないのだよ。神が生きていれば、その信仰を退魔の聖なる光に変えるシステム上。魔力が相反する明確な敵の力である光力を受け入れる事が」

「バルパー貴様、出鱈目を言うなッ!!」

「嘘ですっ！ 神様は生きて——!」

「元聖女のアーシアと教会の戦士か。なら聞くぞ。生きているならば、地上に出て活動する悪魔を見逃しているだろうか？ 悪魔が人間に混じり、学園生活を送ることができるとでも思うか？ 悪魔召喚の魔法陣の書いてあるピラを配れるとでも？」

「そ、そんな——神様は、もう死んでっ……?」

「アーシアー!」

アーシアが崩れ落ちた。天野は彼女を受け止め支える。イツセーも傍に駆け寄るが、震えるアーシアへどうすればいいか戸惑っていた。アーシアと同じくゼノヴィアもうわ言のように嘘だ嘘だと呟いている。

この中で動揺を示さないのが二人。リクトと天野夕麻——元墮天

使であり、大昔の戦争を経験した、レイナーレであった彼女は苦い表情をしている。リクトはしまったな、という表情をしていた。

「知っていたのね。夕麻、リクト」

「……ええ。予め教えておけば良かった」

「まあな。……黙っててすまない」

知ってしまったとはいえ、どうするか。

どうしようもない、というのがリアスのその場での判断だった。魔王という役職についている以上、兄は知っているはず。直接聞くのが一番という結論になった。これ以上は付き合ってもらえない、と再度バルパーはリクトに気絶させられ眠らされた。

——突如として結界が割れる音がした。

「……なに!?!」

『あの墮天使のお迎えらしいぞ。——相棒、白龍皇だ』

駒王学園の敷地に入ってきたのはリクトと同じ光翼を持つ、銀と青の鎧の持ち主。

「……終わっている？ 今代の赤龍帝は最弱と聞くが……コカビエルを倒せたのか？」

『いや、ヴァーリ。あの転生悪魔じゃない。——あつちに俺と赤龍帝の気を持った奴がいる』

「お前が俺のライバル……!」

リクトが銀色の鎧——ヴァーリと呼ばれた者に睨まれ、イツセーがヴァーリを睨む。

しまっていたイツセーの籠手が出現し、宝玉が輝き声を発した。

『俺の事は無視か、白いの』

『嗚呼、赤いの。起きていたのか。アイツはなんだ。俺とお前が——いや、何故そもそも二つ存在する?』

『可能性世界から来たらしいからな。——お前は雌だそうだ、白いの』  
『……冗談でも勘弁してもらいたいな……』

『知ったときは笑わせてもらった……ククク』

『……ヴァーリ。赤いのを殺そう』

まあまあ、と鎧に宿る龍を諫めるヴァーリが苦笑しているのは鎧の上からでもわかった。イツセーのドライグはクツクツと笑って、イツセーに微妙に呆れられている。

『――妾わらわからしたら雄の自分が信じられない』

『そういつてやるな……俺も信じたくない』

『ただ、ドライグよりかは美形に決まってる。……浮気してもいいかなあー、ねえ、ドライグー?』

『……すまん。ホントスマン。悪かったと思ってる。だから勘弁してくれえ……修羅場は嫌だあああ!』

『どうしよつかない……』

リクトの持つ光翼、籠手からも声が流れた。夫婦漫才をしているかのように、同じ神器でも決定的に違う部分にリクトが苦笑いした。

『ドライグ、お前も尻に敷かれてるじゃないか。――どうだ? 違うとはいえ、俺に負けた気分は?』

『……うるさいぞ、アルビオン。アレと俺は別だ。だから違う。俺たちの戦いはこれからだ』

『……その言い方は不味くないか? まるで永遠に終わらないような――』

『……。……それもそうだな』

――二天龍が知ってるのかよと、ヴァーリ側のアルビオンの発言理由がわかる若干名は心の中でツツコミを入れた。

『――和気藹々としている中すまない。……その二人を引き渡してもられないか? アザゼルに頼まれて二人を捕えに来たんだが……』

『……二人目の白龍皇ね。コカビエルとバルパー・ガリレイの引き渡しには応じられないわね』

『二人目、というのが少々気に障るが。そうか……――では、実力行使になるが?』

『……! そう、ね。――リクトにイツセー……二人ともやれそう?』  
「禁手はまだ使えますが……俺は無理っぽいです。勝てそうな気がしません」

「……やろうと思えば今にでも無力化出来るけど、それやったら色々



と問題起きそうな気がする。ここは大人しく引き渡すのが最善、と進言するよ」

イツセーは力量の差で。リクトは無用な問題を減らすため。二人は争いを避けた。

「そう。……いいわ、引き渡しに応じる。名前は——」

「ヴァーリだ。少々暴れたかったが、まあいい。どうやらその二天を従える男だけでなく、お前も禁手が使えるようだ。——戦う楽しみが増えた」

「……ッ！」

ぞくり、とコカビエルとバルパーを担いだヴァーリが言った言葉にイツセーは怖気を催す。そのセリフは戦闘狂の台詞。あんなのと戦わなければいけないのか、とイツセーは戦慄した。ヴァーリが振り返る。

「……ああ、そうそう。名前を聞いておこう。スケベ顔のお前と二天のお前は？」

「……兵頭一誠だ」

「奴良陸人」

「ふっ……そうか。よし、覚えた。ではまた会おう二人とも」

『ではな、尻に敷かれていたドライグ』

『ああ、女の子になってたアルビオン』

『『ああ？』』

精神のみとなった状態でメンチを切る二匹をスルーし、首謀者二名を担いだヴァーリは去って行った。

「——大丈夫ですか皆さん！」

結界を張っていたソーナ・シトリーが飛んでくる。

それを見て、オカルト研究部の気が抜けた。コカビエルを遥かに凌ぐ、まだ勝てないだろう唐突に出会った相手。向けられたプレッシャー凄まじく、リクトを除く全員が気を張り詰めていた。

——ともかく一段落。

疲れた様子の悪魔たちは自らの家へ。ゼノヴィアもまた、木場に付き添われながら未だ目を覚まさない紫藤イリナの元へと帰って行く

た。

## 停止教室のバリアントロード プールに入る日

コカビエルの襲撃からしばらくが忙しかった。

いや、コカビエルを引き渡した後から結構大変だったのだ。部長殿がサーゼクス・ルシファーの到着と共に、神の不在について問い、そのまま何故、俺の持つ二天龍が別の世界のモノであったのかということについて問い詰められた。それから何故神の不在を知っていたのかも。

サーゼクス様の目の前での事だったので、苦笑いしかすることが出来ず。……口八丁で誤魔化せなかった。事実を織り交ぜた虚構でなんとか、といったところだ。イツセーのドライグに教えるのは失敗だった、と後悔しながらリアス部長のお叱りは受けた。まあ、神の不在はそれとなく、天野に作り替えるときに不可抗力で知ったと誤魔化しておいたけど。

『もしかしたら君の持つ、幾つもの神器は全部異世界のものかもしれないね』

——というのが俺の神器に関するサーゼクス様の見解。見事に真実を当てられたのだが、態々取りに行ったのはバレてないだろう。……うん。

それから——。

『——今日から悪魔となった。ゼノヴィアだ。以後よろしく頼む』

『……ホントになりやがった』

まあ、案の定ゼノヴィアが悪魔になった。傷心気味の所に付け入るあたり、部長殿のやり口がえげつない。流石悪魔と言ったところだろう。

——むしゃくしゃしてやった。

——反省はしているわ……でも、後悔はしていない！

ゼノヴィアとリアス部長のお凸にチョップが入ったのは必然だったのだろう。実行はアールシア。大体部長が悪いのだけど、彼女も彼女

だ。もう少しよく考えて行動すべきだった。でも行き場のない彼女に甘い誘惑をするリアス部長はマジ悪魔。

一応、ゼノヴィアには人間に戻せるかと進言したが「一度決めたことだ、二言はない」と男らしい返事をもらったので何とも言えない。その日一日「私、怒ってます！」なオーラを振りまきながら、元氣になったアーシアの姿が部室にあった。

まあ、でも怒っている彼女はアレでも、部長に言われてから三日ほど悪魔になるべきか悩んでいる。……のだが、人間やめる覚悟を決めるには早すぎるので、知っている者達からしてみれば少し自分の事言えないのでは、と首を傾げるところだ。

自分が早計過ぎた事への罪の意識が無意識下にあるのかもしれないが。

小猫ちゃんによって丸刈りにされたケルベロスと戯れてもいたので、神の不在に関するシヨックは表面上、大丈夫そうに見える。

で、件の実行犯であるコカビエルは、今のところバルパーと共に『神の子を見張る者』預かりだ。

天使、悪魔への謝罪がある際には処遇が決まっているだろう。

まあ、コカビエルとの戦後処理は概ねそんな感じだ。

で、存在自体がオカルトな我々は全然オカルトの研究なんてする気は無い。

——今はせつせと冷たいプールに入るため、苔の生えたプールの掃除を頑張っていた。

報酬、プールを真つ先に使って遊んでいいという事で、本来生徒会の仕事であるプール掃除を任された。

そして今は、プールに水が張られて自由時間。

「リクト、あなたの彼女連れてきてもいいわよ？」

「マジで？」

「ええ」

んー。部長のお許しは出たけども。

「……じゃあ想い人が居る部長の前で、俺は人目を気にせずイチャイチャしていいんですね？」

「……やっぱり駄目。貴方たちイチャつき始めたら殺意を抑えられるかどうかかわからないもの」

「はっはっは。まあ、そういうだろうと思ったので連れてきませんよ」  
やはり必要以上に接触はさせない方がいいだろう。

この前はそれとなく情報を晒して、黒歌の主殺しについて調べてもらったけど——彼女、『猫俣奏音』が黒歌であるということに、勘付いているだろうなってのはなんとなくわかる。

そうなると副部長の朱乃さんも知ってる可能性は高い。

——証拠として二人の小猫ちゃんを見る目が違うし。

……あ。

「……イツセーとゼノヴィアがボイラー室に——つてもう行つてたか」

目ざといな。そして早い。

ボイラー室の扉に風穴空いてるけど、修繕費とかどうすんだらうね。

いや、魔力で治せるから経費掛からないのかな。

「お義兄さん。あの……泳ぎ教えてもらっても良いですか？」

「構わんよ。……一つ、白音ちゃんに話しておきたいこともあるし」

「……はい」

水の中に浸かり、体をほぐしてから小猫ちゃんが入ってくるのを待つ。

「まあ、でもまずは泳げるようになってからだな。じゃ、まずは淵に腰かけてバタ足の練習」

「はい」

ばちやばちやという音がプールの水際から響く。

「泡を立てないように動かすのがコツね。出来るようになったら今度はビート板を持ってきて」

「持ってきます」

「そっか。なら十分、いや五分くらいかな。バタ足しててね」

はい、と頷いて小猫ちゃんは足を動かす。

水の中での足を動かすコツを覚えたようで、水面があまり波立たないようになっていく。

もういいだろう、と止めさせて水の中に浸からせた。

「……お義兄さん、それで話つていうのは……」

「ああ、うん。まずは白音ちゃんに、先に謝らないといけないことがあるんだよ」

「はあ……。何か私に悪い事でもしたんですか？」

「まあ、気づいてはいないみたいだけどね。俺がさ、君のお姉さんに向けての好意じゃないけど……ヒトとして、俺の事は好きかい？」

もう止めていいよ、と言つてバタ足を止めさせる。

ビート板を持つて彼女はプールの中に入った。

「ええつと。……まあ、それなりに。……それが何か？」

さて、言わなきゃいけない。

……俺は過ちを認めて。彼女には俺の犯した過ちを認識させるべきだ。

「……実は、恋愛から親愛の感情になるようずらして、思考を誘導した。白音ちゃんが、俺に恋心というべき感情を抱かないようにした」

「その、急な話で驚きなんですけど……それは」

「最低で最悪で、吐き気を催す程邪悪といつても過言でない、洗脳行為に近い行いだよ」

リアス部長も兵藤家のご両親にやってしたが、アレと同じ行いだ。

直接洗脳して居るわけではない分、痕跡も跡形もなく残らないため、自分から明かさない限り判らない。

「聞かせてください。……どうしてそんなことをしたんですか？」

「兵藤みたいにな、俺は欲望に忠実な悪魔じゃないんだ。……いや、確かに黒歌一筋だし、俺は全力をもって彼女を愛したい。そういう欲望はある。……でも別の誰かにも愛を注ぐなんてこと、俺には出来そうになかったんだ。だから」

「……私が、お義兄さんの事を好きにならないよう——あのライザー戦前の合宿の時にしたんですね」

「あの時、格好よく見えたって言ってたね」

「はい。先輩がかっこいいなあ、と思ったのに……でもなんだか異性として好きだっと思って思えなくて」

ずらすということ。

それは強力な薬には副作用があるように、ずらすモノに引つ付いているモノが多く、大きいほど後になって影響が出てくる。

都合よく、無かったことに出来ることもあるけれど……特に人の心、考え方が関わってくると、どうしても関わった者達は違和感を覚える。

違和感を感じないという風にずらすことが出来るが……一つ一つをずらすという事は面倒な事この上ない。

仮に全てを都合が良いようにずらしたとして、最終的には、概念をずらしたという事になる。

概念をずらすことは理を変えるという事。

万人が黒を白だと何の疑問を抱かず、思うようになるということだ。

誰も気づくことのできない矛盾を内包してしまう。

この矛盾は目に見えるモノの方が小さく、目に見えないことへの影響が大きく。

『ずらしの能力』はバタフライエフェクトのようなもので、『ずらす』ということだけでは完璧ではない。

……だからなのだろう、自分が『私』になったのは、『ずらせる』ようになり、『揺らぎ』になった。

でも『私』が『私』のまま人になることは不可能だったのだ。

そもそも、人から外れた存在である『私』<sup>揺らぎ</sup>が人になろうだなんて、聞けば呆れるほど無理な話だ。

だからこそ『私』は妖怪が混じっているとはいえ自身を人に『ずらし』、変えたんだろう。

「それは、俺がやったんだ。……だから、改めてごめん。いや、ごめんなさい。俺は……人として、やっちゃいけないことを白音ちゃんにやってしまった。……許してくれとは言わないけど、どうしてやった

のかはわかって欲しい……」

「……そうですか」

自分勝手に、利己的で。自己満足の塊である自分。

白音ちゃんに謝る事もまた、自分の都合だ。

自分自身が罪の意識から逃れるため、ケジメをつけるためなのだ。

「別に良いですよ、お義兄さん。こうしてちゃんとやってくれましたし、何よりも悪魔になるくらいお姉ちゃんの事が好きなのはこの前わかりましたから。……だから、余り自分を責めないでください」

「……でも」

「でも、なんて言わないでください。私が許すって言ったら許すんです。それに間に入る余地が無いくらい二人とも好きあっているのに、私がお義兄さんの事を好きにならない方がいいに決まっています。——先輩の力でお姉ちゃんに関わる事を解決しないのも、何か理由あつての事なんですよね？」

「ああ、そうだよ。この世の出来事、良し悪し問わず解決できる。完結させれる。でもそれをやってしまったら全てが無意味、無価値で終わらせてしまう」

黒歌が白音ちゃんのため、主殺しを決意して殺した事。

それを、ちよつと「無かつたことしよう」と思つて第三者である俺が解決するということは、黒歌の行いを否定するということだ。

——人が人らしくあるために。

自分が自分らしくあるためには、七大罪の「怠惰」を甘んじてはいけない。

『揺らぎ』である『私』が自分と同じように黒歌を愛したのは、人になりたかつたからだ。

考えることを出来るのが人だ。色々な理不尽を抱える世の中でも愛の意味を知ることが出来る生き物。

『私』はそんな、人になりたかつた。

「……甲斐性さえあれば、こんなことしなかつたと思う。……本当にごめん」

「別に、私先輩のこと異性として好きだなんて思つた事無いですし、



謝らないでくださいって。あ、でも勿論、先輩の思惑通りお義兄さんとしてはかなり好きですよ？」

「……うぐう」

「さあさあ、唸ってないで泳ぎを教えてくださいお義兄さん」

しばらく弄られるな、と思いつながら小猫ちゃんを見ると、くすくすと笑っていた。

ため息を吐いて、朱乃さんのイツセーへの悪戯が原因で起きた部長職二人の喧嘩を見て、もう一度ため息を吐いた。

余談だが、この後滅茶苦茶会長に怒られた。